

517  
45



始



577-45

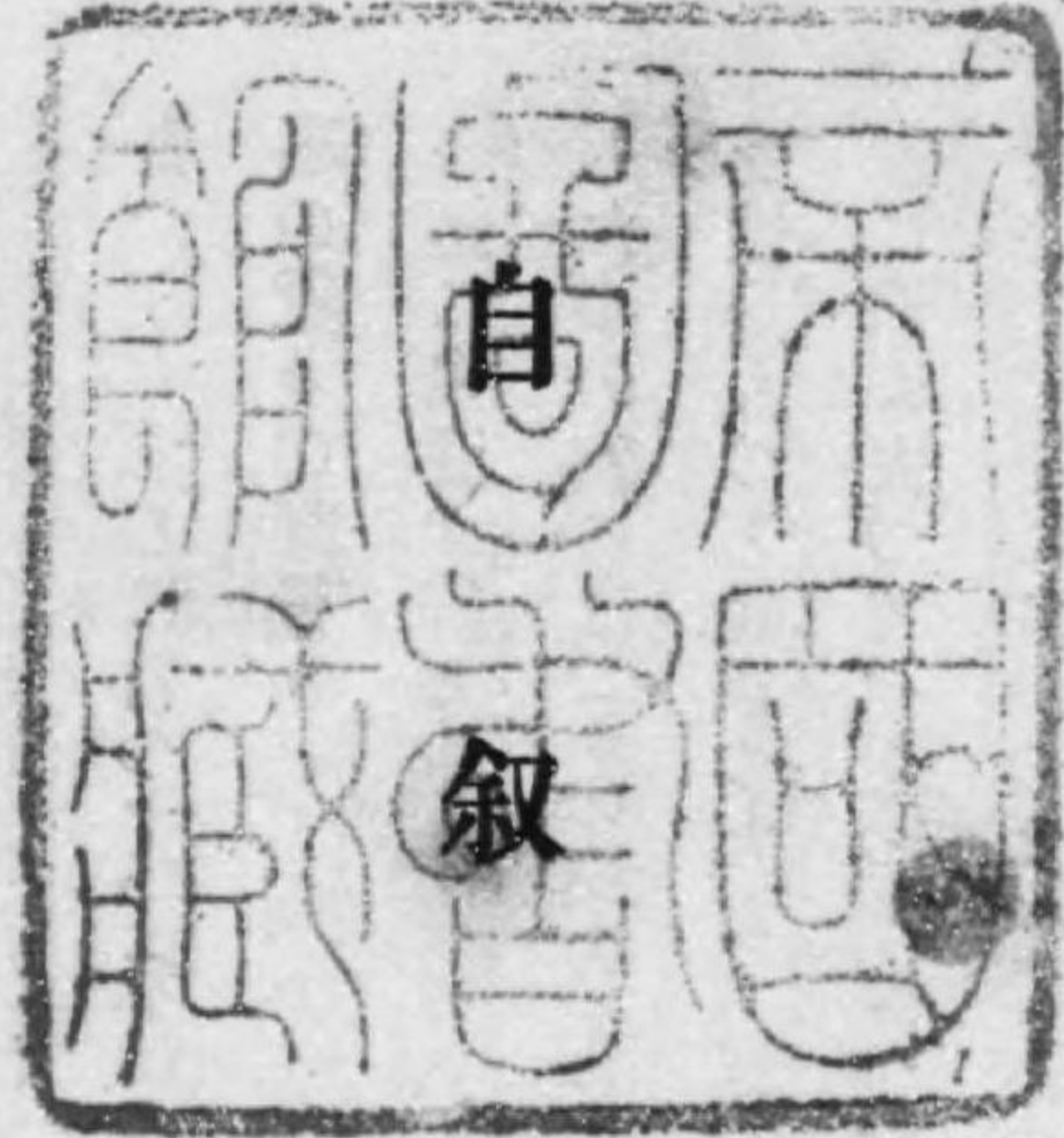
傳叙自夫資島宮  
 刻彫像裸



1

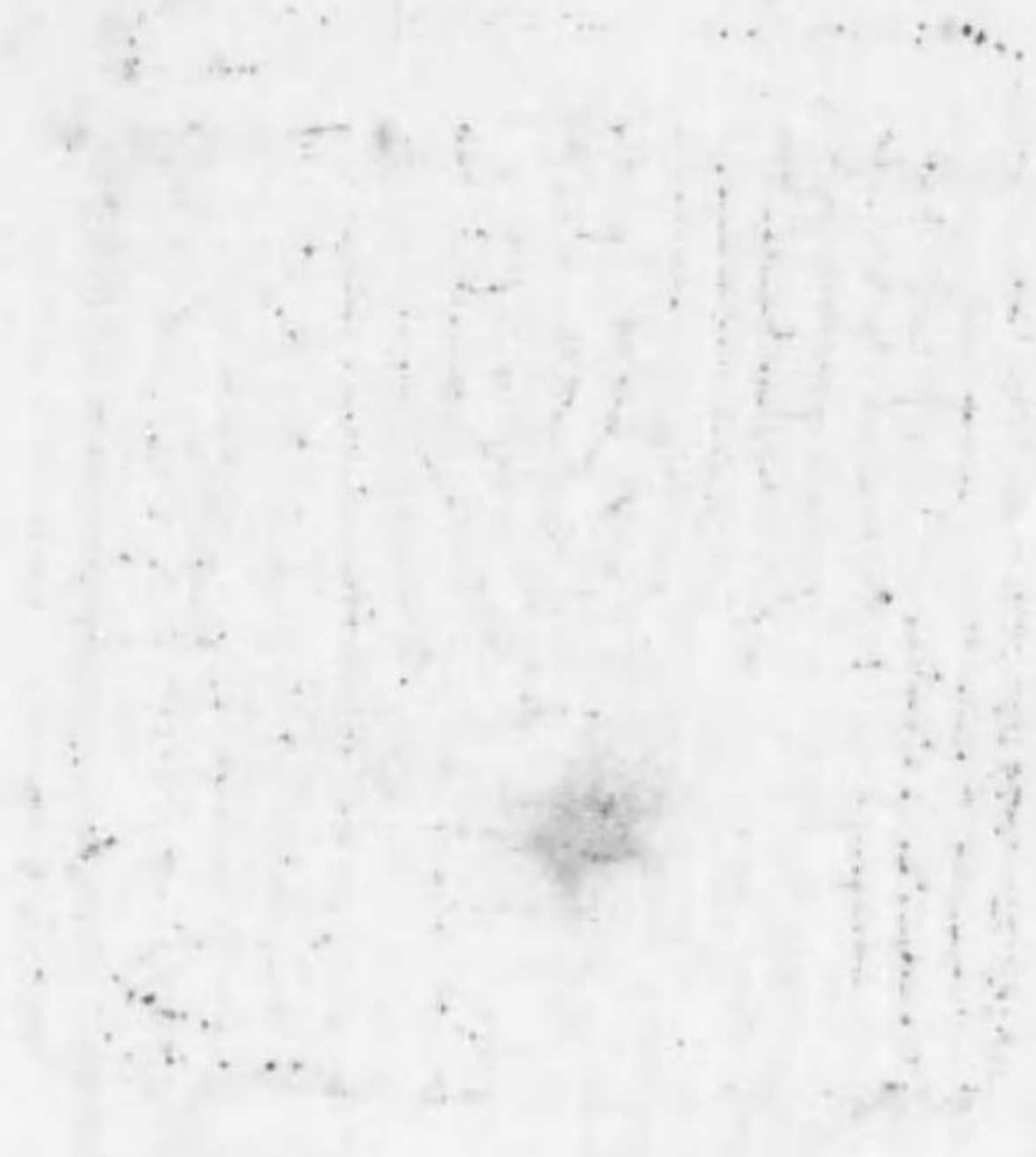
社 秋 春

大正  
 11. 11. 11  
 内交



傳

宮島資夫著



## 第一章

記憶——記憶と云ふものは本當に不思議なものだ。と、いま私のこの貧しく慌しい自叙傳を書かうとするに當つて、私は今更ながらにまたこんな事を考へる。私の過去に於て出會つた事の數々の記憶をいま新しく再びまざくと想念の中に蘇らせようと試みるとき、私は矢張り今迄に幾度か繰り返し繰り返し、或ひは悲しみ、或ひは喜んだ、その時々の場合に應じて追憶した事の外には、私の頭の中に何物も再現して來ないのである。もし私の良心がもつと強く、感受性がもつと鋭かつたならば、今こゝにありくと浮んで來る記憶の如きはとうの昔に幻のように消え去つて、もつと變つたまるで別種な事實の印象が、私の心の底深く烙きつけられてたののかも知れなかつたのであつたが、然し現在の私には、私の記憶に蘇る事の外には、その時その場合の事を、如何に感じ、如何に心の底深く鑄り附けておかなければならなかつたかを思ひ出すよすががさへ失つてゐる。斯くの如くして、私の第一の記憶は、第二に出會つた事實に對する判斷の根底となり、斯くして記憶は現在を律し、現在はまた記憶として私の頭の中に深く

残つて行つた。斯う云つたからと云つて、勿論私の現在記憶に残つてゐる事のみが、私の過ぎて來た道を深く運命づけたものと云ふのではない。微細な記憶にも残らないような數多くの事どもが、無意識の中に私を支配して、私をして様々な行動を執らしめたのではあらうが、それ等の事の堆積のクライマックスが、私の記憶の中に鮮かに残つてゐるものとしか思はれないのである。

それで私は、私が此の世に生れて先づ第一に如何なる印象を自分の心に深く鑄り附けたかと云ふ事を、自分でも幾度か尋ねてみた。けれどもそれは幾度繰り返して自分の心の底深く探つて見ても、私の記憶に残る最初の事實より以前には遡る事が出来なかつた。私が何時この世に生れて來たかも自分では知らないように、私の第一の記憶以前の事は、まるで暗黒な神祕の中に隠されてゐる。斯くて私は何うして今日私が斯る性格の人間とならなければならなかつたかの原因を、知り得る限り探ぬべき手段もそこに盡きてゐるのである。自分の事でさへよくは知り得ない人間である。その他の事が、何が深く委しく知り得よう。

春になれば春のようにも思はれる、秋になると秋のようにも思はれるが、それは夏でも冬で

もない日の夕暮だつた。高い檜の木で囲まれた塀の下に来て、私は乳母の背中に負はれながらしくしくと泣いてゐた。檜の木の下はかなめか何かの垣根になつてゐたように私の頭には残つてゐるが、その木の葉を越して中の座敷の方からは、ランプの光が懐かしげに輝いてゐた。それは私がその日まで全く見た事もない家であつた。けれども光の洩れて来る座敷の方からは、父親が笑つてゐる大きな聲が聞えて来た。

私はその日生れてから初めて、母親の膝を離れて乳母の背中に負はれたまゝ、一日そとで過したのだ。朝方に家を出た時には母親のそばを離れるのが、いやであつたのだらう。三四丁ある四谷の大通りへ出るまで乳母の背中で泣き通した。それで乳母は通りへ出るとすぐに玩具屋へ入つてポンプの玩具を一つ買つてくれたのを憶えてゐる。けれどもその日の夕暮までを私はどこで過したのかは私の頭に残つてゐない。そしてその高い檜の木の並んだ垣根の外に来て、木の葉越しに座敷の光を眺め、父親の聲を聞いたとき、私はまた何だか悲しくなつて泣き出した。

『ほらね、こゝが今日から坊ちゃんのお家ですよ』と乳母は背中の上で私を二三度ゆり上げた。私はさうして垣根のそとに、いつまでもいつまでも立ち盡してゐたように思はれる。それから

後の事はいつどうして家の中に入つたかも憶えてゐない。

春か秋か知らないが、三つのおきのことであつた。

私の記憶はそれつきりまた途切れてゐる。それから後の日々をどんなにして送つたか思ひ出さうと努めてみても、忘れ果てた日の事は、生れぬ前の世のことのように思ひ出の端緒さへ失つてゐる。けれどもかうしてちつとその當時の事を考へてゐると、何となく陰氣で悲しい日がつゞいてゐたようである。その茫漠として記憶を失つてゐる日の間の事が、たとへばあの灰色雲に閉ぢられた、陰鬱な冬の日のような寂しさが、記憶の絶え間の空隙を閉ぢ込めてゐるようになさへ思はれるのだ。

その頃の私の家はそれほどに、いつも陰氣でざはついて、それでゐて何となく喪に閉ぢられた家のようにいつも寂しく沈んでゐた。

それといふのも凡て家庭の暴君であつた父親の我儘から起つた事である。この頃になつて、殊に私の友人の家などを歩いてみても、あんな馬鹿けた家庭と云ふものはどこへ行つても見た事はないが、その頃の私の家といふものは、父親ばかりが大きな息を呼吸して、思ふが儘に笑つたり怒鳴つたりして暮してゐたのだ。母親も二人の姉も召使も、父親が家にゐる間は、本當

に大きな口を開けて息一つする事も出来ないほど小さくなつてちよこまつて暮してゐた。余程後ちになつてから見たり聞いたりしたことだが、その頃も父親は朝起きるとすぐに風呂を沸かさせて、朝湯が濟んでからでなければ食事をしなかつた。さうして役所に出るまへの支度をするにも、ネクタイ一つですら母親の手をかりなければ結ぶ事が出来なかつた。

その家に住んでゐた一年ほどの間でも、母親はきつと、氣難かしい父の機嫌をとる事と、口矢釜しい食物の支度をする事丈けに、心身をすり減らして勞れ切つてゐたに違ひない。いつの日、どうと云ふ事ははつきり憶えてゐないが、その頃の母親は水氣の潤れた草のように、いつも力なく萎れて、藥壇にばかり親しんでゐた。考へれば考へるほど、その頃の私の家庭の事は、今の私には不思議に思はれるほど陰氣臭いつまらない家だつた。尠くも父と母との間には、夫婦らしい愛といふものがなかつたように思はれる。父は自分の妻である母を奴隸のように叱り飛ばし怒鳴りつける。その原因と云ふのも、朝の出動前に入る風呂の加減が悪いとか、晩酌の茶が酈いとか、同じような物が二た晩つゝいたとか云ふ事で、どんな大それた罪惡をでも犯したかのように怒るのである。だから母親には、父はたゞ恐るべき無上の權力を持った暴君としてしかその眼に映らなかつたに違ひない。そんな風でどこに彼女が胸の底深く秘してゐる女らし

い愛を捧げ、それに報はるゝものを得べき隙を見出す事が出来るだらう。考へて見ても生甲斐のない生活である。

余程のちになつてから聞いた話だが、私が七つ八つになるまでは、母親は毎日々々、今日死なうか、今夜自殺しようかとそればかりを考へ通して暮してゐたさうだ。それに私の父の郷里は岐阜の大垣で、父の兄弟が、三人と、妹が一人東京に来て住まつてゐたが、どれもこれも皆な同じ國ものと夫婦になつてゐて、東京の者を妻にしてゐるのは私の父ばかりであつた。それが爲に母親は父方の親類のどこへ行つても、水の中に油の交つたようにのけ者にされてゐた。おまけに父の方にはまだ、舊幕時代の田舎侍が、幕臣や三家の臣に對して有つた妙な僻みが残つてゐた。母が父の無理な小言に堪えかねて、何か少しでも言ひ返すと、『貴様は幕臣の娘と云ふのを笠に着て、夫を馬鹿にするかッ』と怒鳴りつけたのださうである。今の私達にしてみれば考へるだけでも滑稽な言葉である。けれども母はそれがためにどれほど苦しんだのか知れなかつた。しかも彼女は、父から幕臣と云つて罵られる父も母もとうの昔に失つてゐた。嫁に來た女が、たゞ一つ愚痴をこぼし、不運を嘆いて慰めを得る里方には、腹異ひの祖母と、腹異ひの妹とがゐるだけである。それに又た彼女は父の家を飛び出して、獨立して生計を立てるに足

るような教育も受けてゐなければ、恐ろしい父との間だには、愛する子供が澤山に生れてゐた。彼女の撰ぶべき道は、たゞ死より外にはなかつたが、子供に對する執着がいつもそれを引き止めた。母はその愛と死との間にさまよつて、毎日々々泣き暮してゐたのである。

いつの日如何なる時の事とも憶えてゐないが、父は役所に行き姉達は學校に行つてゐた時の事らしい。女中達もゐるのかるないのか判らなかつた。ガランとした座敷の中には誰れもゐないで椽側に靜かな日が當つてゐた。私はそこでたつた一人で遊んでゐた。その時その椽側に母が來て私を抱き上げると堅く抱きしめて、いきなりさめんと泣き出した。何の事が判らないが、私も急に悲しくなつて大きな聲を揚げて泣いた事を、霧の中に浮び出た島のように、ほつねんと憶えてゐる。恐らくそれはその前後の記憶の途絶えてゐる私の生活のクライマックスであつたのかも知れない。

その時分、私を何より喜ばせてくれたのは、丁度その家の前に、母の伯母の山崎と云ふ家があつた事であつた。私には大伯母に當るその老女は、その頃からもう白くなつてゐた髪の毛を切り下げにした、品の好い優しい人だつた。大伯母の息子の山崎も、穩なしい好人物で、矢張りどこかの役所に勤めてゐるが、晝の中はいつも留守であつた故か、その頃の山崎については

少しも記憶するところがない。けれども私を一番喜ばせたのは、丁度その時分に山崎が迎えたばかりのお八重さんと云ふ若いお嫁さんであつた。お八重さんはまだやつと十六か七で山崎のそこへ來たのだといふが、それほどにあどけない娘だつたに違いない。かなり年をとつてからも、色の白い綺麗な人であつたから、娘の時分にはきつと美人だつたらうと、私は今でも思つてゐる。

父親が役所に行つてしまつて、家の者は誰れも彼れもほつと一息つく頃になると、私は母親にせびつてはお八重さんの所へ連れて行つて貰つた。そこでも矢張り主人が留守の姑と嫁は、明るい二階で針仕事をしてゐるのだつた。「私はお八重さんの綺麗な顔を見るのが好きだつた。父が役所に出た瞬間から、もう晩酌の茶に心を苦しめられてゐる母親が、『さ、もう歸りませうよ』と云つても、私は中々肯かなかつた。さうして

『お嫁さんと一緒でなければいやだ』と駄々をこねては母を困らせて、とう／＼お八重さんに負はれて歸つて來た事が幾度かあつた。あんまり暗く寂しく物悲しい家に育つてゐる私には、明るく美しいお八重さんの感觸が何より嬉しかつたに違いない。毎朝のように母親に

『お嫁さんのそこへ連れてつてよう』と云つてねだつたさうだ。さう云へばそんな時に母親が

迷惑らしく、けれどもそのときばかりは何か可笑しげにこくく笑つて、私を背負つて伯母の家へ連れて行つてくれた事をかすかに憶えてゐる。

私の家の裏隣りに、小ぢんまりした二階家があつた。なんでも父が持つてゐた家作だつたさうだが、その家には若い夫婦者と女中が一人住んでゐた。その主人もどつか役所に勤めてゐたのださうだが、その故か晝の中は何となく恐いほどひつそりと静まり返つてゐた。私はその家は余り好きでなかつたが、晩の支度に母が忙しくなつてくると、若い方の女中に背負はされて家を出されるのであつた。乳母はその家に来ると間もなく、母の里方に子がないために、一つ違ひの姉をやつてあつたのが、まだしきりと乳母を慕ふと云ふのでその方へ行つてしまつてゐた。その乳母にはその後かなり世話になつた事もあつたが、乳もロクく香まない故か、今でもそんなになつかしいとは思つてゐないが、それが爲に私がいつも背負はされて表てに出る若い女中は、きつと裏隣の家の臺所口へ行つて何かべちやくしやべつてゐるのが常だつた。そんな時に、時々二階から、その家の細君が降りて來ることがあつたが、蒼白い寂しい顔をした人であつたように私は憶えてゐる。私には何となくその細君が恐ろしかつたものと見えて、何か愛想を云はれたり、あやされたりする度に、いつでも泣き出したと云ふ事だ。まだろくに

物心のつかない私にも、何か異様なものをその人から感じたのか、それでなければ、じめじめした陰氣くさい生活には飽々してゐたものかも知れなかつた。

或日の事だつた。母親と二人きりで座敷にゐた時に、臺所から馳け込んで來た女中が、何か大きな聲でわめき立てた、すると母親は私をかゝえたまゝ、裏木戸の方から、その細君の家へ馳け込んで行つて、あたふたと二階へ馳け上つた。その時の異常な光景ありさまだけは私の頭に今でもまだはつきりと残つてゐる。

二階は、六疊敷ぐらゐの部室一間であつた。階段の上にある、明り取りの小さい窓には、西日が射して、部室の中はいやにけばくしく明るかつた。座敷の眞中には屏風が立て廻してあつたのだらうが、その時はもう半分ほどわきの方へ押しつけられてゐて、私の嫌いな若い細君は、階段の方へ向いたまゝ、疊に額をすりつけるようにして俯伏せに座つてゐた。その腰のあたりからは、股を結えたしごきのあまりが赤い色を疊の上にこぼしてゐた。

母親はその姿を見ると、

『まあ』と驚いたような聲を出したがすぐと私を下の座敷に抱き下して、また二階へ上つて行つてしまつた。何の事ともわからなかつたが、たゞ事ではないと私も思つたに違ひない。そし



て母親のゐないのが何より淋しく恐ろしかった。私は梯子段の上り口までにじつて行つて、そこでまた大きな聲を出して泣いてゐた。

やがてしばらくしてから母親は上の方から赤い水の一杯はいつたコップを大切さうに手にしながら降りて來たので、私はその裾にからみつくつと、

『大變ですよ、これはばつちいおぶうなのだから』と恐ろしさうな顔をして臺所の方へ行つてしまつた。それから後はどうしたのか私は憶えてゐないが、余程のちになつて母から聞いたところによると、それはその家の主人が余り放蕩をする爲に、細君が嫉妬を起して劇薬を何かを飲んだと云ふ事であつた。

私は曾てこの事を、『赤いコップ』と云ふ題で小説に書いたこともあつたが、その後二十五年の月日が過ぎて、山崎の大伯母の兄弟であつた伯父の家で、親類の間につまらないごたごたが起つたとき、私も呼ばれて久しぶりでお八重さんに逢つた。四十を越したお八重さんはもう可なり醜い中婆さんになつてゐて、私の美しい追憶をめちやく／＼にぶち壊してしまつた。その後またその伯父が死んだ時にも遺産の事か何かでお八重さんは慾張つた事を云ひ出して、多くの親戚から爪弾きをされてゐると云ふ事を聞いて、私は氣持を悪くした。さうして今ではか

へつて、あの蒼ざめた顔をした、恐しく思はれた隣の細君が、赤いしごきで膝を結へて、俯伏せになつてゐた姿の方が懐しく私の頭に残つてゐる。けれどもそれも、もう五十を越してゐるだらうと思はれるその細君に逢つたならば、その佛も残りなく消えてしまふ事だらう。若くして亡びたものこそ、一瞬の中に永遠の美しさを留める事が出来るかも知れないが、存らえて行くものは、醜く老いて美しかつた佛さへも打ち壊されて、やがて汚なく朽ちて行くのだ。

その家にゐた間に、私は一度親戚の結婚式につれて行かれた事があつた。暗い道を母に抱かれて、俥の上でゆられて行つた。どんな男とどんな女と夫婦になつたのかも憶えてゐない。たゞ眞暗な所から突然明るい座敷に入ると、そこには太い蠟燭が何本も何本も、びか／＼光る燭臺の上に輝いて、綺麗な着物を着た若い女が澤山ゐた。さうして私はその綺麗な娘——多分お酌のようなものだつたのだらう——に抱かれたのを嬉しかつたと思つて憶えてゐるだけだ。私の生涯に最初の記憶を與へてくれた家にゐる間に起つた事で、私の頭に残つてゐるのはこれだけの事である。

その家には凡そ一年位しか住んでゐなかつたのであらう。父はまた、その坂の上の方に家を

買つて移轉した。四つの年の冬になつて私の記憶はまた私をその家に發見する。それは何でも私がインフルエンザ——こんな言葉も近頃ではだん／＼なくなつたが——にかゝつた時の事である。ふだんは女房でも子供でもを、塵か埃のようにながみ／＼小言を云ふ父も、病氣になると人一倍大切にしてくれた。

明るい冬の朝だつた。椽側の障子には、透き通つた朗かな朝の日が射してゐた。出勤前の父も、學校へ行く前の二人の姉も懸念らしい顔をして私の枕元に座つてゐた。枕元には、せきをする毎につばを吐く金盞の置いてあつた事だけを、どう云ふわけだかはつきりと憶えてゐる。そのとき私は母親に

『もうお前も四才よっさいになつたのですからね、今日から一人でねなければいけませんよ、悪い風邪がみんなにうつるといけないからね』

と云ひ聞かされて、子供の寝る小さな布団に寝かされてしまつた。自分の身體にしつくり合つた布団にねかされたことが珍らしく面白くもあつたのだらう。そしてまた、そのときは別に泣きもしなかつたが、恐らくそれが悲しい事であつたに違ひない。四つになつたのだから——と云はれたその年を、今でも忘れないでゐる位だから。

一體私は幼年期には、非常にか弱い子供だつた。その後私の家がだん／＼貧乏になつてからは、母も病氣はしなくなつたし、私もめき／＼と壯健になつて、十才の時に山形で腎臓病の大患ひをしたのを打ち止めにして、病氣らしい病氣をした事もないが、それまでの間には、母と私の二人が、月々醫師の厄介になつてゐた。さうして私の病氣には、いつも恐ろしい夢魔がつきまとつてゐた。病氣になるといつも明るい座敷の隅の方に、屏風を立て廻して一人きりほつねんと寝かされる事にきまつてゐたが、身體に熱が浮いて來ると、私はきまつて恐ろしい物に襲はれてゐた。引き續いて病氣ばかりしてゐたので、いつの事だか忘れたが——何でもそれ以前に母親につれられて、飯田町にゐた祖母のところに見舞に行つて、歸りに神田の親戚へ廻つて歸つて來た時に、俥に乗つて狙橋の上を渡つて來ると——それは恐らく芝居か何かの廣告でゝもあつたのだらうが——丁度芝居に出て來る朝比奈のような頭をして、顔も紅で隈取つた男が、短い刀を振り廻して歩いてゐた。夕暮方のことであつたが、町の人たちはその周圍を取り巻いて、面白さうに笑つてゐた。私は何でその人達が笑ふのか判らなかつた。

『もしあの男が怒つて、あの短力で切りつけたら』と思ふと恐ろしくなつて、母の懷ろにかぢりついた。すると

『おいたをすると、あの人が来て連れて行きますよ』と母は私をぢつと抱きしめながら、小さな聲で耳元にさゝやいた。私はその時、私の俵を引いてゐる、常公翁やがなせもつと早く馳けてくれないのかと、時々顔を上げては、後ろの方を恐さうに覗いてゐた。母は優しい人であるがあの頃には、どうしてあんなにいつも子供を脅かして育てなければならぬと思つてゐたのか考へても不思議である。その後私が病氣になつて發熱すると、いつもその朝比奈が出て来ては私を脅かした。

その次には家中で春木座へ連れて行かれた時に、六歌撰の踊を見た。藤娘だの喜撰だの、大津繪の鬼が入り亂れて踊つた姿が少年の私の頭には幻怪なものに映つたであらう。或ひは又た平素から凡ての物が、恐ろしくばかりあるように、この世に楽しいとか面白いとか云ふ事は、まるで存在しないように教育されてゐた私には、それも亦た、恐ろしい物の一つとして、心に深く刻みつけられてゐたのであらうか。それから後ち病氣をする度毎に、狭い屏風の中の枕元にその六歌撰が現はれて踊つたりはねたりするのだつた。その度毎に私は

『また六歌撰が来たあ』と云つて泣き出したさうである。

『あれはお芝居だから、何にも恐い事はないのですよ』

と、さうなつてから母親はその都度云ひ聞かせてくれたが、一旦刻み込まれた恐怖の念は、その位の事ではどうしても拭ふ事は出来なかつた。

病氣にはさうして、いつも恐ろしい夢魔がつき纏つて私を苦しめたが、然しそれでもなほ、幼い時の病氣には、私の懐かしい追想が付き纏ふ。女ばかり三人の後に出来た初めての男であり、それに病身であつた爲か、その頃の母の愛は私にばかり傾いてゐた。私がさうして熱に浮かされて寝てゐるときに、父も姉もゐなくなつてしまふと、母は私の枕元に付き切りについて、色々な話を聞かせてくれた。時々は何か思ひ余つたように、私の耳に口をつけて

『坊やは早くよくならなければいけませんよ、お前がゐるから母さんはかうして生きてゐるのだから』と囁いてくれた事もあつた。病氣の爲にいつもより我儘に甘えてゐた私が、いつも好き

『たそがれ——挑山のような菓子だつた——が喰べたい』と云ひ出したとき、家にはそれがなかつたので、どしや降りの雨の降る日にわざ／＼俵に乗つて、五六丁先の大横町までそれを買ひに行つてくれた事もあつた。子供の玩弄にする本と云つても、草双紙の少し進んだような、淺草紙を間に入れて厚ほつたく製本した小型の本をわざ／＼買ひに行つてくれた事もあつた。

私はその後、青年になつてから、随分長い間だ悲惨な窮乏の中に苦しい日を過して來た。そしてそんな時には自ら進んで破落兒たふろこにでも強盜にでもなつてしまはうと考へた事が幾度あつたか知れなかつた。私がそれにならなかつたのは、私の氣が弱い爲でもあつたらうが、然しさうした場合にはいつも不思議に子供の時の病氣の事を想ひ出した。そしてそれが又た、必ず荒み切つた私の心を云ひようもなく和けてくれるのだつた。母は私が成長してからも、意久地のない目を長く送つて、兄弟や親戚に迷惑をかける度毎に周圍の者から

『みんなあなたが餘り甘やかして育てたから悪いのだ』といつても攻撃されてゐたが、もしあの母だけが私を愛してゐて——たとへそれは理智の伴はないものであつたにしろ——くれなかつたら、恐らく私はもつと激しい墮落の深淵に、とつくの昔に身を亡ぼしてゐたに違ひない。もしさうでなかつたら、どうしてあれほどまでに激しく、虐けられ捻ぢ伏せられ、息もつけなような陰惨な窮乏のどん底に長い年月を送つて來た私が、よしそれを少しでも行ふ事が出来なかつたまでも、人を愛する温かい心が消え失せなかつたり、美しい物に憧憬する氣持を少しでも持ち得たり、眞理を求むるの念が多少でも持續する事が出来たらう。凡てそれはあの母の盲目的な愛の賜物だと私は常に感謝してゐる。愛の生んだ理性は尊むべき物に違ひはないが、

理性は必ずしも愛を生まない。愛のない理性よりも、寧ろ私は盲目的な愛を尊重する。

二度目に移つた家と云ふのは、妙に奥深い細長い邸だつた。その町の邸は、どこもそんな風に出來てゐるが、表ての門の中に小さな家が三軒あつて、中の門の中に私の家があり、その奥にまた小さな家が一軒あつた。父はそこに越すと間もなく、一番表ての家一軒だけを残して置いて、中の貸家二軒は壊してそのあとを畑にしてしまつた。畑にはその後赤燕膏だのれいしだの茄子や胡瓜のようなものが、期節に應じて作られてゐた。貸家を壊した古材木は、長い間だ臺所の前の空地に積んであつた。今までちやんと形をなしてゐた家が壊されて、蝕ばんだような薄汚ない木片ばかりになつてしまつたのが、少年の私の心には奇怪な事のように思はれた。平四郎と云ふ車夫が、毎朝父を役所に送つて歸つて來ると、夕方迎えに行くまでの間だを、いつでも根氣よくその木を挽いては焚木にするのを、私はほんやりと立つて眺めてゐる事が多かつた。

奥の家に住んでゐた人は、私達がそこに越すと間もなく他所に移つてしまつて、姉達の琴の師匠だつた、武藤と云ふ女の人がある跡に越して來た。透き通るように蒼白い顔をした、鼻の

高い女で、齒はおはぐろで染てるたが、年頃は何でも三十五六らしかった。姉たちはその人を武藤のおばさんと呼んでゐて、毎日琴を習いに行つたが私はなぜだかその人が嫌いだった。その家の庭には、刺々の葉のある柵ひいの木があつたが、私はいまでも柵の木を見ると、不快な感じを持つて、武藤の小母さんを想ひ出す。鏡花の小説の中に出て来る、意地の悪い年増のような人だった。然しその武藤の小母さんもその家には、いくらもゐないで越してしまつた。父はそこを子供の遊び場にするのだと云つて、母家との間に長い廊下を造つてくれたが、いつも閉め切つてある爲に濕氣臭くなつた暗い家には、姉達も私も遊びに行く事は尠なかつた。さうして、人ばかり多勢ゐても、何となく寂しく沈んだ家の中に、それは余計に陰氣臭い附屬物を附け加えたようなものだった。

家の中がそんな風に、いやに寂しく沈んでゐるのに、そのまた町も妙にひつそりと静まり返つてゐるのだった。要垣や黒板塀の並んだ通りには、晝も人の姿を見る事は尠なかつた。午後になると

『えり——、えり——』と、押しつぶされたような聲を出して、赤黒い飴を匏で削つて賣りに来る飴屋の呼聲が、その町に響いたつた一つの物の音だった。夏になると

『こほりや——こほり、こほり』と、どこの家でも買ひもしないのに、車を引いた氷屋が毎日通つたが、その呼び聲は人氣の絶えた街によく響き渡つて、余計に寂しさを増させてゐた。夏の夕方はまた、谷一つ隔てた向ふにある幼年學校の生徒が、食後の運動をするのだと云ふ喚聲が、

『わ——つ、わ——つ』と妙に陰氣に響いてくるのだった。その頃から庭の隅の方から黄昏れて来て、空は夕映に光り、藪蚊の唸りが聞えはじめるのであつたが、そのさびれた町に、いつも定つて起る物音と云つてはそれより他にはないのであつた。

そんな風で、家の中も陰氣であつたが、町は更にさびれてゐるので、六つか七つになるまでは、私は友達もなく、遊びに行く家も持たなかつた。母が日當りの好い椽側に出て、針仕事をしてゐるときは、私は庭に出て遊んでゐた。庭の隅にあつた八重櫻が赤味のかつた花を開く頃になると、父は親戚の者呼び集めて、田樂の御馳走をした。庭の花見をするのだと父は云つてゐるたが、それはたゞ父だけの見る花であつて、酒に酔つてだん／＼疳の昂ぶつて行く父のそばで、私達はおづ／＼と田樂を喰べ、母はあとから／＼焼きたてを要求する父の爲に、獨樂のよように座敷と臺所の間を急しく馳け廻るばかりだった。

五月頃になると、庭と畑の境にあるウツギの木に眞白な花が咲いてゐた。

庭で遊ぶといつても、飛び石より他の土の上を歩けば父に怒られるので、それもすぐと飽きてしまふと、私は母に何か話をしてくれとせがむのだつた。母の知つてゐるほどの話は繰り返し繰り返して聞き飽きて、もつとほかの話をとせがんだとき、母は色々考へた揚句、釋迦八相記を持つて来て、はじめはその口繪の話をしてくれた。活版本ではあつたが色刷になつてゐたその口繪には、舍利弗や目蓮が形の好い髻を結つて黒い衣を着てゐた。ヤスタラ女、ウダイ、ラゴラ、韋提奇夫人、淨飯王、悉多太子、などいふ名前は、やがて懐かしい響きを持つて来た。アラ、カラ、の兩仙人は恐ろしく、提婆達多はいつも憎らしかつた。どうした時か、提婆達多が刀を抜いて釋尊に切りかけた時、忽然として大地が裂けて、物凄い炎の燃え上つてゐる無間地獄へ、甲冑を着たまゝ眞逆様に墮ちて行く挿繪を見て、私は恐ろしいような嬉しいような氣がしたのであつた。

その物語の中で、何よりも私を喜ばせたのは、成道後神通自在となつた釋尊が、今は生を天に受けてゐる亡き母に、乳を貰ひに行くところであつた。八相記の中には釋尊の生れた時は、何とか云ふ樹の下で、母摩耶夫人の脇腹から生れ落ちたのだと書いてあつた。そのとき天に雌

雄の龍が現はれて、その口から天の水をそゝいで身體を潔めると、釋迦は天と地を指して天上天下唯我獨尊と云つたと云ふ。それと共に摩耶夫人はこの世を去つてしまつた。後年成道して釋尊となつてから、はるばると天に登つて摩耶夫人に見えた時、携へてゐた鐵鉢をさゝけると、夫人の胸から乳が迸つて、鐵鉢の中に注ぎ込んだ。摩耶夫人は端然として座つてゐる。釋尊はその前に蹲づいて頭の上にさゝけてゐる鐵鉢に、乳は勢ひなく豊かに流れ込んでゐる挿繪があつた。私はその繪を飽かず眺めては、同じ事を母に繰り返し繰り返し、説明して貰つたのであつた。

『どうすれば極樂へ生れる事が出来るのだらう?』そんな疑問が小さな私の頭に起つて来て、母にそれを尋ねると

『お念佛さへ唱へればいかれますとも』と云つて、母は私を佛間につれて行つて、佛壇の前に座らせた事があつた。

父は信心嫌いなので、父のゐる時は母は決して佛間に入らなかつたが、父がゐなくなつてしまふと、燈明をあけては、長い間だ何か拜んでゐた。北の三疊と云つてゐた薄暗いその佛間が、その頃の母にはこの世からあの世へ通ずる、唯だ一つのやすらひを得る場所だつたのであらう。

私も死んでも母と一所のところに居るようになつて、熱心に念佛を唱へたのであつた。

夏の夜は、畑の向ふの家根の上で、稻光りが凄く美しく光つてゐた。その頃になると父は私達をつれて、大通りへ散歩に出かけた。まだ電燈と云ふものゝなかつた、四谷の通りは暗かつた。晝の中は馬糞街道と云はれるほど、馬車の往來が烈しかつたが、夜になると電車などのなかつたあの町は、静かなゆつたりとした町になつてゐた。町の兩側にはカンテラを灯した店が並んで、暗い空に石油の煙を黒く長く立てゝゐた。四谷の濠にもその頃はまだ蓮があつて、白い大きな蕾が、夕方ならばくつきりと見えてゐた。甲武線のはじめて通つたのは、私が七つか八つの時であつたらう。銀婚式のあつた時には、まだ埋めたてた工事場に、大きな鶴と龜が出来た位であつたから――

夏が終つて、夕方になつても谷の向ふの幼年學校から『わ——つ』と云ふ喚聲が聞えなくなつて来て、朝夕がだん／＼涼しくなつて来ると、碧梧桐の梢から、丸い玉をつけた舟のような實が落ちて来た。そしてやがていつか庭木の中で一番高い樅の梢が『さあ——つ』と寒さうに鳴り始めた。

『どうしてあの木はあんなに鳴るのだらう』

と私は不思議さうに母に尋ねた事があつた。

『秋になつたからですよ、あれは秋風と云ふの』とその時母が教へてくれた。それから可なり長い間だ、樅の梢が鳴り始めると、秋が来たのだと、私は思つてゐた。

そしてそれからしばらくつと、寂しい冬が来るのだつた。ふだんさへ寂しいその町は、冬になると、ひっそりとして死んだように静かになつてしまふのだつた。晝でさへ寂しい町の夜は、私にはたゞ恐ろしくばかりあつた。風は戸の外を轟々と吹いてゐる。奥まつた邸の中には、町を通る人の足音さへ響いて来なかつた。戸のすき間からそとを覗くと、死のような暗い沈黙が、眞黒に塗り込めてゐる。私達は冬の夜は、炬燵のある部屋に来て母に話をねだつてゐた。晩酌に酔つた父が座敷に寝てしまつてから、氣兼ねる事もなく炬燵にあたりながら、母や姉から話を聞くのはその頃の私の楽しみだつた。ランプの光は濕んだように炬燵の上で輝いてゐた。二人の女中は雑巾か何かを刺しながら、交る交るにひよこり、ひよこり、と頭を下けて居眠りをしてゐた。話を聞いてゐる私達はそれを見てはじめの中は笑つてゐたが、いつか自分も炬燵のぬくもりに眠くなつて、うつ／＼と寝入つてしまふ。母は最初、

『これ、信、信、風邪を引くといけないから』

と起してくれたが、夢幻のように聞いてみると、

『仕方がないねえ』と云ひながら、重さうに抱き上げて、冷たい布団の中に入れてくれた。雪のふる夜などに、戸障子が、ごとつ、ごとつ、と鳴る音を聞きながら、母の話に聞き入つてゐた事は、これから後ち老年まで生きてゐても、恐らく忘れる事は出来ないだらう。

けれども私のさうした甘い思ひ出も、だん／＼終りを告げなければならなくなつて來た。四つの年の暮に、私には妹が出來た。さうしてやがて私も五つになつたのであつたが、その五つと云ふ年が、私には忘れる事の出來ない、呪はしい記憶を残した。

五歳になつた正月の元日だつた。どんな悪い事をしたのか私は少しも憶えてゐないが、たかゞ臆病な弱い五歳の少年がした事である。私は父から怒られて、謝罪れと云はれたのを謝罪らなかつた爲に、短氣な父の疍癢は火のように燃え上つてしまつたのだ。それまでも父は怒ると、二人の姉を打つたり抓つたり可なり酷い折檻をしてゐたが、まだ骨もろくに固まらないような、私を打つ事は減多になかつた。けれどもその朝いけなかつた事は私が五歳になつてゐた事である。私にして見れば、四歳であつた時の大晦日も、五歳になつた元日も、たゞ一日の日の隔りがあるばかりで、私の心に何の變りもないのであつたが、父にして見れば五歳になつた

子の我儘は金輪際許せなかつたものと見える。

どういふ風に叱られて、どういふ風に打たれたのか忘れたが、やがて私は、庭の松の木に縛られてしまつてゐた。母はそばから色々謝罪つてくれたが

『お前が甘いからいかなのだ』と云つて、父の怒りは益々烈しくなるばかりであつた。

私は松の木の根つこの方に、細帯で後ろ手にされて、結びつけられてわい／＼泣きながら慄えてゐた。

『お前のような奴は、いつまでもさうして泣いてゐるが好い』と云つたまゝ、父は障子を閉めて中に入つてしまつた。空にはよその子供が上げた風のうなりが勇しさうに鳴つてゐた。私は悲しさと口惜しさで、寒さに慄えながらいつまでも泣いてゐた。随分長い間だ、結えられてゐたように思はれる。やがて車夫の平四郎が年始に來て、父と争ふようにして解いてくれた。五歳になつた正月の元日から恐ろしい父の折檻は先づ始まつたのであつた。

それから後も四五年の間と云ふものは、正月の元日は、私には楽しいどころか、苦しいやな日であつた。元日の朝はいつもより早く起こされて、風呂から出て來ると袴をはかされてしまふのだ。さうして姉の支度が出来ると皆な揃つて座敷に出て、その日は殊にむづかしい顔を



して座つてゐる父の前に出て、固苦しい挨拶をさせられるのであつた。袴をはいてゐる私は座る度に、裾をばつと開かなければ怒られた。私はそれですつかり袴に對して反感を持つてしまつたのであつた。そして姉の挨拶が順々に濟んでくると、漸く六歳か七歳になつた私が

『明けましてお目出たうございます。昨年中は色々御世話様になりました』と母親から教はつた通りを暗誦するように述べ立てる。私は今でも自分の子供を見て、六つ位の小さな子が、袴の裾をばつと開いて、臂を張つて兩手をついて、ませた口上で挨拶する姿を想像すると、妙な暗い滑稽さを、感じないわけにはいかないのだ。

元日の仕事はそればかりでなかつた。よそ行きの着物を着てゐる爲めに、雑煮を一つ喰べるのでも、窮屈らしく膝の上に手拭を置かされて、漸くそれが濟むと、我儘で交際ぎらいな父の代りに、近所の家に廻禮に歩かされた。私がその不自由な紋附、羽織、袴で外に出ると、近所の子供はもう身輕さうな姿をして愉快らしく風を上げてゐた。さうして父の名刺を手に持つて、ちよこ／＼歩いて行く私を、彼等は不思議さうに見送つてゐた。早くあゝして遊びたいと云ふ願ひと、顔を見られるのが氣まりが悪さに、いつも私は大急ぎで馳け出して年始廻りをするのであつた。元日と云ふものは、妙に重苦しく窮屈なものとしか私には思へなかつた。今でも私の

兄弟の中では、私が一番行儀が悪くなつてしまつたが、袴だの行儀だのと云ふ事が嫌いになつたのも、恐らくその頃の事から來たのだらうと、私はいつでも思つてゐる。

五歳になつた元日に、父から受けた折檻の口開きは、その後の長い息苦しい日の道を開いた。その試練が一度濟んでからは、父はもう私に少しも容赦しなかつた。その癖せ父は私を憎んでゐると思へなかつたが、一度び父の氣に逆らうと、息の絶えるような酷い目にあはされるのだつた。

殊にそれは、父が晩酌をしてゐる時に多かつた。私が晝間なにかいたづらをした事が、母の口から父に語られると、父は膳の上の酒をちび／＼飲みながら、長い小言が始まるのだ。どんな悪い事をしたのだから、三日に一度位づゝは擲られた事だから、今ではもう憶えてゐないが、父は父で、自分の勝手な理窟をつけて小言を云ふのだから、子供には又た子供の理窟があるから、私は私の思つてゐた事を云ふと、

『親に向つて口答へをするか』と云ふのがいつも折檻の始まりだつた。然し實際に自分で悪いと思はない事に、いくら子供でも謝罪るわけには行かないので、私は私の云ひ分を通さうとすると、

『まだ生意氣な事を云ふか』と云つて、父はいきなり立ち上つて來るのだつた。はじめの中は私もよく逃けた。けれどもそれはいつも無駄な努力だつた。一度は女中部屋に逃げ込んで、女中が私をかばつてくれた爲に父に擲られて、私もかへつて酷い目にあつた。

それから後は大抵袋のようになつてゐる、三疊の佛間に追ひ込まれた。それは丁度戸袋の中に人つた鼠のように、私はその狭い部屋の隅で、擲られたりつねられたりして

『ひい——、ひい——』と泣くのである。

けれども私には、それでもまだ自分が悪いと思へない限り、謝罪するのはいやであつた。部屋の壁の所に押しつめられて頭をかへて丸まつて泣いてゐると

『これでもまだ謝罪らんか』と云つて、父は私の臀や股をつねり上げた。その度毎に私は飛び上つて悲鳴を上げた。そしてしまひには何が何だか判らないほど、頭がぼうつとして苦しくなつた。母と私の仲の姉は、父の周圍をうろくしながら、

『早くお謝罪りなさいよ、早くさ』と私に促がした。さうして私もしまいに苦しくなると

『ご免なさい』と口で云つた。けれどもそれは心から悪いと思つたのでもなければ、無論謝罪りたい事はなかつた。たゞその苦しみを免れる爲めの、一寸逃れの口實に過ぎなかつた。父に

もそれはわかつてゐた。

『何だ、まだそんな謝罪り方をするか』とまた烈しく抓られた。それは打たれるよりも私には苦しかつた。私は遂に口惜しさを堪えて、兩手をついて

『ご免下さい』と謝罪つたが、それと同時に口惜しさがこみ上げて來て、また『わーつ』と泣き出した。それから又た新しく、父の小言は始まるのであつたが、私はもう口惜しさと悲しさで夢中になつて、自分の思ひの中に耽つてゐたので、父が何を云つてゐるのか聞いた事などは一度もなかつた。

母はあれほど私を愛してくれたのに、どうして私がそれほど酷い目に會ふのを知りながら、何も彼も父に言つたのか、私には少しも判らない事だつた。恐らく母は、それが教育と云ふものと思つてゐたのかも知れないが、その辯私がさうして苦しい目に會はされる度毎に、おろ／＼して父を止めては怒られてゐた、今でも私には、不思議な事としか思はれない。

一番上の姉は、小さい時から仲が悪かつた。その姉にはいつも告げ口をされては、父の折檻に會ふ事が多かつた。九つ位になつてからの事であつたが、父は私に妙な帽子を作つてくれた。それは今でもあの皇宮警手が、被つてゐるような、胴の白い學生帽子であつた。父の言ふ所で

は明治初年頃の陸軍の將校の型をとつたのだと云ふ事だつたが、その時分には皇宮警手より外にそんな帽子を被つてゐるものはなかつた。まして明治初年の事などはまるで知らない子供達には、それは當然皇宮警手の被るべき帽子として目に映つたのであつた。

私は第一にその帽子の恰好が嫌いであつた。それからその帽子を學校にかぶつて行くと友達が『やーい、皇宮警手、皇宮警手』と云つて冷笑されるのに閉口した。私がいくら父から云はれたように、

『これは昔の陸軍の將校の帽子なんだ』と云つて説明しても、小さな友達にはそんな事は通用しなかつた。私は友達には熱心に辯解して、家へ歸れば父にどうかこの帽子をやめてくれと頼んだが、父はどうしても聞き入れてくれなかつた。毎日毎日學校へ行くたびに、友達から皇宮警手と云つてからかはれるのは小さな私にも可なり苦痛な事であつた。

とうとうある朝、私はたまらなくなつて、中の門の開いた扉の蔭にその帽子を脱ぎすて、行つた。皇宮警手の帽子のない一日は氣輕な愉快な日であつた。私はその日の幸福だつた事を心に喜んで家に歸つて來て、扉の蔭を探して見ると、今朝行きしなに、たしかに松の根方に置いた帽子がなくなつてゐた。その時の私の驚きは、今ま考へてもいやな氣持のする位だ。あ

の帽子をなくしてしまへばまた今夜あの佛間の奥に押し込められて、息のつまるほど擲られたりつねられたりしなければならぬのかと思ふと、今日の日を暮すのさへいやになつてくるのだつた。

『出来ることならあの矢筈しい父親にも逢はないで暮せるような所へ行つてしまいたい』

その後もそんな事を、幾度考へたことだか知れないが、私は一度に暗くなつてしまつた頭をかゝへながら、母にも知れないようにそつと玄關から歸つて行つた。けれどもやがて私の歸つて來たことが母に目つかつてしまつたとき、

『お前帽子はどうしました』とすぐに母からなぢられた。私はもうそれが母に判つてゐるのだとすると、誰かゝ見附けて持つて來たのだと考へた。さうして、まだあの帽子がなくなつてゐなかつたゞけでも、怒られないで済むかとも考へた。私は黙つて返事もしなかつた。

夜になつて父が歸つてくると、豫想してゐた通りの小言が始まつた。何を云はれても私は黙つてゐた。やがていつもの通り父の怒りは頂點に達して來た。

『親がつくつてやつたものは、黙つてかぶつてゐればそれで好いのだ。子供のくせに生意氣な明日からちやんと被つて行くか、どうだ』父はそんな事を繰り返しく云つてゐた。母も姉も

私はその帽子をいやがる事も、それも無理のない事だと云ふ事も、よく知つてゐた。けれども彼等はその帽子を私が脱ぎ捨て、行つた事を、彼等は父に告げてしまつた。さうして今私がそれが爲にまた苦しい目に會はされようとしてゐるのに彼等は黙つて傍觀してゐたのだ。殊に私の帽子を發見して、手柄顔に父のところに持つて行つた總領の姉は、愉快らしい顔さへして眺めてゐた。専制な者の下に生きてゐる力のないものは、凡て卑屈になつて行く。さうしてたゞ壓制者の機嫌を取り、自分だけでも彼から受ける苦痛を免れたいと云ふような氣になつて來るのだ。さうしてやがて壓制者の力がだん／＼消えて行つた時、彼等は敢然として復讐的に反抗する。動物の群に起る因果の法則が、こゝでもちやんと行はれてゐたのであつた。

やがて遂に父の怒りは爆發してしまつた。その時は私も覺悟してゐたので逃げもしなかつた。私はそこへ引き倒されて、續けざまに擲られた。それから又た一番苦痛な烈しいつねりが始まつた。どうでもなれと思つた私はもう泣きもせずにはぢつと堪えてゐたが、それは益々父の怒りを烈しくするばかりであつた。父はもう怒りに堪えかねたと云ふように、

『まだこれでも聞かんか』と力任せに私の背中を擲りつけたが、それが急所に當つたのであつたらうか、私はうん、と息が詰るとそれつきり何も覺えなくなつてしまつた。

しばらくたつて、漸く息を吹き返したときには、母と仲の姉が心配さうに、私の胸をさすつたり、水を口に注ぎ込んだりしてゐるのであつた。母は私が眼を開いたのを見ると、

『氣が附いたかい、信や、しつかりおしよ』

と私の耳に口を當て、叫んだ。母の眼には涙が一杯たまつてゐた。父はまだ火鉢の向ふに黙つてぢつと座つてゐたが、母はその方に向き直つて、

『いくらあなた仕置をなさると云つたつて、余り亂暴ぢやござんせんか、もしこのまゝこれが死んだら何うなさるおつもりです』と聲を慄はせて父に云つた。私は自分の意識がだん／＼恢復して來ると、口惜しさに堪らなくなつて來た。自分の父から三日に揚けずこんな苦痛を味はゝされるのなら、本當に死んだ方が好いと思つた。それから後も私は父に折檻される度毎に、殺してくれ、殺してくれ、と怒鳴るようになった。すると父は

『かうして殺してやるのだ』とまた私をひねり上げた。

『そんな事をしないで一思ひに殺してくれ——』

と私は本當に心から、殺される事を欲して悲鳴をあげた。私の身體には、いつも紫色のあざの絶えた時はなかつた。私には家庭は牢獄のようで、父は鬼のようになしか思はれなかつた。か

うして私はだん／＼癖みの強い、ひねくれた少年として育つて行つた。

私がそんなひどい仕置を受けた原因の中で、自分で心から悪い事をしたと思つて記憶してゐるのは、九つの正月に、箆笥の上にあつた銀貨を黙つて持ち出して、凧の糸を買つてしまつた事と、もう一度は表で遊びふけてゐて、腹をへらして家へ歸つて來た時に、母が女中にやる爲に、臺所の竈の上のせてあつた饅頭を喰べてしまつた事と、それから父が大切にしてゐた大輪の菊の花を折つてしまつた事だけである。

凧糸の時には、若林と云ふ買附の凧屋まで引張られて行つて恥かしい思ひをした揚句——それだけでも私には可なりひどい仕置であつた——三疊に押込まれて、例の通りに擲られた。饅頭の時は、女中に謝罪せられた上で、型の通りの目に逢つた。菊の花を折つたのを目附かつたのは晝間だつたが、父は木劍を持つて私を追ひ馳けた。私は庭から畑へ飛び込んだが畑の周圍を二度ばかり、その時は本當に殺されるかと思ひながら、一生懸命に逃げ廻つて、とう／＼表へ逃げ出してしまつた。

『お父さんとお前は、本當に前世からの仇同士でもあつたのかね』と母はしみ／＼とそんな事をよく云つた。

父は無暗に恐ろしい憎らしい人であつたし、母は懐かしい悲しい事ばかり云ふ人だつた。私の頭は妙に暗い物悲しさで、ぢり／＼した反抗でいつも一杯になつてゐた。

父から受けた殘虐な想ひ出は、かうしてゐても限りなく湧いてくる。春になると四谷見附のなだらかな土手には、土筆だの嫁菜だののびるだのが萌え出してゐた。いつか私もその土手に行つて、眞似事のような摘草をしてゐたときの事だつた。その頃はあの見附の道ももつと狭く、土手はところどころ潰えて赤土がはみ出し、濠の水は藻と水草にどろりとしたように青くよどんでゐた。喰違ひの見附一つ隔てた向ふの濠では、まだ河童がゐると云はれてゐたほど物淋しく向ふ側の土手の土には首括り松が土手の下に向けて、死神のつついたような枝を、長々と遣はせてゐた。そして人氣の絶えた紀尾井坂のだ／＼つ廣い道が、いやに白つ茶けて物寂しく、斜めに長く濠にそつて横たはつてゐるのだつた。

『お濠端に行くといふから、決して行つてはいけませんよ』と母親にいつも云はれるのであつたが、その物寂しい危険な、そして春になると色々な草が萌え出した上に、ほつかりとした日の當る場所が、少年の私を妙に引きつけるので、私は家に内證でよくそこへ遊びに出かけた。その日も私とその土手に來て、寢轉んだり轉がつたりして遊んでゐると、どこか町の子らし

い小さな子が、叢の中を熱心にあさつては、細い莖の草をしきりに摘んでゐた。その子は私達が土手の傾斜面を轉がつたり、走つたりして遊び廻つてゐるのには、目をくれようともしなかつた。彼は何か貴い寶物でも探すように、側目もふらずに、叢を探し歩いてゐるのだつた。やがてその熱心が私達を引きつけた。

『お前がつんでゐるはなあに？』と私はその子に尋ねた。その子は左の手にもう掴み切れないほどの草を握りながら、

『これはね、のびるつていふんだよ、煮て喰べると甘いんだよ、父が好きだからつんでつてやるんだ』と得意さうに答へた。恐らく私もその子の孝行らしい感情に動かされたのかも知れない。またそんなに熱心に探すほど、甘い物と云ふのに心を惹かされたのかも知れない。やがて私も叢をさがしてのびるを摘み始めた。

暖い四月の日のよくあたる土手に茂つた雑草の中に、あの平べつたく細いのびるの葉を見出すのは、慣れない私には中々困難なことだつた。それよりもまた、雑草や芝の根が、網のように緻密に交した土の中から、小さな丸い玉をつけたまゝ、そつと抜き出すことはそれよりもなほ難かしいことだつた。けれども葱のような匂がふんとして、水仙の根のように白い玉が、ほ

つつりと抜け出して來たときには、私は心から喜んだ。そしてあの町の子が、あれほど熱心に探すことゝ考へ合せては、この白い根と青い莖の甘さを考へて、斜めになつた土手の草にかじりつきながらそれからそれへと探し廻つて歩いてゐた。

たゞ一つのこと、何の余念も雑念も交へずに没頭することの出来るのは、少年の特權である。私はもうすつかりのびるの中にもぐり込んでしまつてゐた。

『おれもう遅くなるから歸らうや』と、その町の子が云ひ出したのに、ふと氣がついた時分には、濠の水は碧黒く見えるほど日はもうくれかゝつてゐた。そして私はたゞ自分の摘んだのびるが、その子の摘んだものよりもはるかに少ないのを悲しみながら、家へ歸つて來たのであつた。いつもならば、こんなに遅く歸つたら、どんなに怒られるか知れないと云ふ氣が、まづ私の心を脅すのであつたが、こののびるを持つて歸つて、どんなに苦心して摘んだかを話し、更にそれが、あの子が熱心に取つたように甘い物であつたなら、父も必ず喜ぶに違ひないと思ふと私はさうした恐れを感じる事もなくいそぐとして家へ歸つて行つた。

父はもう膳に向つて晩酌をやつてゐた。私が

『たゞいま』と云つて茶の間に入ると、

『こんなに遅くなるまで、何處におつたんぢや』と険しい眼をしてすぐに尋ねた。

『これを描んでたんです、これを煮て喰べるとおいしいんですつて』と私は得意らしくその泥のついたまゝののびるを、父の膳の前に出して見せた。

『なんぢやこれは』と父は見るも汚らわしいと云ふ風に、いきなりそれを投げすてた。そして『こんな乞食の喰ふような物を誰れが取つて来いと云ふた。お前はまた町の子とでも遊んでおつたんぢやろ』と怒鳴られてしまつた。

私が半日苦心して取つて来たのびるは、そのまゝどこかに捨てられてしまつた。ほめられるだらうと思つてゐた豫想は、また長々とした小言となり、それからまた三疊の間に押し込められて、腕や足を振り上げられて、絶え入るような悲鳴を上げる事になつてしまつた。

それもこれも、私が不幸にして士族、士族と云つて威張りちらす、扶持米貰ひの家に生れて来たばかりに、邸町にゐる者は、町の子と遊んではいけないと云ふ勝手な變な理窟の爲めにそんな目に會はなければならなかつたのだ。然も其町の子は、のびるを描んで行けば父親に喜ばれほめられて、私が齒を喰ひしほり、骨身に沁み渡る痛みをこらへて、押へつけられてゐる父の太い腕の下から免れようともがき廻つてゐる頃には、あの子の家では、あの子の熱心に價す

るほどの甘いのびるを、みんなして笑ひながら喰べてゐたのに違ひなかつた。私は陰氣臭く固苦しい邸町の生活が嫌いになつた。父や母は町の子達を何と云ふ理由もなく輕蔑するが、そこには夜も明るい火が灯つてゐる。そしてその子供達は何か欲しければ父やお母の足にかぢりついてねだつてゐる。私は町の子が羨ましかつた。

數限りもないかうした不快な想ひ出を書きつらねて行つたらば、こればかりでも如何に多くの紙數を費さなければならぬかと思はれるほどである。私の少年時代の生活のクライマックスは、苦痛と憎悪と哀愁と悲嘆に盡きてゐる。たゞ憂暗な冷たく寂しく物悲しいそのクライマックスが鮮かな記憶となつて残り、記憶は私の性格をその欲する方へと導いて行つた。たゞ母のみが優しく懐かしく私を蔽いかばつてくれたが、その母の眼もいつも涙に濡れてゐた。そして彼女はこの世は厭ふべきところ、凡ての苦痛は前世よりの却の報ひとしてその罪障を果すべき刑場のように思つてゐたらしい。私に釋迦八相記を讀んでくれる母の心は、やがて私にも此の世を厭はせる氣持を退させた。私は釋迦八相記の終りの方にある、小さなカットほどの極樂の繪を限りない親しみをもつて幾度かしみぐと眺め返した。それは本當に小さな彩色も何もない蓮の花の咲いた八功德水をたゞへた池のあなたに、さゞやかな殿堂のあるほどの簡素な繪

であつたが、私はそれを少年の空想を以て色々、出来るだけ美しく尊い莊嚴なものとして楽しんだ。

と云つて、父は決して心から私を憎んでゐるのではなかつたのだ。小學校の三年生位になつたとき、二三人の友人と一緒に靖國神社へ遊びに行つて歸りが遅くなつたときなどは、それもまだ漸く日の暮れ際に家へ歸つて來たのだが、車夫の平四郎はもう麹町の方へ探しに出てゐた。そして私が歸つて來たときには、父も母も姉も女中も門の外に立つてゐて、私の姿を見ると父は

『おう歸つて來た、歸つて來た』とどんなに遠い所からでも歸つて來たように喜んで騒ぎ立てたほどだつた。たゞ一徹で我儘な父の性癖が、残忍な拳となつて現はれたものでもあらうが、少年の私にどうしてその裏にひそむ愛を觀取する事が出来るだらう。況して父は自分のもつ趣味や思想や世界觀や凡ゆる一切のものをもつてそれを私に押しつけようとしたのである。彼は決して、五才の者は五才の、十才の者は十才の世界があると云ふ事は知らなかつた。それは私ばかりでなく、母も随分苦しんで、遂には家をそつと抜け出して、死なうとした事も幾度かあつた。

私が覺えてゐるのは、六才の冬の事であつた。どんな事が原因であつたのか知らないが、それも矢張り晩飯のとき父はえらく母に怒つてゐた。食事の濟んでしまつた私たちも、茶の間の隅に小さくなつて、どうなる事かと氣を揉みながら、父と母との間の形勢をちつと眺めてゐた。母は父の前に手をついて幾度も幾度も謝罪つてゐた。けれども父は決してそれを聞き入れなかつた。最後には姉も私も父の前に出て、母を許してくれるように嘆願したが、それでも父はきかなかつた。

『これほどお詫びしても御許し下さらないのなら、どうしたらよろしいんでござんす？』

よくよく堪えかねたと見えて、遂に母の口からそんな言葉が出た。

『どうなと、おみ——父は母の事をいつもかう云つてゐた——の勝手にしたら好いちやろ』

と言つて父は冷然として嘯いた。恐らく父は、母に對しては許してもゐたのであらうが、彼自身の焦立しい心持をどうする事も出来ないで、苦しんでゐたのかも知れなかつた。

『左様でございますか』と言つて母もそれ切り黙つてしまつた。妙に白けた重苦しい氣持が長くそこに漂つてゐた事を私はよく憶えてゐる。

その頃私は母の布圍の隣りに寝かされてゐた。けれどもその晩は父と母との争いで昂奮して



るたのか、或ひは虫が知らせたと云ふのか、どうしても寢附かれないで私は長い間だ苦しんでゐた。眞夜中ごろの事であつた。母はそつと起き出すと靜かに音のしないように、寢衣を着物に着換えはじめた。小さな私にもそれは何だか不思議なことであつたが、私は黙つて寢入つた。風を装つてゐた。やがて母は便所に行つたが歸つて來ると、手洗ひの口をあけずに、雨戸をそつと開け初めた。その音を聞くと、たゞならない危険な豫覺が私を襲つた。私はすぐに飛び起きて椽側に飛び出したが、母はもうすでに切戸のそばに立つてゐた。私は泣きながら母にかぢりついた。母は

『母さんはね、ぢき歸つてくるから、おとなに寢てまつていらつしやい』と私をなだめて、褥に歸させようと試みたが、私はどうしても離さなかつた。やがて私の泣き聲に起されたのか、父も姉も起きて來た。それから後の事は憶えてゐないが、月の冴えた寒い晩だつた。

母はその後も、甲武線が土手の下を通ふようになつてから、鐵道自殺をしようと思つて晝の中から仕度をしてゐたときに、丁度その日出入の八百屋が來て、轢死人の無慘な死骸の話をした爲に、思い止つた事があると、餘程のちになつてから、話して聞かせた事があつた。

母の考へは、今から思へば幼稚なセンチメンタルなものであつたかも知れなかつた。けれど

もその穢土を厭つて、たゞ未來世にばかり望みをつなぐ感情は、やがて私をも支配した。幼年も自殺を思ふものである。

## 第二章

學校へ入つたのは二十四年の春だつた。私は明治十九年の八月に生れたのだから、數え年の六才であつた。その頃は今の市立の學校を公立と呼んでゐたが、そこでは數へ年の七才にならないと入學を許さなかつた爲に、私は井上學校と云ふ私立の小學校に入つた。學校と云つてもそれは、昔の寺小屋の進化したばかりのほどのものだつた。校舎も運動場も狭かつた。女の遊ぶ表ての運動場の方には櫻の木が澤山あつた。中の運動場は、校長の家族のゐる座敷の庭のようになつてゐた。夏になると、座敷の前を小さく圍つた垣根に生えた華魁草が高く伸び、赤い花が一杯咲いては、殺風景な運動場の黒土の上に美しく散り敷いてゐた。私達は校長の奥さんから貰つた木綿糸に、花の長いあの花を殊數のように綴つて遊ぶのがその頃の楽しみだつた。

狭い校舎の中の教室は狭く汚かつた。そして生徒の數が少いために、男も女も入り交ぜになつてゐたが、それだけに先生とも親みが深かつた。私達はそこで植木と云ふ女の先生に教はつた。余りきりよ、うの好い人ではなかつたが優しい靜かな先生だつた。私はその學校にゐる中も、惡戯をしては、奥の校長の座敷に連れて行かれて、戸棚の中に押し込まれた事も再三あつた。また時には校長の奥さんが、學課が終るとその座敷に連れて行つて、菓子をくれたり何かして遊ばせておいてくれた事もあつた。植木先生には三年まで教はつたが、姉が行つてた關係で、公立と云つた四谷學校の方へ父が轉校させてしまつた。そのとき植木先生は『あなたももうこの學校をよしてしまふの』

と、教室のその細い廊下で、眼に涙をためながら、頭をさすつてくれた。先生なんか泣くもんでないと思つてゐた私には、それは何だか不思議なことであつたが、私も變に悲しかつた。しかしそれも間もなく、新しく行く學校の物珍らしさに心を移されてまぎれてしまつたが、四谷學校へ行つてから、よほくした、漢學仕込の先生に教へられ始めたとき、私はまた植木先生が戀しくなつた。

井上學校に心を残されたのはそればかりではなかつた。男も女もませこぜであつた私の隣の隣りには、中島さんと云ふ女の子がゐた。可愛いと云つて、どんな顔立だつたかと聞かれたら困るほどもうほんやりとなつてしまつたが、私には今でも可愛い女の子だつたとして記憶に残つてゐる。私は中島さんが、同じ級の女の中で一番好きだつた。その子は私の家より遠くから

通つてゐたので、學校の歸りに、私の家へ曲る町の角まで、いつも一緒に歸つて來た。町の子たちは二人が並んで歩くのを見ると、

『女と男とまあめいり——』と大きな聲をしてはやし立てた。

中島さん——かう云ふといやに大人びていやな感じがするが、私はその子の名を知らなかつた——はその後ち、歸り途に時々私の家へ寄つて遊んで行くようになった。母も品の好い穏和しい子だと云つてほめてくれた。私はそれが嬉しかつた。私たちはいつも玄關の狭い部室で、繪を書いたり、お話をし合つたりして遊んでゐた。中島さんは一度雁皮紙に綺麗な朝顔の繪を描いてくれた。私はそれを大切にして本の間へしまつておいて、時々出して見るとは喜んでゐた。すぐの姉がそれを見つけた時に、姉もまだ子供だつた癖に

『信ちゃんはずつと中島さんに惚れてゐるのよ』と云つて冷笑した。私ははつとして顔を赤くしたつ切り、何と云ふ事も出来なかつた。

一度中島さんが私の家で遊び過ぎて遅くなつたとき、家から女中が迎えに來た事があつた。それから後は、

『遊んでいけない？』と誘つても、學校の歸りに遊ぶと母さんに叱れるから、と云つて寄らな

くなつてしまつた。私にはそれが何となく寂しかつた。四谷學校へ行つてからも、植木先生と中島さんの顔が見たくなつて、井上學校の前まで行つて見た事が幾度もあつた。けれども退校時間が同じ位であつた爲め、二人に逢ふ事はそれ切りなかつた。

華魁草と植木先生と、中島さんのことばかりが、二年間ほどゐた井上學校時代の記憶の中に殊に鮮かに残つてゐる。

學校へ行くようになつてから、私もだん／＼と遊ぶ事が多くなつた。いつも陰氣で窮屈で、何かしら不安な厭迫を感じてゐる家にゐるよりは、少しでもそこから離れてゐる方が、私の心を楽しくしてくれるからであつた。けれどもさうしてそとに出るにまでも、私の行く先は限られてゐた。私の家の筋向ふに、工公爵の庶子である、とうさんと云ふ子供がゐた。とうさんを預つて育てゝゐる、山村と云ふ人の細君のお藤さんは、とうさんの實母であつた。額の生え際のくつきりと四角い、芝居に出てくる老女のような顔をした人であつたが、とうさんはいつもその人を、

『ふぢい、ふぢ』と呼び捨てにしてゐた。

いつの事であつたかその細君は、とうさんの實母だと云ふ事を、母が誰かと話してゐるのを

聞いて、どうしてとうさんは自分の母を呼び捨てにして、母である人が自分の子を、『とうさん、とうさん』と呼んでゐるのか、判らなかつた。況してその良人の山村が、とうさんの父でない事などは尙更わからない事だつた。その後私はその事を母に尋ねたら、母は『お妻さんといふものは、自分で生んだ子でもそれは御主人なのだから、だから、とうさんと謂ふのですよ』と聞かせてくれたが、それも長い間だ腑に落ちない事だつた。

私はその、とうさんの家と、私の家から五六軒先きにあつた、長澤と云ふ裁判官の家へだけは遊びに行く事を許されてゐた。しかしそのどちらの家も、矢張り私の家と同じようにいやに静かな固苦しい家であつた。けれども私はどちらかと云へばとうさんの家へ餘計に遊びに行つた。そこではまた子供の遊び部屋が座敷から可なり離れてゐたし、その部屋には様々な珍らしい繪や玩具もあつたからであつた。そのとうさんの家の裏には、獨身者の學者が住んでゐた。廣い庭の木は刈り込んだ事もないので、四邊が晝も薄暗いほど枝は繁り夏は雜草の生えるに任せ、冬は松葉の散り敷くがまゝにしてあつた。朝方になると顯髯をもちや／＼と伸した主人が出て行つてしまふと、あとでは誰もゐなかつた。私はよくその木戸から中を覗いて見た時、森閑として薄暗い座敷では、書物ばかりが堆く積んであつた。そして長くその家を覗いてゐると薄

氣味が悪くなつてくるので、思ひ出したようにばた／＼と、追ひかけられでもしたように、馳け出して家へ歸つて來てしまつた。今考へて見るとその町には、妙な變り者ばかりが住んでゐたように思はれる。私の家の前の門の奥に住んでゐた、畑中と云ふ家では、父親一人と、男の子が二人ゐた。兄の方は私と同じ年であつたが、父親がどこかへ出勤してしまふと、兄弟二人は家の中に入つたまゝ、一步もそとへは出て來なかつた。夏の夕方に私達がその前を走り廻つて遊んでゐると、二人の兄弟は門の蔭から羨ましさうに覗いてゐた。それで誰か

『そとへ出て遊ばないか！』と誘つて見ると、二人は丁度人影を見た魚のように、急いで奥の方へ逃げて行つてしまふのだつた。私はそれがもどかしかつた。そして幾度も幾度も、顔を見るたびに誘つたが、その度毎に二人は慌て、逃げてしまふのだつた。

どこまでも寂しい陰氣な町であつた。私達が少し遊び過ぎて、薄暗がりになつたのに氣がついて、俄かに皆なと別れて、

『蛙が鳴くからかへろ』と誰れか云ひ出すと、誰れも彼れもが家の方へかけ出した。そして遠くの方でまた誰か、『蛙が鳴くからかへろ』と呼んでゐる聲が、薄暗の中に響いて來ると急に寂しく恐ろしくなつて來て、表の門をばたりと開けて、一散に玄關までかけつけてくるの

であつたが、その頃は父がまた、晩酌に顔を赤らめて、歸りの遅くなつた事を怒つてゐるであらうと思ふと、私の足はそこでびたりと留つてしまふのであつた。そして、そつと玄關を開けて、おづく／＼と中の様子と窺いながら、茶の間へ這入つて行くのだつた。私の遊べる邸町は寂しく、家の中は恐ろしいものと思つて私は育つた。

その寂しい町を、一層寂らせるような事が起つたことがあつた。長澤と云ふ家の先隣りの門の中には、小さな家が四軒ほど建つてゐた。その一番奥に憲兵が越して来て、半年ほどたつてからの事だつたが、或る朝その憲兵は、門の入口の空家に入つて、柱によりかゝつて短銃で頭を打ち抜いて自殺をしてしまつた。私と同じ年位の男の子を頭に、三人ほど子供がゐるが、生活難が原因だつたと云ふ事だ。憲兵の自殺があると間もなく、同じ門の中に住んでゐた人達は、二軒とも越してしまつた。最後にその家族が越してからは、長い間だ空家ばかりになつてゐた。夏になると、人の丈けほども長く伸びた雑草は、門の入口から奥の方まで一面に生ひ繁つて、暑い日の輝く晝の中でもそこばかりはひやりとするように寂しかつた。それから後一年ほどの間といふものは、夕方になると肌寒い、ひやりとしたような寂しさが、その門の中から流れ出て、町一體が草原にでもなつてしまつたように、恐ろしいほど寂寞となつてしまつてゐた。私達は

その家の少し先にある稻荷の社で遊び過ぎて、町の表てが薄暗くなつてしまふと、もうその家の前を通るのが恐ろしかつた。年上の友達はその顔をまた面白がつて、昨夜はあの上に人魂が流れてゐるなどと云つては脅した。夕方その家の前を通るときには、私は眼をつぶつて馳け出した。

けれども怨念が残つてゐるだらうとか、幽霊が出るらしいとかいふような、怪談じみた幻想は、このせち辛い世の中では、全く贅澤な位である。現實に起つてゐる生活難の苦しみは、生きてゐる者には、同じ生活難で死んだ幽霊よりも恐ろしいに違いない。長い間だ空家となつてゐた、憲兵の額から流れた血の痕のあると云ふ家が、まづ第一に、家族の多勢ゐる、年とつた陸軍大尉によつて借りられてしまつたのであつた。恐らく格外に安くなつた家賃が、その勇敢な大尉をして、空家にこびりついた因縁だの祟りだのと云ふ、煙のようなはかない話を一蹴させてしまつたのであつたらう。野原のように繁つてゐた門の中の草も、奇麗に刈り取られてしまつた頃には、一軒塞がり二軒入りして、哀れな憲兵の死もだん／＼と町の人から忘れられて行つた。

けれども生垣と黒板塀の並んでゐるその町は、變ることもなく陰氣でうすら寂しかつた。私

は學校に行き、家のそとで遊ぶことが多くなるようになってから、小さな私の見聞もだんくと擴がつて來た。そして私は、私の家から出た横町を一つ隔てた先にある、町家の生活を見るたびに、その重苦しい家の生活と、寂しい町を呪ふようになって來た。父は、町家と云へば埃溜で、もあるように、そしてまたそこに住んでゐる人達の事を、無教育で禮儀を知らないと罵つて、私が町の子と遊ぶと云ふ事は、例の折檻に價するほど悪い事と云はれてゐたが、私はその無教育で禮儀を知らない人々の生活をどんなに羨んだか知れなかつた。

邸町の夜は——その頃は街燈と云ふものもなかつたから——漆で塗られたように濃い暗に閉ぢこめられてしまつてゐた。私達は、夜はたゞ恐ろしいものとして、戸の隙間からわづかにその暗さをこわく眺めるようにして育つて來た。それなのに一度町に出て見ると、そこにはいつまでも明るい灯がともつてゐた。そして町の子たちは、夜も尙面白さうに、何の恐ろしい事もない顔をして遊んでゐる。町の子はまた、父にも母にも何の遠慮もなく口を利いてゐた。夏ならば裸になつてそとで遊ぶし、角の駄菓子屋に集つては愉快らしく、ほつたら焼を焼いてゐた。私の家では、父の折檻に逢はなければならぬほどの事が、そこでは少しのわだかまりもなく、面白さうに行なはれてゐるのである。私はどうしてこんなつまらない、邸町の子として

生れて來たのかと、幾度自分を呪つたか知れなかつた。

私は殊にそれを、町の祭禮の時などに如何に深く考へたか判らないことだつた。祭りの時には町には美しい花飾りと、赤い提灯が軒並みにつるされた。紅白の紙を切つてはつた、淺はかな花ではあるが、それでも少年の眼には、生花よりも美しく見える時があるものだ。大通りでは所々に、葎子園ひの小舎の中に手際よく作られた庭が出來た。高い山を思はせるような岩、木立をしのばせる植木、白い砂は溪流のようにその裾を流れてゐる。町々の庭師が腕を競つたその庭は、少年の空想を深山幽谷に導くのに充分だつた。紅白の幕をめぐらした造酒所の中には、盛菓子や堆積され、紺の匂の高い裨纏を着た消防夫が、そこに詰めてゐた。夜になると大通りの行燈に火が入つて、様々な美しい繪を浮き出させた。如意輪堂の扉に矢鏃で歌をかく正行の鎧には櫻の花が降りかかり、櫻の木を削る高德の鎧にも、同じように櫻の花がそよいでゐた。錦の旗を奪ひ返す義照が、勇ましく闘つてゐるあなたにも、大和の野邊の櫻の花が美しく咲いてゐた。畫題が單調であつたように、色彩も技巧も拙いものには違ひなかつたが、薄絹の奥に蠟燭の光が灯る頃になると、その繪は生々と鮮かに浮き出して來るのであつた。活動寫眞など、云ふものゝなかつたその頃の私達は、月に二三度代る繪双紙屋の、三枚續きの繪の前に立

つて、一時間でも二時間でも、それからそれへと空想に耽つて少年の興味を満足させてゐたのである。町一杯に連つた繪行燈は、心ゆくばかり私の空想を満足させてくれるのだつた。

多くの町が、幕や提灯や造り花で彩られ、人々は祭りらしく浮立つてゐるときになつても、私達の町は、軒提灯一つ灯すでもなく、夜はやはりいつものように暗かつた。町の子は楽しさうに、夜も樽神輿を擔いではね廻つてゐるときでも、私は遠くから聞えて来る叫び聲を聞きながら、きめられた時間になると、行燈のとほつてゐる薄暗い部屋で、寢床に入らなければならなかつた。

たゞ一つ祭りには、恐らく私が死ぬまでも忘れまいと思つてゐる追憶がある。それは祭の本社である、須賀神社の境内に踊り屋臺のかゝつた時だつた。その頃はまだその境内も、今のように整頓されてゐなかつたので、高い坂の上にある社の側には、草の蓬々と生えた小さな原があつた。いつも祭の時には、御神體を入れたと云ふ神輿が町に出てしまふ爲に、本社の境内は平素より寂しい位であつたのが、その年は何年目とかの大祭であつた爲か、その草原に踊り屋臺が出来たのであつた。

不思議なことには、六月の中旬にあつた祭りの夜の事が、今の私には秋だつたようにばか

り思はれて仕方がない。蓬々と草の生えた小さな原の向ふに、葭簀で圍つて幕をめぐらした高い舞臺が建つてゐた。軒につるした提灯の光が闇の中にその舞臺だけをくつきりと明るくして残つた赤い火ざしが、草原の上をほかしたようにほんのりと照してゐた。

母や姉に連れられて私がそこに行つた時は、舞臺には太い櫻の幹が見えて、枝のない花が一面に枝垂れて咲いてゐた。花の下では眞白な顔に黒い着物を着て、眼尻を赤く色取つて頭巾を被つた關兵衛が踊つてゐたが、私はその手に持つた斧のぎら／＼光るのが何となく恐ろしかつた。——芝居を見ても人が切られれば、本當に血が出たと思つた頃の事である。子供の眼にはどんな物でも、凡てが眞實に映つてゐた——だから私はその斧の動く毎にひや／＼してゐたのであつたが、やがて櫻の幹の後ろから、煙硝を燃した赤い煙が吹き出して舞臺に煙が立ち籠めると、薄黒い幹の中から、櫻の精が現はれて來た。私にはその女を一目見た時の驚きが今でも忘れる事が出來ないでゐる。何と云つてその時の氣持を云つたら好いか判らないが、私は生れてからその日まで、それほど美しい女を見たことがなかつたのだ。どんな模様の着物を着てゐたのか、子供の事だから判らなかつたが、赤い扱帶しほをたらしと長く前に垂して、懐手をしてしんなりと薄黒い櫻の幹の前に立つたとき、私は心からその美しさに驚いてしまつたのであつた。





先生はとうとう怒つてしまつて、木の上にもた私をいきなり引つ抱えると、

『いら、こら』と怒鳴りつけたが、私はその咽喉を抓つたり、顔を引つばいたので、先生は遂にむきになつて、私の尻を二つ三つ叩いた。父の烈しい折檻を受けつけてゐる私には、その位のことは何でもなかつたが、打たれてゐる中に極りが悪くなつて来て、逃げ出して来てしまつた。それからのち、どんなきつかけがあつたのか、先生が學校へ出かけた留守に遊びに行くようになつてゐた。お菊さんの本當のお母さんは、とうの昔に死んだので、今ゐるのは繼母だと云ふ事を誰かに聞いた。雨が降つて表で遊ぶ事の出来ない日などに、先生の家遊びに行くとお菊さんはその繼母に、色々な本を読んで聞かせてゐた。鏡が池操の松影、と云ふ本を毎日續けて讀んで貰つた事もあつた。種彦の作か何かで、大きな楠を伐らうとすると、人夫がふるい落されるといふような話を聞いた事もあつた。けれども先生が歸つて来る頃になると、漢學や英語を教はる生徒がつかけてくるので、私はいや／＼家へ歸らなければならなかつた。英語は専門學校に通つてゐた、お菊さんの兄さんが教へてゐた。

私もそこへ来る大きな人達に交つて、先生に教へて貰ふ事が出来るようになったときは嬉しかつた。然し父は最初に孟子を持たせて

『之れを教はれ』と云つて家を出された。

『こんな物はまだあんにやむづかしい』と先生が云つたので、私はそれをもつて家へ歸つて来たが、

『いや孟子が一番名文だから之れを習ひなさい。私が習へと云つたらそれで好い』と父はどうしてもきかないので、私はまたそれを持つて行つた。けれども孟子が梁の惡王に會つたり、何を以てか國を治めんとすると議論をし合つたりするような事は、私には何の事が判らなかつた。父は先生に講義をして貰へと云つたが、先生の方ではしなかつた。父もとう／＼我を折つて、日本外史にしたが豊臣秀吉が銀杏村に生れる、と云ふような所から始めさせられたが、それも素讀より他のことは、先生がしてくれなかつた。さうして最後には、慶應義塾の何とか云ふ先生の出した、日本歴史を教はる事になつた。

その本にかはつてから、私はお菊さんに教へて貰ふようになった。座敷には先生が漢文の素讀を誰か一人に教へてゐる間だ、多くの生徒がその周圍で、疊の上に本をおいて復習してゐたが、茶の間の方は靜かだつた。お菊さんはその歴史の本を讀みながら、色々面白い話を聞かせてくれた。報國丹心嘆獨力と云ふ高德を詠じた詩を教はつたのもその時の事である。お菊さ

んはそのほかにも、色々な漢詩を教へてくれた。今考へるとどれもこれも低級なつまらない詩ばかりであつたが、櫻の花を描いた繪行燈に見耽つたり、櫻井の驛の話を書いて涙をこぼした子供には、丁度好いものだつた。お菊さんはその頃出た本の挿繪にある、束髪に網をかぶせて大きな薔薇の簪をさしてゐたような女だつた。夏の夕方の事だつた。お菊さんは茶の間の窓のところ立つて、表ての通りを眺めてゐた。そのとき長澤と云ふ裁判官の子が窓の下を馳けて行つたら、お菊さんは

『あの子はどこの子?』と私に訊ねた。

『あれは長澤さんの子なの』と答へると

『さう、本當に美少年ね』とお菊さんは云つた。私は何とも云えない、胸苦しいような嫉妬を感じた。

日本歴史をあけてしまふと、また日本外史にかへつて來た。そして私は再び座敷の方に來て、白馬と云はれる先生が、時々『けぶつ、けぶつ』と酒臭い息を吐くいやな匂をかゞされながら面白くもない本を無暗に宙に覺えてゐた。しかしそれも、長くやらない中に私は家庭を離れて、お菊さんとも別れて、雪の深い山形へ泣きに行くようになってしまつた。

前にも云つたように、父は我儘であつた故か友人と云ふものを餘り持たなかつた。父の所へ遊びに來て一緒に酒でも飲む人は、同じ國の者では淺井と云ふ人が一人だつた。我の強い父には、友達と云ふ者すら持てなかつたのかも知れなかつた。その外に父の所へ來て酒を飲むのは御舟瀉と云ふ最負の角力と、出入の職人ばかりだつた。御舟瀉は巡業に出してしまふとばつたり來なくなつたが、本場所に歸つて來ると、毎日のように來ては私を自分の子供のように可愛がつて呉れた。父と座敷で酒を飲んで、酔つてくると、私を相手に相撲をとつて、大きな身體でころり／＼と轉がつては負けてくれた。御舟瀉の來ない時は、父はよく職人を集めては酒を飲ませて、大きな聲で普請の話か何かをやつてゐた。職人達が股引をはいた足を窮屈らしく坐つて酒を飲んでゐた。職人の中では疊屋の親方と云ふのが、私を可愛がつて、肩車をさせては自分の家へ連れて行つてくれた。私は小さい時から絆纏の紺の匂が好きだつた。私が二十六七になつてから土方をしてゐたとき、義兄が死んだので行つたらば、その親方に逢つた。

『今なにをしていらつしやる?』と親方が訊いたから、

『土方です』と答へたら、親方はそれつきり黙つて妙な顔をしてゐた。御舟瀉は三四年前に死んだが私の家が落魄してからも、始終來ては私の面倒を見たり、相撲へ連れて行つてくれたり

した。そんな風で父には友達と云ふものがなく、それに母が東京の者であつた爲か、國者の親戚とも餘り往來をしなかつた。さうして何を云つても、自分に逆らはない、相撲だの職人を集めて好い心持になつて酒でも飲んでゐたのだらう。一體に父は一面に非常に頑固で、昔風な武士氣質と云ふような氣風も持つてゐたが、またどこかに享樂的な分子も多かつた。父の兄弟などは、可なり相當な生活もしてゐたが、それでも私達が呼ばれてその家へ行つて何か喰はされると、國風な物の煮方などが不味くつて、とても喰べる事も出来ないほどだつたが、父はそれとは反對に、母を幾度か泣かせた程食物にまで矢釜しかつた。そればかりでなく伯父の家の生活は、何も彼も殺風景だつた。従姉妹などは、三十を越すまで、芝居を見た事もなければ、寄席のかどを覗いた事もなく暮してゐた。私の弟が中學を出て、藝術座に入つたとき二人して、父には他に感謝する事もないが、たゞ子供の時から芝居や寄席へ連れて行つてくれた事と、今でも多少は、藝術的な何物かを持つてゐることだけだと話した事があつた。父は實際芝居が好きであつたと見えて、酒に酔ふとは、岩井半四郎とか桑三郎とかいふ役者の逸話を聞かせてくれた事があつた。そのころ父は八百藏が好きであつたと見えて、八百藏の出る芝居へ連れて行かれたことが多かつた。何でも一度、本郷座の前身だつた春木座へ行つたときには、田舎から出

て来たばかりの女中を連れて行つたが、加賀騒動か何かの狂言で、膳部の毒味をした奇麗な役者が毒に中つて、俄かに苦しみ出して死んだのを見て、女中は本當に死んだのぢやないかと氣を揉んで泣いたので、母や姉が芝居のことを云い聞かせて、宥めてゐたことを覚えてゐる。

父はまた人形芝居が好きであつた。四谷の金澤といふ寄席へ國五郎がかゝると、私達を連れて行つてくれた。寄席の布團は不潔だと云つて、赤い毛布を女中に持たせて行くのだつたが、一度日蓮記を見た時に、一緒に行つた女中が、俄かに唾をばつくと吐き始めて、歸りには表の看板へまた唾をはきかけて、しきりと何か罵つてゐた。私達の周圍には一杯人がたかつて口々に笑つてゐるので、姉と私は先に逃げて歸つてしまつた。家へ歸つてから短氣な父が、日頃とは似てもつかない穩かな調子でその女中に何か云ひ聞かせてゐたが、一三日たつてからの女は、寄席の看板が是非見たいと云つて家を出たまゝ、どこへ行つてしまつたか判らなくなつてしまつた。不思議な女だと思つて私は今でも覚えてゐる。

母はその頃福助と云つた、今の歌右衛門が好きだつた。母の父である私の祖父は、幕末の頽廢した空氣の中に育つた、遊藝好きな人だつたと、母は私に話してくれた。祖父は色々な遊藝をやつたが、中でも長唄は堂に入つてゐたと云ふ事だ。四谷に大きな火事があつて、祖父の遺

品は皆な焼けたのか盗まれたか判らなくなつてしまつたが、荷物の中には三味線と、刀劍が多かつたと母はいつも惜しさうに話してゐた。母が今度男の子を生んだらやると云つてゐた好い短刀もその中であつたと云ふ事を聞いたとき、私は里の叔母の不注意を長く恨んだ。

祖父が放蕩者だつたといふ話も聞かないが、その生活は恐らく頹廢してゐたものと思はれる。母の伯父になつてゐた村井と云ふ祖父の兄弟は、十八九の頃人を切つて家を飛び出して、破落兒旗本の家に匿まはれてゐて、その後も放蕩をし盡して、囃子の鉦叩きにまでなつた事があると云ふ事を私は聞いた。その伯父もその頃は、麻布の方に住んでゐて、眞面目臭つた顔をしてゐたが、恐らく祖父の持つてゐた享樂的な血潮は、母にも流れ、そして私にも可なり濃く流れ込んでゐた。私は父の狂暴な激しい血と、母から受けた甘い享樂的な血との二つを身體の中に持つてゐて、その二つがいつも調和する事の出来ない爲に長く苦しんで來た。今でもそれで苦しんでゐる。健康な身體と頹廢した魂とが、道義的な精神と、放縱な享樂的な血潮とが、絶えず身體の中で争つてゐる。藝術に没頭する事も出来なければ、實行に突進する事も出来ず、絶えざる美の陶醉に生きるでもなく、冷たい理論を追いつめてゐるでもない。分裂の苦痛は、生と死の間に常に私を彷徨させてゐる。

そんな風で、父には友人がない爲に、私の家には客らしい人の來ることも妙なかつたが、たゞ年に一度づゝ地方から出て來ては、一週間か十日位私の家に泊つて行く人があつた。私達はその人を『柴田の小父さん』と呼んでゐた。その人もとは父が新潟へ出張した時に、まだ少年だつた柴田の小父さんが、父と東京へ行きたいと頼んだので連れて來て、どこかの役所に世話をしたのだと云ふ事だつた。

柴田の小父さんは私が覺えてからは、沖繩の縣廳に勤めてゐたが、親孝行なその人は、夏休みになると、越後に一人残つてゐる、母親に逢ひに行くために出て來ては私の家へ泊つて行くのだつた。私達はその小父さんの出て來るのを、毎年楽しみにして待つてゐた。小父さんは私の家に来ると、必ずどこかへ遊びに連れて行つてくれた。博物館の前から何とか云ふ外國人が、風船に乗つて飛ぶのを見せに行つてくれたのもその人だつた。十二階の頂上に連れて行つて、細長い望遠鏡を覗かせてくれたのもその人だつた。父も時々は淺草や上野へ連れて行つてくれたことがあつたが、飽くまで自己本位な父は、子供が玩具に見とれて立ち止つても、往來の眞中で大きな聲で怒鳴りつけて、料理屋に入れば自分ばかり勝手に酒を飲んで酔つてしまふので私達には恐ろしく、また苦痛なことだつた。けれども柴田の小父さんは、いつでも私達のし

たいまゝにしておいてくれるので、私達は小父さんの來るのを楽しみに待つてゐたわけであつた。

小父さんは私が七つのときに結婚した。お嫁さんとなつたのは、同じ四谷に住んでゐた軍人の娘で、お澄さんと云ふ人だつた。その時はたしか冬だつたように私は覚えてゐる。座敷と茶の間の襖を拂つた部屋の中には、燭臺と百目蠟燭を立てたのが、何本も並んでゐた。その晩は傳馬町といふところの、頭の娘が二人傳手ひに來た。二人とも奇麗な娘だつたが、二人とも不運に死んだ女だつた——それはまたあとから書く折もあるだらう——母の里の叔母も來てゐたし、從兄弟の山崎もたしか來てゐた。座敷の中は人で一杯になつてゐた。みんなは何でも酒をのみ父が謡を歌ひ頭の娘が踊をおどつた。私はたゞほんやりして座つてゐたようである。たしかそれは冬のことだつたが、座敷の中がだん／＼賑かになつて來た時分に、搦番の半鐘が鳴り出した。

誰か、椽側の戸を明けると、つい二三町先の大通りの方に、眞赤な炎が、暗い空に燃え上つてゐた。姉や私は火を見ると、齒をがち／＼云はせて慄えてゐた。すると叔母が、

『大變ですよ、これはきつと家の方ですよ』

と金切聲で叫び出したのだけを感じてゐる。それからどうなつてしまつたのか、私は知らな

いが、柴田の小父さんは、すぐに着物を着換へて、叔母のあとを追つて行つたと云ふ事だつた。然し火事は叔母の家の近所ではなかつた。四谷の大通が焼けたのであつた。今でも巴屋といふ蕎麥屋の角から、一町程の間だ、町が擴がつて凹んでゐるところは、その火事で焼けたように思はれる。そのときは、眞黒な空に大きな火の粉が美しく飛んで、私の家の庭にも落ちた。翌る日の朝起きて見たら、庭にも畑にも、大きな木片の黒く焼けたのが澤山落ちてゐた。柴田の小父さんの結婚は、燭臺の澤山あつた明るい座敷と、頭の娘と、空を焦した火事の炎を夢のように私の頭に殘してくれた。

それからのち小父さんが東京に出て來るときには、お澄さんも連れて來た。さうしていつも閉つてゐる離れの方に泊つてゐた。

私が九つになつたときに、父は役所をやめられたらしかつた。大體父は前にも云つたように役所の友人と云ふ者もなく、役所の勤め方も雨が降つたと云つては休んだり、氣持が悪いといつては行かなかつたり、どこかへ相場をしに行つて缺勤したりしてゐたのだから役所の受けも悪かつたに違ひない。それにその役所へ出られるようになったのも、父の兄が字が上手で、大久保利通か誰かに可愛がられて、誰とかの祕書官になつたと云ふような關係から、我儘をして

も續いてゐたのであつたが、伯父が官吏をやめてしまつてからは、父も無援となつてしまつてほつきりと首を切られたのであつたらう。それにその前年、相場で非常に失敗して、他所に持つてゐた地所も家作も私達の住んでゐた邸まで、何でも抵當に入つてしまつてゐたと云ふ事だつた。今まで毎日のように來てゐた職人も、びつたり來なくなつてしまつて、寂しい家は、一層陰氣になつてしまつた。それまでは、年に二三度位は遊びに來た伯父も、父の従兄弟であつた野村龍太郎など、云ふ男も、滅多に來る事がなくなつた。それは幼かつた私の頭にも、はつきりはしなかつたが妙な寂しい心持と、卑しい反抗心を起させた。

父 役所へ行かなくなつてからは、座敷に引込んで本ばかり讀んでゐた。そして時々大通の道具屋を呼んで來ては、掛物や道具をほつ／＼賣つてゐた。私が好きだつた、清少納言が簾をかゝけてゐる繪の掛物や、青銅の蟹の文鎮を膝の前に並べて腕組をして惜しさうに道具屋と話をしてゐる父を見た時には、私も父が何だか可哀相だつた。さうして私が毎朝學校に通ふとき、その道具屋の前を通ると、昨日まで家にあつた色々な品物が、店の奥に並べてあつたりした。私はそれを見るたびに、妙な悲哀に襲はれた。

父が家に始終ゐるといふ事は、陰氣な家庭をなほさら重苦しく窮屈にした。私はもう父の留

守の間だけ母に甘えるといふ特權も奪はれてしまつたし、その上いら／＼してゐたらしい父からは、晝間の中から擲られたり抓られたりしなければならなかつた。臆病で病身だつた私も、その頃からだん／＼悪戯が烈しくなつて來た。學校が退けても家へ歸れば、嚴しい父の聲を聞くのさへいやなので、荷物を玄關へ投げ込むと、逃げるようにして遊びに出かけてしまふのだつた。それが又た餘計に父の疍に觸れて、歸つて來るといつも小言と折檻が待つてゐた。私もそれを知り切つてゐた。けれども本當にたゞ一時間でも、父のそばにゐる不快さから免れたいばつかりに、夕方になれば怒られる事を知りながら、そとに出て遊んでゐて、歸ればすぐに叱られる事を考へると、もう少しも少しと、一寸逃れに晩飯も食べずに町をうろついたり何かして、暗くなつて友達もゐず、町も寂しくなつてくると、仕方がなしに歸つて行くのだつた。眼の廻るほど腹が減つて家へ歸つても、晩飯も喰はされずに、擲られたり抓られたりして苦しんでばかりゐた。

實際私はその頃は、自分の家もいやだつた。生きてゐるのもいやだつた。學校もつまらなかつた。夜になると父に擲られ、朝になると腫れほつたい眼をして、不精不承に學校に行き、それが終るとまた夜の折檻を眼の前にぶら下げながら、暗い心持で表てに遊んでゐた。

遂に父は、私が家へ歸つても復習もしなければ、お菊さんの所へも行かず、遊んでばかりゐるのを知つて、離れの部屋で、毎日二時間づゝ復習と習字をしろと云ひ渡した。父は自分が字が下手なので、それを苦にしてゐた爲か、習字の事ばかり矢張りしかつたが、私はまたそれが一番嫌いだった。人氣のない離れの部屋でほつねんとして字を書いて、父の前に持つて行くと、『なんぢや、こんな下手な字を書いて』と叱られて、また書き直しをやらされた。さうしてそれが終る頃には、もう夕方になつてゐて、そとに行けば叱られるので、私はつまらない顔をして、ぢつと一人で遊んでゐた。

けれども私も遂に、その監禁のような目には堪えなくなつた。面白くもない手習ひをしてゐる耳に、そとで遊ぶ友達の聲が聞えたとき、

『構ふもんか』と云ふような氣になつて、臺所の前を通れば誰かに見附かるので、扉を乗り越えて表へ遊びに出てしまつた。その日は無論歸ればどんなに酷い目に會ふか判らない事も覺悟して、思ふが儘に遊んでゐた。しかしやがて夜になつて、友達もみんな家へ歸つてしまつたとき、私も矢張り、いやな家でも歸らなければならなかつた。私は腕や股を抓り上げられる時の苦しみを、頭の中で息苦しく考へながら、進まない足で家へ歸つて行つた。父はもう豫想

してゐた通り怒つて母に何かぶつゝ云ふ聲が、玄關の方まで聞えてゐた。自暴になつて私は構はず入つて、茶の間の障子をがらつと明けると母は脅えたような白い眼をして、ちらりと私を見るとすぐに俯向いてしまつた。私は黙つて突つ立つてゐると、

『そこへ坐りなさい』と、父は太い指を突き出した。私はどかりとそこに坐つた。

『一體お前は、今日かうしてこの世の中に生れて來て、毎日學校へやつて貰つてゐるのは、誰れの恩ぢやと思つてゐる。それに』——と父はもういつもの口癖通り、生みの恩と育ての恩を押しつけた。

『そんなに恩、思つて云ふなら生まなきや好いのに』私は口の中で呟いた。

『なに、なにを云ふんぢや、一體貴様はどこへ行つとつた』父はもうすぐ、掴みかゝりさうな風を示したが、私はそれ切り黙つてゐた。

『云はん、云はんならよし』と父は立ち上つて來た。私はそこに引き据えられて、滅茶苦茶に擲られた。それからやがてまた、股と腕をいつものように抓られた。今日こそは泣くまいと思つて、ぢつと頭をかゝえて堪えてゐると、だんゝ胸が悪くなつて來て、頭がくらくとすると遂に

『そんな事をするなら殺してくれえ』と叫びながら手足を無暗に振り廻した。  
『何を生意氣な、よし殺してやる』父はまた一つ股のどこを烈しく抓つた。抓られる痛みは、全身に響くほど強かつた。

『そんな事をしないで一思ひに殺してくれ』

私はまた叫んだ。

『まだそんな事を云ふか』とそれから、ところを嫌はず抓られたり擲られたりした。そして最後に

『貴様のような奴は何處へでも行つてしまへ』と云つて父は漸く私を放した。私はほつとして起き上つたが身體中の肉は痛みにびく／＼慄えて、胸はむか／＼した。そして今まで堪えてゐた口惜しさが、一時に頭の中にくみ上げて来て何もかも判らなくなつてしまつた。

『どこへでも行けつていふならどこへでも行きます。こんな家に誰れがゐるもんか』と私はきつぱり云つた。

『なにいつ』と父はまた立ちかゝらうとしたとき、私は素早く玄關の方へ逃げだした。

『これつ、信つ』と云ふ鋭い母の聲と、『信ちやんてえば』と泣きかゝつた姉の聲をそのときに

耳にしたが、私はそのまま暗い表で飛び出してしまつた。

私はほんとに、どこへでも好いから行つてしまひたかつた。どこでも好い、どこでも好いから、あの父から受ける苦しみのないような所へ行きたかつた。病氣をして、母があんなに大事に看病してくれたときに、死んでしまへばよかつたのだ、と云ふよりは氣さへ起つた。大通りに出て、繪双紙屋の前に立つたり、あちらこちらと長い間ださまよつてゐた、濠ばたの方へも行つたが、眞暗な夜の色が、すぐに私の心を厭迫してしまつた。私はだん／＼寂しくなつて来て、明るい火のついた所で休みたくなつてしまつた。そして私は叔母の家を尋ねて行つた。私の行つたときはもうすぐの姉が、私の學校道具を持つて、叔母の家に来てゐた。私の來方が遅かつたので本當にどこかへ行つてしまつたのではないかと氣を揉んで、女中と二人で探しに出掛けようと云つてゐた所だと、姉はすぐに私に話した。

『それぢやあね、叔母さんにお願ひして、二三日こゝに泊つていらつしやい。その中にお母さんがお詫をして下さるから』と姉は私の顔を見ると、ほつとしたように云つて歸つてしまつた。

『どうしたの信ちやん、夜になつて家を飛び出してくるなんて』叔母はけ／＼らしく尋ねた。

叔母の養女になつてゐる、私と一つ違いの姉もゐるが、私はそれが私の姉だと云ふ事を長く知



らないでゐた爲に、姉のような気分がしないので、きまりが悪くつて黙つてゐた。

私は父の拷問にあつた揚句、頭の中もごちやごちやになつてしまつたので、ひどく疲れてゐて、飯を食べるとすぐに寝かせて貰つたが、眼が冴えていつまでもねられなかつた。その晩私をはじめ、セコンドを刻む時計の音をしみんと聞いたのを憶えてゐる。それから二三日は叔母のところから學校へ通つてゐた。叔母の家では藏があつて藏の鍛しごのところには、古い本箱や長持が積んであつた。私は毎日學校から歸つてくると、埃だらけな長持の奥の方に引つ込んで、薄暗いひやりとしたような所に寝轉びながら、少年らしい妙な空想に耽つてゐた。

その時分は私はもうどこでも好いから、あの父のゐない所へ行きたかつた。さうして出来るなら母と去年生れた私の弟と一緒に行きたいと思つてゐた。學校へ行くのにも歸るにもそんな事ばかりを考へてゐた。

その年に丁度日清戦争が始まつた。今まで四谷の通りに『おつべけべえ』だの『きんぶきんぶきーんぶ』など云ふ節の歌をうたつて、大道演説をやつて、巡查がくると冬ならば『鳥が来た』と、夏ならば『鶯が来たから』と、太い洋杖をかゝへて逃げ歩いてゐた壯士達は『日清談判破裂して』と云ふ歌をうたつて、町に本を賣つて歩いてゐた。繪双紙屋の三枚續きも、

紫辰殿の庭をめぐる、悪源太義平と重盛の繪などははづされて、太砲の丸が妙な恰好に飛んでゐたり、鐵砲の丸が棒のように交錯してゐたり、辨髮のちやん／＼坊主が、大きな口を開けて手を擴げて倒れてゐる、幼稚な石版刷の繪に變つてしまつた。少年の氣も立つて、學校でも軍人の子はバカに巾を利かせてゐた。その頃が少年の思想をミリタリズムが支配した絶頂だつたように思はれる。私達の級で、『軍人になりたい人は』と教師が訊くと、生徒の殆んど全部が手をあげた。私も五つ六つまでは、海軍の軍人になりたかつたのだが、身體が弱いから駄目だと云はれたので諦めてゐた。何でも好いから船に乗りたいたばかり思つてゐたが、それで軍人志願でない爲めに、ほかの生徒達からは可なり輕蔑されてしまつてゐた。

その年の暮に柴田の小父さんが又た東京に出て來たのだつた。その時はもうお澄さんも私の弟と同一年の子の母となつてゐた。小父さんはその年、故郷にゐる母が老年になつたからと云ふので、北國の方へ轉任願ひを出して、山形の縣廳に行く事になつたので、沖繩の方を引き上げて山形へ行く途中私の家へ寄つたのであつた。その時は小父さんは、何か忙しさに毎日方々出歩るいてゐるが、家へ歸つて來て、離れの方にあるときは、私はいつも遊びに行つて、沖繩の話や、汽車の中の事を聞いて楽しんでゐた。

どんな話の末であつたか忘れたが、私は小父さんと一緒に、田舎へ連れて行つてくれと云ひ出した。すると小父さんは、

『きつと小父さんと一緒に行くか』と念を押した。

『本當に行きたい』と私は答へた。よそへ連れて行つても、何も小言を云はないこの小父さんと一緒に田舎へ行つて暮した方が、あの矢筈しい父に毎日擲られて生きてゐるより餘つほど好いとその時は考へてゐたのだつた。

その晩小父さんは座敷で父と酒を飲みながら、何か話をしてゐたが、

『信さん、一寸おいで』と私を呼んだ。そして、

『信さんは本當に小父さんと一緒に田舎へ行くかね』と父の前でまた念を押した。

『え、本當に行きます』と私はまた答へた。

『それぢやどうでせう、信さんもしきりと行きたいと云ひますし、私もあなたへ御恩返しにせめて信さんが、中學を卒業するまで御世話をしたいと思ひますが』と小父さんは父に云つた。

『ふむ、いや御厚意は有難いが』と云つて父は少時考へてゐたが、

『信、お前は本當にいきなさるか』と今度は父が私に尋ねた。

『え、本當に行きたいんです』と私はこゝで小父に連れて行かれなかつたら、この後また苦しまなければならぬと思ふので、熱心に答へた。

『さうかのう、それならまづ今晚一晩考へて見よう』と云つて、父はすぐに行けとは云はなかつた。

母はその話を聞くと、

『お前、本當に山形なんかへ行く氣かへ』と心配さうに尋ねた。

『だつて、家にゐてお父さんにいぢめられるより、どつかへ行つた方が本當に好いんですもの』と私は云つた、母はそれつきり黙つてゐた。翌晩になつて、父も母も揃つてまた柴田の小父さん夫婦と相談してゐた。さうしてとうとう私は山形へ行く事に決つてしまつた。

『ではねえ柴田さん、何分我儘者ですけれど何卒ほんとうによろしく願ひします』と母は涙を流して頼んでゐた。そのときは私も少し悲しかつたが、まだ見ない山形と云ふ所が、すぐにその悲しみを消してくれた。

翌日から私は、柴田の小父さんにつれられて、飯田町にゐた祖母のところをはじめに、方々の親戚に暇乞いに歩いた。お菊さんの所へも別れに行つた。出發する前の晩には、里の叔母や、

山崎の大叔母だの、お八重さんが来て、小さな私の送別會を開いてくれた。父も私が山形へ行くときまつてからは、大して小言も云はなくなつた。母は着物の事や何かを心配したり、四谷の通りへ連れて行つて、望遠鏡だの積木だの玩具や繪本を澤山買つてくれた。

私がさうして、生れて初めて親の家から離れたのは、たしか十一月の末だつたように覺えてゐる。何でも山路將軍がどうかして旅順港が落ちた頃だつた。上野から一番の汽車に乗るのには、朝暗い中に家を出なければならなかつた。平四郎と云ふ車夫が小父さんをのせて、私は常公爺やの車に乗つてゐた。常公はいつも母を乗せて行く車だつたが、一人してその車に乗つたのはその日が始めてだつた。家を出る時は暗くつてまだ寒かつた。眞暗な道を提灯をつけて、表門の所まで、父も母も姉達も送つて来てくれた。母は私が俥に乗るときに、

『身體を大事にするんですよ』と云つて頬ずりをしてくれた。父もその時は

『小父さんの云ふ事をよく聞いて、身體を大事にしなさい』と云つてくれた。

俥が暗い道を走り初めると、私はだん／＼悲しくなつて來た。いやな家だと思つてゐても、離れて見ると、急に母や弟が戀しくなつてくる。濠端に出て強力松の下を通る時、私は俥の上でしく／＼泣き出した。さうして常公に家の方へ返つてくれと云つたが常公は、

『今つからそんな事を仰有つちやいけませんよ』と云つて、常公は構はず小父さん達の乗つてゐる俥のあとを追つて行つた。人の好い溫和しい、私の大好きな爺さんだつたが、その時は何となく憎らしかつた。

上野から汽車に乗つたときもまだ暗かつた。闇の中を走る汽車の煙が、赤く光つて空を飛ぶのが何となく恐ろしかつた。私は黙つて小父さんのそばに座つてゐたが、その時分からお澄さんの私に對する態度はもうがらりと變つてゐた。家に來て泊つてゐる時は、

『信さん、信さん』と云つて、私を大事にしてくれてゐたが、汽車に乗ると、すぐと私は何か小言を云はれた。夜が明けても、汽車は、小山や雜木林の中を走つてゐた。いつまでたつても同じような景色だつた。小さな雜木が澤山生えてゐる丘のふちを通つたとき小父さんは、

『あれは柴栗と云ふ木だよ』と話してくれた。それから少し先で、

『この邊が那須のが原と云ふ所だ』とも聞かせてくれた。私の持つてゐる繪本の中には、九尾の狐が、この原で殺されてゐるとこの繪があつたので、私は珍らしさうに汽車の窓からそとを眺めたが、そこもたゞ雜木林や草原が廣く／＼續いてゐるばかりだつた。私はまたいつか悲しくなつて、ぢつと黙つて何か考へ込んでゐた。その時お澄さんが、

『本當に子供らしくない子ですね、いやに人の顔ばかりじろく見て』と私が眼つてゐるとでも思つたのか、小さな聲で小父さんに囁いた。

『餘り宮島さんが嚴しいから、こんな風になつたんだよ、本當に自分の子とは思へないような事をするからね』と小父さんは辯解するように答へてゐた。私は自分が子供らしくない變な子だと云ふ事をその時初めて聞いた。恐らく私はきつと、子供らしくない、いやにませた、可愛氣のない子だつたに違ひない。

汽車は一日草原や山の裾を走つてゐた。さうしてまた暗い夜が來た。私は黙つて母の事ばかり考へてゐたようだつたが、やがて汽車は薄暗い小さな驛で留つてしまつた。さうして今年になつてから初めての大雪が降つたために、今夜はとても仙臺まで行かれないと、驛員が云つて歩いた。乗つてゐた人達は何かぶつく云ひながら、皆な降りた。それは桑折と云ふ停車場だつたが、私はその名前が餘り變だつたので憶えてゐた。私達はそれから俥に乗つて、暗い町をあつちこつちと引き廻された、さうして漸く薄暗い汚い宿屋に泊る部屋を探し出したのであつた。

宿屋の部屋は汚なかつた。さうしてランプが馬鹿に暗かつた。私はその部屋に入つて坐ると

急に悲しくなつて、また聲をあけて泣き出した。

『なんだね信さん、男の子がそんな事で仕方があるものか、小父さんだつて小さい時に、信さんのお父さんに連れられて東京へ出て來たのだが、そんなに泣きはしなかつたよ』

と小父さんはなだめてくれた。けれども私は小父さんが東京へ來たのは私よりはるかに年を取つてからだと云ふ事を知つてゐた。それで心の中には多少の不滿はあつたけれど極りが悪いので黙つてしまつた。かうしてその夜の事を書いてゐる中にも、薄暗く寒く汚なかつた宿屋の部屋が私の頭に浮んで來る。部屋の隅には何の爲か、煤けた小屏風が置いてあつた。三分心の暗いランプが、眞黒になつた壁の上を照してゐた。私はそのランプの下で寂しい——生れて初めて両親に別れて、旅に出た第一夜の——晩飯を喰べた。どう云ふわけか恐ろしく鹽の辛い鮭がついて來たのを今でも覚えてゐる。晩飯が終つてしまふと、私はまた悲しくなつて、隅の方でしく／＼泣いてゐた。宿屋の裏の野面を吹く風が、聞き馴れない物凄じい響きを立て、兩戸に當つてゐた。私はそれが、晝間通つて來たあの廣い原から吹いて來るように思はれて、そしてまたその廣い原の暗い夜を思ふと何となく恐ろしかつた。冷たい床に入つてからも仲々眠れなかつた。私はその時、親類の家に泊つた時のことや何かを考へて、自分の心を静めようとした

ことを覚えてゐる。さうして時々、ふと頭を上げて枕の周囲を見廻したが、そこには矢張り母も弟もゐないのをたしかめると、私は一層悲しくなつて布團を被つてまたしく／＼泣いてゐた。

翌朝はそれでも空が晴れて、仙臺行の汽車も通ることになつた。私達は何でも晝頃に、仙臺の町に入つたように覚えてゐる。さうして針久と云ふ妙な名前の宿屋に泊つた。晝の光りの明るい中は、さうしてまたその宿屋の二階から、藁靴やモツペイを履いた變つた服装をした人達の通る町を見てゐる間は、私の寂しい心もまぎれてゐたが、その宿屋の部屋に入つて來ると、すぐにお澄さんの意地の悪い眼で睨まれるので、私はもう氣樂に自由に遊ぶ事は出来なくなつてゐた。私は寂しいときに、色々な話をしてくれる、母や姉のゐない事も、可愛がつては遊んでやつた弟のゐないのも、それ等の人達に代るものゝない事もそのときはつきりと意識した。仙臺の宿屋では、私は母が買つてくれた繪本ばかりを友達にして半日を暮した。そしてその日から私には、本ばかりが親しい友達となつてしまつたのであつた。

その頃にはまだ仙臺から山形へ行く汽車がなかつたので、その翌日から私達は、俣に乗つて旅をしなければならなかつたのだが、丁度運悪くその朝から、また雪がちら／＼降り初めてゐ

た。仙臺の町を離れる頃には、まだそれほどもなかつたが、進むに従つて雪はだん／＼ひどくなつて來た。幌をかけた俣の上は陰氣で、桐油の匂がむつとするやうに籠つてゐた。烈しい吹雪が吹きつけて來ると、俣の周圍は息もつかないやうな雪煙が立ち籠めて、幌の隙間から舞ひ込んで來る雪が胸までかけた毛布の上に白く積つた。ぢつとして俣にゆられてゐる私の足の指先は凍つて切れるやうにづき／＼痛んで來た。

俣はその吹雪の中をいつまでもいつまでも走つてゐた。これから先きどの位走る走つたら暖い火に當れるのか、人のゐる所に出られるのか、あともさきも、たゞ眞白な冷たい雪の中を同じやうな調子で走つてゐるばかりである。身體はだん／＼と冷えてくるし、足の指先はもう感じのなくなるほど冷え切つて、寒さと、桐油のむれる匂に酔つて、私の胸は吐きさうでむか／＼してゐた。けれども人間は、悲しさや苦しさが極度に達してしまふと、何を當てに悲しんだり泣いたりして好いのかも判らなくなつてしまふものだ。私はその薄暗く臭い冷たい俣の上で、胸の悪いのをぢつと堪えながら、へしやがれたやうに小さくなつて幌の中で丸まつてゐた。

私はさうして俣の上で、四五時間はゆられてゐたやうに記憶してゐる。何を見ても苦しく悲しいので、ぢつと眼を瞑つてゐたが、足の指の冷たさはだん／＼に烈しくなり、骨にしみてく

るともう足全體が切られるように痛み出して、それが俵の揺れる度に、身體中にづき／＼と響くのだつた。向ひ風の吹雪が烈しく吹きつけるので、俵は歩いてゐるのか、判らないのか判らないほどの、のそ／＼と進んでゐる。もし一丁か二丁の所を馳け出して行きつけるものならば、俵から飛び降りても馳けたいと思つたが、時々眼を開て眺めても見る限りは、あとも先きも、たゞ眞白な雪が立ち籠めてゐるだけだつた。

小父さんやお澄さんの俵は、若い人が曳いてゐるのか、二三丁先を走つて行くのが、吹雪の絶間に、ちら／＼と見えるだけで、ゴーツと一つ強い風が吹きつけて來るとそれすらも見えなくなつてしまふ。そこをどう俵が走つてゐるのか、何處に山があるのか川なのかさへ見る事も出来なかつた。それは何でも雜木林か何かのわきを走つてゐる時だつた。息もつけられないような烈しい風がどつと吹きつけて來た。俵はその風に煽られると、進む事が出来なくなつてしまつたと見えてびたりと留つた。私は驚いて幌のすきから覗いて見ると、車夫は笠をかきつけて、たゞぢつと立つてゐる。濛々と舞ひ上つた雪は、氣狂のように入り亂れて飛んでゐる。その瞬間の奇妙な靜寂が、私の心をすつかり脅やかしてしまつたものだらう。かうしてこの吹雪の中に立ち盡してゐたらと思ふと、堪えてゐた悲しさが急に破裂でもしたように、私はわ／＼と泣き始めた。

その聲を聞くと車夫は驚いて、慌て、二足三足歩き出した。吹雪が一息吐いたように納まつたが、眞白な道の向ふには、小父さん達の俵の影も見えなかつた。私はまた淋しくなつたので、そのまゝに泣き通してゐた。それから少時たつて、私の俵は、何とか云ふ温泉宿についたようだつた。

一晩泊つたその温泉宿は、高い崖の上に建つてゐて、崖の下の川邊に湧いてゐる温泉へ入りに行くには、長い梯子を幾つも下つて行かなければならなかつた。殊に私の泊つた時には、去年俄かに山の水が押して來て、その梯子をすつかり流してしまつたので、假梯子を作つたのだと云つてゐたが、繩で結へた丸太の欄干の間に、歩く度にみし／＼しなふ薄板が渡してあつて、板の隙間からは深い崖が薄氣味悪く覗いてゐた。その大水の時には湯に入つてゐた人もすつかり流されしまつたと女中の話したが、朝から寒さと悲しさに萎び切つてゐた私の心を又た脅かした。岩を抉つた浴槽に入つてゐても、眼の前を轟々と流れて行く川の濁つた水の姿を見ると、落つてゐる事も出来なくなつて、急いで私は湯を出てしまつた。かうしてまた私の初旅の二日目は、吹雪の中に行く苦しさや、雪の温泉場の陰慘な話を、小さな頭に深く刻み

つけてくれたゞけであつた。

その翌日も私達はまた、俵の上の旅をつゞけた。雪も風も昨日ほど烈しくはなかつたが、寒さは山が深くなるにつれてだん／＼酷くなつて來た。足は矢張り昨日のやうに冷えて痛んだが、それでも私は吹雪に閉ぢ込められる心配のないのを喜んでゐた。午少し前頃に私達の俵は峠の下の茶屋に來て休んだ。薄暗い田舎家の廣い土間の爐の中には赤い火が勢よく燃えてゐた。私は俵を降るとすぐに、爐の傍にかけよつて、冷え切つた足をかざした。

茶店の主人は

『ほう寒かつたらうに』とすぐと櫓をくべてくれたが、あとから降りたお澄さんは、

『何ですよ子供のくせに、子供は風の子つて云ふぢやありませんか』と云ひながら、私を押しつけてしまつた。私は仕方がないから向ふの土間で、焚火をし始めた車夫の仲間に入つて漸く身體を暖めた。そして腰をかけた小父さんやお澄さんは、茶を飲みながら、何か笑つて話をしてゐるのを、ぢつと眺めてゐたのだつた。

小父さんはそこで車夫と何か談判をしてゐたが、やがて話が極ると私達は茶店を出た。そして今まで車を引いて來た車夫達は、俵を逆に背中に背負つて、前の山道を登り始めた。小父さ

んは赤坊を背負いお澄さんは藁靴をかりて履ひてそのあとに従つた。私は幸ひに子供の履く藁靴がない爲めに、茶店の爺さんに背負はれる事になつた。もし藁靴があつたらば

『ふん、九つにもなつて負さるなんて』といま／＼しさうに呟いたお澄さんの爲めに、私もその雪の深い山道を、眞直に登らされたに違ひなかつたのだ。私はそれから半年ほどして東京へ歸るとき、その峠を迂回して下つたが、それはたゞの五六丁ぐらゐる廻り道となるに過ぎなかつた。私が車夫にその事を話したら、土地の案内に暗い人だとそんな事をして、二十錢でも三十錢でも金を餘計取るのだと聞せてくれた。何の事はない、昔の雲助と同じ事で足弱連れと見込んでそんな事したのであらう。それにしてもお澄さんが杖について、あの雪の深い急な山道を登つて行つた事を考へると、私はひそかに嬉しかつた。

私はそれからまた俵に揺られて、細い峠道を通つて行つた。山も谷も凡てが雪で眞白だつた。道幅の狭い、僅かに俵がかす／＼に通ふ位の山道を行くと、道の凸凹に會ふと俵はがた／＼揺れた。削つたような深い絶壁の下も、厚い雪に蔽はれてゐる。俵の揺れる度毎に、私は胸をどき／＼させた。そして私達は漸く三島のトンネルに來たのであつた。私がそれまでに汽車で通つたトンネルと云ふ物は、どれもこれも煉瓦で入口を圍んであつて中に入れば先も見えない眞

暗な穴であつたがそのトンネルは入口も木で圍つてあり、俵が中に入ると先の出口が、かすかに小さく光つてゐた。そして山肌から滴り落ちる水は、俵の通る頭の上にも、トンネルの兩側にも、太い剣のような見事な氷柱となつてさがつてゐた。薄暗い冷々した洞窟の中が一面に、ちか／＼光る氷柱で飾られてゐるその姿は、お伽噺に聞いた水晶宮のようでもあれば、それにしては少し暗いのが、何か魔術でも見せられるように、不思議な心におそはれながら私はそのトンネルを通つて行つた。そしてトンネルを出た所に、山形縣と筆太に書いた標木の立つてゐるのを眺めたとき、私はもうこの冷たい旅も終りかと思ふとほつとした。

山形の町へ入つたのは、何でもその日の夕暮だつた。薄暗く暮れた雪の街を通つて行くと、静かな街の中に小川のやうな流れの音が起つてゐた。そして阪道の所へ行くと、それは瀧のよ／＼な響きをたて、流れてゐる。川と云ふものは、野原か谷間にでもなければ、流れてゐるものでないと思つてゐた私には、それは何となく不思議な寂しい氣を起させた。小父さんの家はもう旅籠町と云ふ所にあつたので、その家に入ると、その家の表てにも、同じよ／＼な流れの音が聞えてゐた。私はどんな風にして、その家に入つたのか、又た誰か先に人がゐて待つてゐてくれたのかも覺えてゐないが、たゞその水音ばかりが不思議に頭に残つてゐる。

山形の町では冬になると、仙臺から魚の來ない事がある爲めに、どこの家にも庭には池が造つてあつた。池には鯉が飼つてあつて、冬の食料の要意にしたのだと云ふ事だ。小父さんの家の庭にも、四坪位の池があつた。私が初めてその池を見た時には、氷を張つた池の面には雪が厚く積つてゐた。薄暗い街で聞いた水音は、家の前を流れてゐる奇麗な小川で、それが池の中に流れ込んでいつも水を變えるよ／＼になつてゐたのであつた。

その翌日私はお澄さんに連れられて、山形の町を見物に歩いた。町の往來にも家根の上にも、雪は眞白に積つてゐた。阪道を歩く小僧達は、裏に竹を張つた辻り下駄をはいて、面白さうに阪を下つて行つた。縣廳の前に来たときお澄さんは『こゝが小父さんの毎日いらつしやる所よ』と教へてくれた。父の通つてゐた役所も見た事のない私は、小父さんは立派な家へ來るのだと思つて感心した。その時縣廳の前には大勢の學生や何かゞ集つて、遠くの方から車に乗せて雪を運んで來て、門の前に二つの山を造つてゐた。私が行つた時は丁度その山が出来上つた所で、洋服を着た人が、山の上に日章旗を立て、ゐるが、やがて兩手を高く上に擴げて、大きな聲で『ばんざーい』と怒鳴つた。下に集つてゐた人達もそれに和して萬歳を唱へた。私には何の事か判らなかつたが、高く積んだ雪の山と、その上に立つた人と旗とが珍らしいので、たゞ茫然



と眺めてゐた。あとでお澄さんに、あれは何の事かと訊いたら、旅順港が陥ちたお祝いだ、と教へてくれた。何月何日の事だか忘れたが、私は日清戦争の時の旅順港陥落の翌日か翌々日に山形へ行つたに違ひない。お澄さんはそれから又た方々町の中を引張つて歩いてくれたが、私は今はもうその町の影すら記憶にない。たゞどこへ行つても聞える、どうく〜と云ふ小川の水音が、私の心に絶えず珍奇と哀愁とをこちや混ぜに與へてくれただけである。

お澄さんはそれから私に、旭座と云ふ芝居小屋を見せてくれた。もとより晝間の事だから客もゐなかつた。人氣のない小屋の中はいやにたゞつ廣くつて薄暗かつた。私達が入つて行つて、小屋の中を見物してゐると、舞臺の方から十二三の奇麗な女の子が、長い袂をちら〜させて、花道のようなところを歩いて來た。それは恐ろしく美しい子に私には思はれた。お澄さんに訊いたら、

『あれはお酌です』と云つた。そしてお酌は藝者の小さいのだと云ふ事も、その時初めて聞いたように思つてゐる。四日も五日も寒い悲しい思ひばかりして、雪の積つた寂しい町に來て、暗くなり切つてしまつた私の心にその時はじめて、美しい物がちらつと映つたのであつた。私はその後も山形の町を歩いた事もあるが、二度と再び半玉らしい姿をしたものは見なかつた。

たゞ薄暗い芝居小屋の中を歩いてゐた、奇麗な女の子の姿ばかりが、夕暮の光のように頭の中に残つてゐる。

旭座の事を書いたから、序にこゝに云つてしまふが、私はその後一度小父さんに旭座へ連れて行つて貰つた事があつた。その時は松旭齋天一がかゝつてゐた。瓦斯も電氣もなかつたその頃の夜の舞臺には、ゴム管をつたつて來る石油が、花瓦斯のように光つてゐた。天一は子供を喜ばせるような、様々な奇術をやつて見せた。けれどもその時一番深い印象を私に與へたのは、邯鄲夢の枕と云ふ奇術だつた。否奇術と云ふよりも、そこに出て來た、男とも女とも判らない奇麗な人だつた。頭には金をちりばめたような細長い帽子を被り、身體には何か美しい着物を着てゐた。それよりも美しかつたのは、白い寂しいその人の顔だつた。

その人は舞臺に出ても、何一つ物を云はなかつた。美しいと思つても、口を開いて何か云ふと、美しさが壊れてしまふ事がある。黙つて立つてゐるその人の姿は、私には何となく神々しくさへ思はれたのだ。一體私は小さい時から、墨染の女と云ひ、その旭座の邯鄲でも、ふと美しい者と見るとすぐ魅せられたようになってしまふ癖があつた。そしてそれと同時にその人が堪らなく可哀想で痛はしいような氣になるのであつた。今でも美しい物を見ると、ふとそんな

氣になる事もあるが、長い間だに出會つた限りない苦勞が、私の感情を踵の皮のように固くしてしまつたのであらう。物一つ隔てたように微かに感じ、更に幼い時出會つた事の數々を追想して、私は漸く、陶酔の氣持を僅かに味うばかりになつてしまつた。それだから私にとつては、他人には馬鹿々々しいようにも思はれるだらうこの記憶が、枯れ切つた生活に限りなき濕ひを與へてくれる大切な泉となつてしまつたのだ。——その時舞臺では、どう云ふ風に行はれたのか忘れたが、その人は横になつて、肘枕をついたまゝ、二本の棒にさゝへられて、高く空間に上つてゐた。私としてはそれだけでさへ、可なり胸のはらくする事であるのに、やがて天一は何か大聲で怒鳴ると共に、手にしてゐた棒でその支への棒をばつと拂つた。私は血が凍るような思ひをして眼を瞑つた。もしあの人がそのために怪我でもしたら、あの髻が生えて肥つた天一を、擲り殺してもやりたいと心から思つた。けれども私が再び眼を開いた時には、その人は肘の下の棒がなくなつても、元のように横になつてゐた。次に残る一本もまた拂はれた。金をちりばめた帽子を被つて、美しい着物を着た人の姿は、完全に薄暗い舞臺の空間に横たはつた。上方と後ろが暗い舞臺の中に浮き出したその人の白い顔の上には、花瓦斯のようなランプの光が輝いてゐた。その時天一はまた大きな聲で

『しばらくは、何とか、邯鄲夢の枕』と叫びながら、その人の上下左右を長い棒で拂つて見せた。けれども美しい人は死んだようにいつまでもちつとしてゐた。私はその時も、可哀想な、痛々しい氣に襲はれながら、その美しい顔にちつと見入つてゐた。——

私達が山形に着いて二三日すると、雪は本降りに降り始めた。學校へは正月からでなければ行かれないので、私は毎日暗い家の中で炬燵に當つて遊んでゐた。時にはそとに出て遊びたくもなつて來るので、玄關の戸を開て見ると、門のそとは、向ふ側の塀も見えないほど、眞白な吹雪が立ち籠てゐる。私は仙臺から來る道で出逢つた吹雪を思ひ出しては、すぐに部屋の中に引つ込んでしまふのだつた。しかしその部屋の中も陰氣であるし、意地の悪いお澄さんは、絶えず口矢釜しい小言ばかり云つてゐるので、私はもう追ひつめられた犬のように小さくなつてちんちんでゐた。

お澄さんは私に小言を云ふ事がなくなると、私の父や母の事をよく悪口を云つた。私は母の事を云はれるとむきになつて怒つた。父の事を云はれると、懐しくはない人の事だが腹が立つた。一度は餘り私の母を罵倒するので、

『小母さんなんか、お妾の子ぢやないか』

と云ひ返したので、えらく怒られた事があつた。その時は小父さんが歸つて來ると、お澄さんがその事を云いつけたので、小父さんも怒つて、

『小父さんは平素は怒らないが、怒ると宮島のおとうさんより酷いよ』と云つて、後手に縛られて、戸棚の中に一時間ばかり投げ込まれた。あとから私もお澄さんが父や母の悪口を云ふ事を、泣きながら話をした。その時は小父さんも困つたような顔をして黙つてゐた。

けれどもお澄さんの意地の悪さは、だん／＼に募つて行つた。炬燵のそばに寝てゐた赤坊が泣き出したと云つては私を叱る事もあつた。それは父のように烈しく打つたり抓つたりはしないが、一寸のゆるみもないようにねち／＼と私をいぢめるのだ、そして山形の在から女中に來てゐた女までが、お澄さんの機嫌を取る爲めに私を苦しめ始めた。

私は實際悲しかつた。そこには雪ばかり降つてゐて、遊ぶべき友達もゐないし、家にゐれば二人の大人が絶えずぶつ／＼云ふのである。二人の前で泣き出すと、餘計に馬鹿にされると思つて、私はいつも便所に入つて泣いてゐた。五日目か一週間目には、母の所から手紙が來るのを、何よりの楽しみにしてゐたが、お澄さんの口うつしに書かされる、こちらからの返事は、

いつも私も機嫌よく、小父さん小母さんによく世話になつてゐると書かされてしまふのだつた。家からは又た手紙と一緒に、菓子や繪本を送つて來てくれた。茶筒に入れた有平には、『政よ』と姉の名が書いてあつたり、砂糖菓子の罐には、『母』と記しがしてあるのだつた。私は小包が來るとそれを樂みに明けるのだつたが、菓子の多くは私の口には入らなかつた。そして私にはいつも、小さな生の柴栗を宛がはれるので、消えかゝつたような爐の火をふう／＼吹き起して、長い間かゝつて丹念に小さな栗を焼いて喰べなければならぬ事になつてゐた。

自分の家にゐる頃には、父から烈しい折檻を常に受けても、私はまだ人氣のない所で密かに泣く事は知らなかつた。然し山形に來て私はそれを覺えた。お澄さんや女中が、妙な意地の悪い事をして、面白さうに喜ぶたびに、私も執拗に對抗した。例へば私が大きくなつて、どうか偉い人になりたいと思ふ、と云ふとお澄さんは、

『信さんなんか、なんになれるもんか』

と一口にけなしてしまふ。私はきつとえらくなると云ふと、お澄さんは、どうしてもえらくなれない、と云ひ切るのだ。そこで私がもし偉くなつたら何うすると尋ねると、

『信さんが本當に偉くなつたら、私が裸で踊つて見せるよ』と鼻の先に輕蔑した色をたゝえて

せよら笑ふのだ。するとお兼と云つた女中がそばから、

『坊ちゃんのように、九つにもなつて寝小便をたれる人が、何でえらくなれるものか』と云つてはやしなから聲を合せて笑ふのだつた。耻かしい話だが、山形に行つて急に冷えた故か、私はそのいやな病に取りつかれてゐた。その後ち冷がもとで大患にかゝつて東京に歸つて来てしまつてからも、私は長くその病氣になやまされた。今はないが、その頃にはね、小便の薬として、小僧が布團を背負はされて泣いてゐる繪が新聞の廣告によく出てゐた。私はそれを見るたびに、どんなにいやな氣がしたか知れなかつた。子供自身と雖も、あの朝方になつて不愉快な氣持の中に目が覺め、更に大きな罪を犯したような氣に責められる事を、誰が好んでするものか。子供の身體に故障のある事を大人達は考へないで、たゞ彼等自身の罪としてそれを責めてゐる。愛があつてすら無知なのは、自分の愛に背いた結果を見る痛ましいことゝなるが、愛のない無知は人の性格を傷つける。可愛い子に旅をさせろと云ふ昔の格言は、美しい子供の性情をため傷けて、欺瞞と虚偽に満ちた、社會に詔ふ厭ふべき不自然な性格を作り上げさせる事である。

私はそんな風にして、二人の大人に相對してゐるときは、いつも決して負けないように虚勢を張り、詭辯を弄して鬨はなければならなかつたが、向ふにはお澄さんの後ろにはまだ小父さ

んと云ふ者がゐて、その論争の最中に私に何か誤ちがあると、それを口實として小父さんの怒りを挑發させる便利があつた。小父さんは私がこの知らない寒い土地に来て、たゞ一人の便りにしてゐる人である。その人に怒られる事は、私には悲しい情けない事だつた。私はさうして、争つたり悪口を云ひ合つたりしてゐる中はまだ何處か氣が張つてゐたが、どうかした工合でたつた一人きりになつてしまふと、急に堪らなくなつてしくしくと泣き出した。そんな時にはいつも心の中で母親に、

『どうか早く東京へ歸れるようにして下さい』

と祈つては泣いてゐた。

この妙な習慣は、遂に私の一種の性癖となつてしまつたようである。今でも私は人の前に出ると、快活であつたり勇敢らしく見えたりするような事があつても、一人である時は、思想のどん底まで、恐ろしく憂鬱になつて来る。何も彼もがいやになつて来る。母は今でも壯健であるしいつも懐しく思つてゐるが然しもう私の祈願や欲念の對照とはならなくなつてしまつた。そして私は一人きりになつて、憂鬱に襲はれ初めた時には、たゞ不思議に死ばかりを思ふようになつてしまつた。

私はさうして、十歳になつた正月を山形で寂しく迎えた。東京にゐた頃には、姉の友達や何か々来て、毎晩のように歌留多を取つたり、晝は凧をあげて遊ぶ楽しみもあつたが、友達と云つては一人もなく、そこには雪ばかり降つてゐるこの町では、何一つとして私の心を樂ませてくれるものはなかつた。曾ては面白い話を聞かせてくれたり、方々へ連れて行つてくれるので、懐かしかつた優しい柴田の小父さんも、日を経るに従つて、小言を云ふ恐い小父さんになつてしまつた。私は晝も晩も、立關の次にある、四疊半の部屋でたゞ一人で暮してゐた。東京から送つて来てくれる本と云つても、いつも川中島の合戦や、爲朝の一代記と云つたような、聞き飽た話の繪本ばかりだつた。たゞその時分に、私を一番喜ばせてくれたのは、『少年世界』の第一號を見た時だ。外の事は何が書いてあつたか忘れたが、終の方に『石地蔵』と云ふ小説があつた。それは何でも小さな男の子が、同じ町にゐる美しい女の子とばかり遊ぶ爲めに、二人はその仲間から排斥されてしまつてゐた。けれども二人はそれでも、淋しがる事もなく、二人だけいつでも仲よく遠く野原の方へ出て遊んでゐた。或る日も二人は仲よく遊んでゐると、町の子達が何や彼とからかい初めたので、二人は又た遠く野原の方へ避けるように行つてしまつた。そこで二人は草を摘んだり蝶を追つたりしてゐたが、夏の日の夕立が、激しい雷の響きと共に

降り始めて来た。小さな二人が駆け出して家へ歸るには、餘りに遠くへ遊びに来てゐた。そこで彼等は、野中の地藏堂に駆け込んで、慄えながら雨の止むのを待つてゐたが、少時すると、目を射るような稲妻の光がきらめいて、耳をつんざくような響きと共に雷は野原の中に落ちてしまつた。やがて夕立は晴れ、夕日は美しく輝いても、二人の子供は歸つて来なかつた。翌朝になつて町の人達が子供の行衛を探しに行つたとき、雷の落ちた地藏堂の中にあつた二人は抱き合つて、楽しい笑を顔にたゞへて、眠るやうに死んでゐた——と云ふ話だつた。私が幾分かでも新しい形をした小説を読んだのはそれが初めてであつた。

私は初めて、その哀れなまた幸福な少年少女の物語を読んだ時の心持を忘れる事はどうしても出来ない。母から聞かせて貰つた釋迦八相記も好きであつた。そこには悲しい話、面白い事、また奇怪な事柄の様なものがあつた。それから又た繪本で見たり話に聞いた楠公父子や、川中島の話や新羅三郎のことなどは、勇ましく憐れに美しかつた。けれどもそれは皆な、或ひは昔の人であつたり偉かつたりする、凡てが遠き世の物語である。哀れに思い懐しく感じ勇しさを尊んでも、何となく自分の心と物語の間の隔りがあつた。しかしこの雷に打たれて死んだ少年と少女の物語は、それ等の昔語が持つてゐない親しさを私に與へた。私はその小説を読んだ

時、不思議な甘い憂鬱に捉へられた。それから後ち幾日かは、その物語を頭に描いては、私は二人がどんなにして遊んだらうかと考へたり、笑ふようにして死んだ時はどんなであつたらうかと思つたり、また二人が遊んだ野原の有様や、地藏堂の形などを色々に考へて、妙な空想に耽つてゐた。私はいつも、例令ばあの邯鄲枕の夢に出て来たような美しい人を見た時などでも、その後の何日かはたゞ何となく、その事ばかりを考へて暮す癖がある。友達一人もなく、雪に降り込められてつまらなく暮してゐた私は、その物語の御蔭で、どれだけの間を、四疊半に閉ぢ籠つてまどはしのような空想に耽つて暮す事が出来たか知れなかつた。

つまらない正月が終ると、私は漸く學校に行く事が出来た。それは縣立師範學校の附屬になつてゐる小學校だつた。私はそこで又た久し振で女の先生に教へを受けた。けれどもその人はいやに固苦しい冷たい感じを興へる人だつた。そとにはいつも雪が降つてゐるので、放課時間になると、屋内の運動場で遊ぶのだつたが、板敷の廣い部屋の隅々に、四角い大きな火鉢が幾つか置いてあるのが、私には珍しかつた。私がかか口を利けば可笑いと云つて笑はれるし、私の履いてゐるその頃東京で子供の履いた高い薩摩下駄は、隱居の足駄だと云つて冷笑されるので、私はそこでも一人きりで遊んでゐた。私の態度も恐らく、この田舎の學校の生徒を輕蔑す

るような所があつたのかも知れない。私は何を云つてゐるか判らない子供とは遊びたくもなかつた。それが爲めに、時々校庭に出て雪ぶつけをした時などは、私一人が目敵にされるので、私の周圍には敵からも味方からも雪の玉が飛んで来た。さうして接戰のような工合になつた時には、誰からともなく、私は雪の中に埋められる事にきまつてゐた。

かうした家庭と學校の生活が、私の性情をだん／＼に偏ませて行つた事は明らかである。私は變に卑屈な、強情な子供になつて行つた。それに、家に歸つて來るとお澄さんは女中を相手にいつも卑猥な話ばかりをしてゐるのだつた。どんな事を喋舌つてゐるか、私はその話の一つ二つは憶えてゐるが、こゝに書く事さへ出来ないような話であつただけを云つて置かう。それ等の事が、私をして年の割には早熟になるような理由となつた。強情で人みしりをして早熟で大人のような理窟を云ふ子供が、どんなに可愛氣のないものだかは、今の私はよく知つてゐる。恐らく私は、さう云ふタイプの子供だつたに違ひない。さうして私は益々孤獨に、寂しい境地に自分で自分を追ひやつた。私に懐しいものと云つては、母と姉と弟と、そして賑かな東京の町ばかりだつた。私は頻りと母に手紙を書くようにはなつたが、小父さんの檢閲を受ける、お澄さん口寫しの手紙には私の苦しい状態を訴える事は出来なかつた。たゞ母に手紙を書

くと云ふ事だけで、自分の氣を紛らすだけの事だった。

私の性質がその頃は、どんなに卑屈で陰険になつてゐたか、今でもはつきり覚えてゐる一つの記憶がそれを證明し、また私はそれを思ひ出す度毎に、はつとして自ら顔を赤らめる。

お澄さんとは色々な事で争つたが、私の弟の事でもよく争つた。前にも云つたように、お澄さんの子と私の弟とは同じ年であつたが、私が山形へ來た時には丁度二つであつた。その頃丁度齒が生えたばかりの弟は、誰れにでもよく噛みついた。齒莖がうづくろと見えて、力一杯噛みつくので一度は女中の指に怪我をさせた位であつた。お澄さんがその子連れて、私の家に来た時に、母親が弟は噛みつくろと注意をしたのに、お澄さんは、重雄と云つたその子を、弟のそばにつれて來たので、少時遊んでゐる中に、弟はまたその子の指に噛みついた事があつた。

お澄さんは、何かと云ふとその事を云ひ出して、あの氣狂みみたいな親の子だから、誰れにでも噛みつくように出來たのだと、私の弟を罵るのであつた。父が殘酷であつた事は私も知つてゐる。けれども氣狂とは思はなかつた。況して二つになつた弟が、それ故に人を喰ひつくろとは思へなかつた、私は母から聞き覚えの齒莖がうづくろと云ふ事を云つて辯明した。けれどももともと私にからかふ目的だつたお澄さんは、どうしても氣狂の子だと云ひ張つた。さうし

てそれから、父が失敗したのは母が悪い爲だとか、柴田だつて何も思になつてゐないのに、お前さんの世話をしてやるのだとか、女中の前に體裁を作ら爲めか、外に何んな理由があつたのか知らないが、散々に私の家中の者を罵つて、最後に家の重雄は私の弟のように氣狂の子と違ふから偉くなる、と云ふような事を云ふのであつた。私は實際それが爲めに幾度争つたか知れないが、争つてゐる中にその重雄がだんろ憎くなつた。

何處へ使に行く時だつたか忘れたが、私は重雄を背負つた女中と並んで、人氣のない往來を歩いてゐた。その時私は、お澄さんが弟を罵つた時の事をふと思ひ出すと、重雄が憎らしくつて堪らなくなつて來た。表では寒いので女中とくつくろようにして歩いてゐる私の手に、重雄の足がふとさわつたので、私は思はずちくりと一つ抓つた。すると重雄は女中の背中であつたと泣き出した。何も知らない女中は

『ほう、どうした、どうした』と云ひながら、揺り上げてはすかしてゐた。私はそれが堪らなく愉快だつた。その後も使ひに出る度びに時々そんな事をしては、私のけちな復仇心を満足させてゐた。今考へればその重雄には何の罪もなかつたのだが、私にはそんな事でもしなければ、私の心が納まらなかつたのであつた。

然し、罪もない子にそんな事をした報ひは當然私にも來なければならなかつたのであらう。私は今でも覚えてゐるが、それは何でも暗い晩だつた。空はよく晴れてゐたが月はなかつた。お澄さんが淡雪と云ふ圍つた梨を喰べたいと云ひ出したので、女中が買ひに行くのに私はついて行つた。暗い町を通つてゐる時に、女中が『あら人玉つ』と云つたので、振り仰ぐと、おとこじやくし蛸のような形をした青い玉が、ふわ／＼と空を飛んで、やがて何處かの屋根の蔭に消えてしまつた。立ち止つて空を仰いでゐた二人が歩き出さうとした時に、私はまた重雄の足をちくりとやつたが、運悪く女中の身體に私の手が觸れてしまつた。

『あらあんだ、坊ちやんを抓るだね』と女中は驚いて私に尋ねた。私も素直にさうだと答へた。それから何でも女中が、今まで使ひに出る度に重雄が泣いたのは私が抓つたからだらうと尋ねたり、どうしてそんなに抓るのかと訊いたりした。私は歩きながら、今までの事をみんな話した。私はこゝにも有體に白狀するが、その時そんなに素直に女中に答へたのは、私がさうして重雄をいぢめる事が判つたら、小父さんもお澄さんも私をいぢめなくなるか、或ひは東京へ追ひ返してしまふだらうと云ふ、單純な頭で考へた、陰險な下心があつたからであつた。

家へ歸ると女中はすぐとお澄さんに、今まで使ひに出るたびに重雄がよく泣くのを不思議だ

と思つたことや、それは私がそつと抓つてゐたのを今夜發見した事を、手柄顔して二人の前に話をした。それからこゝに書くまでもなく、小父さんとお澄さんの二人が、よりで散々小言を云はれた上、後手に縛られて、座敷の戸棚の中に押し込まれた。戸棚の中は眞黒で寒かつた。表てに積つた雪が凍て、室内でも零度に近い寒氣の所である。一時間ばかり手足を縛られて、板の上に寝かされてゐた私は、眞青になつてがたく、慄えてゐた。父にも可なり酷い目に會つてゐた私であつたが、その時の苦痛の中には、父から與へられた折檻の中には含まれてゐない、冷たい鋭いものがある事を私も感じた。そしてやうやく戸棚から出された後にも、家にゐた時であつたらば、父の眼をぬすんで母は私をいたはつてくれたが、小父さんは既に座敷でぐうぐう寝てゐるし、お澄さんは圍爐裏のそばで、冷然として笑つてゐた。

私はその晩床に入つてからも、いつまでも眠れなかつた。今夜の事の原因は私が悪かつたのである事は、小さな私にもよく判つてゐた。けれどもそれだけで諦る事の出來ない今までにあつた事の様々の思ひ出が、私の心を突つついた。私は憎らしいお澄さんを呪つたり、母の事を思ひ出したり、又た山形へ來る前に父の前で誓つた小父さんの言葉などを思ひ出して、口惜しがつたり、悲んだりして泣いてゐた。そしてどうにかしてもう東京へ歸らうと固く決めたので



あつた。

その翌晩私は小父さんに、東京へ歸してくれと頼んだ。

『東京へ歸せつたつて、誰も送つて行くものがないぢやないか』と小父さんは笑つてゐた。私はそれでも、

『それならお金を下さい、僕一人で歸るから』

と云つたら

『何を生意氣な事を云ふのです』と小父さんは急に怒り出した。『私は信さんのお父さんと、中學を出るまで教育すると約束して來たのだから、途中で歸すなんてそんな事は出來ない』と怒鳴りつけられてしまつた。

それから後ちお澄さんは、

『生意氣な事を云つても歸れやしないのだから、もつと穩和しくした方が好いんですよ』とからかうようになった。然し私は

『歸さなければ、雪が溶けたら、仙臺まで歩いて行くから好いや』と云ふと

『仙臺から先は、汽車に乗らなければ行けないぢやないか』とお澄さんは更に困らせるように云つた。

『お金がなければ、仙臺で小僧になつても歸りますよ』と私は負けずに言つた。私はその頃は本當に、仙臺へ行つて小僧をしても、東京へ歸りたいと思つてゐた。一月や二月小僧をしたつて、そんなに金をくれるものでもなかつたらうが、仙臺まで行けば、何うにかして歸れると私は信じてゐた。

けれどもそれから後ち間もなく、寒さの爲めに冒された私の大病が、仙臺の小僧になるまでもなく、私を東京へ歸してくれる原因となつてしまつた。

それは何でも三月の初め頃のことだつた。變な事を覺えてゐるようだが、その日の午の辨當の菜に、黒豆の煮たのが入つてゐた。どう云ふものか私は小さな時からあの豆はきらひであつた。けれども他に何も喰べるものもないので私はそれを我慢して喰べてしまつた。さうして例の屋内の運動場に出て少時遊んでゐる中に、私は急に寒氣を覺えて、身體がぞつとすると共に、胸がむか／＼し始めた。私は慌てゝ便所に走つて行つた。そこで私は嫌いな黒豆の入つた汚い物を吐いてしまつた。そのとき私は自分でも、平素から嫌いなあの豆を喰べた爲めに、こんなことになつたのだらうと思つてゐたが、再び運動場に戻つて來た時に、同じ級の仲間達が私の

顔を見て、

『やあ、宮島の顔がふくれてゐる、ふくれてゐる』と騒ぎ始めた。私もさう云はれると何となく顔が重いような気がしたので、額額の處を何気なく指で押して見ると、薄氣味の悪いほどほこりと凹んで、小さな穴があいてしまつた。弾力のない、自分の身體とも違ふようなその妙な手觸りが、私の氣持を一層悪くしたのであつた。

午後からの體操の時間には、雪が降つてゐると先生が、時々面白い話をしてくれる事があつた。丁度一時間目が體操の時間に當るので、私は我慢して教室に入つて行つた。その時は女の先生が、何か西洋の話らしい、隠れ指輪を持つた人の話をしてくれた。何かの工合で魔法使から指輪を貰つたその人は、王様の婚禮の馬車に飛び乗つたり、いろ／＼ないたづらをする話であつたが、今まで外國の話聞いた事のない私には、それは全く、異様な感じを私に與へた。先生の話は時間が來た爲めに途中で切られた。私はどうかしてその續きを聞きたいと思ひながら家へ歸つて行つた。けれども家へ入つて、私のふくれ上つた顔を一目見るとお澄さんも驚いて、

『その顔はどうしたんです。氣持が悪いのならきつと、お多福風かも知れないから、お醫者へ行つて見て貰つておいでなさい』と云ひ出した。

私はそれから醫者に行つて診て貰つたが、それは急に激しい寒氣に會つた爲めに、冷え込みから來た腎臓病だと云ひ渡されてしまつた。そして何よりも暖かにして、安靜を保たなければいけないと云はれたので、家に歸るとすぐに床の中に入れられてしまつた。私が病氣で寢てる中に、先生の話は濟んでしまつたのであらう。その間に學年も變つてしまつた爲に、再び學校へ行つた時には、その先生の顔も見られなかつた。その話の續きを聞かなかつたのが今だに残念な氣持がする。

病氣になつた爲めに私はお澄さんから小言を云はれる事はなくなつたが、寂しい退屈な日が長く續いた。私は明けても暮れても、薄暗い四疊半に、たゞ一人で横になつてゐた。日に一度づゝは來る醫者が歸つてしまふと、あとはもう私の部屋に尋ねてくる人はなかつた。雪が降り始めると、枕元の雨戸を閉めてしまふので、部屋の中は薄暗くなつてしまつた。晝も夜も吹雪はさら／＼音を立て、雨戸に當つてゐる。私はその音に聞き入つてゐると、幼い時の雪降りの夜を思い出した。そしてあの薄暗い屏風の蔭に寢てゐるとき、母親が來ては色々な話をしてくれたり、私の好きな菓子を買ひに行つてくれたりした事を考へた。私の病氣の報知が行つて五

六日すると母からは、情を込めた手紙が来た。さうしてそれには——それだからそんな遠くへ行かない方が好いと云つたのに云ふ事を聞かないからそんな事になつてしまつたのだ。そばにゐれば看病をしてやる事も出来るのだが、遠くに離れてゐてはどうする事も出来はしない。小父さんやお澄さんの云ふ事をよく聞いて、早く癒るように祈つてゐる——と書いてあつた。私も母に、もう東京へ歸りたくなつた、と書いてやりたかつたが、病氣の中は手紙を書いてもないと云ふので、私はたゞ欲しいものを、お澄さんに頼んで書いて貰ふことだけしか出来なかつた。

夕方になつて熱が出てくると、私はうとくしてまた色々な夢魔になやまされた。そして夜中には眼が冴えて眠れなくなつてしまふのだつた。家の中は森として、何も彼も靜かに寝入つてゐる。吹雪ばかりが暗い戸外を吹き荒れて、ごーつと云ふ風と共に、雨戸にざーつと打つては、遠くの方に消えて行く。私は毎晩その音に聞き入つては母の事を思つてゐた。

雪の止んだ日には、町の人足が来て家根の雪を掻き落して行つた。雪に倒れる家がある爲めに、縣廳からさう云ふ人をよこすのだといふ事だつた。人足が来て家根を掃くと、雪は窓の外にどしんどしんと大きな音を立て落ちて、闕よりも高く積つた。私は修身の時間に聞いた窓の

雪と云ふ事を思ひ出して、ふと起き上つて障子を明けて見たが、明るくもなんともないので、自分一人で笑ひ出した事を憶えてゐる。

三月の初めから四月の中旬まで、私はその部屋で横になつてゐた。口の中がねばくして頭がほうつとする夕暮の熱つほさと、誰れ一人口を利いてくれる人もない寂しさと、吹雪の吹き荒れる夜中に、東京の家を思い母を思つた悲しさとが、たゞ灰色のほやけた太い線を引いたように、頭の中に残つてゐるだけだ。

私が漸く長い間寝てゐた床から離れた頃には、世の中はもう全く面目をかへてゐた。庭一面に積つてゐた雪も溶けたので、今まではたゞ眞白な凸凹だけであつたそこには、泉水や築山が現はれて、そこから流れ込む水は、裏の方へちよろ／＼と流れ出してゐた。家の裏には遠く廣い野原が続いて所々に枯木が五六本づゝ立つてゐたのにも芽を吹いてゐた。そして黄色い枯草の下には、雪に壓されてゐた若草が小さな美しい芽を出してゐた。

寝てゐても氣にかゝつてゐた學校の方は、學年試験を受けないのでどうなるかと思つてゐたが、それでも尋常科卒業の免狀を送つてくれたので私はほつとして、毎日野原へ出ては遊んでゐた。それは都會に育つた私には全く驚異に價した。子供達は黄色く枯れた去年の草に火をつ

けて焼いてゐた。ゆつたりとした春の風に煽られた火は、野面にだん／＼擴がつて行く。やがて子供は自分のつけた火の進みに恐れて来て羽織をぬいでばた／＼と消してゐた。よく晴れた暖な日には、最上川であつたか何と云ふのか、川原に遊びに行く事が多かつた。ゆるやかな暖い日が、川邊の砂原をほつかりと照してゐる。砂の上に寝轉んで、綺麗な石を拾つてゐると、砂の中には金色をしたものも、銀色をしたものも交つてゐる。子供の眼には、それが眞實の金であらうと銀でなからうと、美しさは同じである。ちか／＼と光る砂を、大切さうに拾い上げて私は家へ持つて来た。

山と云ふものへ登つたのもその時が初めてであつた。町の端れには盃山や千歳山など、云ふ小さな山があつた。千歳山の阿古屋の松の精が、庄司某の娘の所へ通つたと云ふ話や歌枕を尋ねて来て歿つた實方(？)中將の話だの、父の後を追つて来た中將姫、その墓がまだ千歳山の麓にあると云ふ事も聞いてゐた。私はその千歳山を一度見たくつて、近所の子供に頼んで連れて行つて貰つた事があつた。風もない暖かな好い日であつた。私達は長い間だ田の畦道を通つて行つた。畦のふちには綺麗な清水がちよろ／＼流れ、青々とした若草の中には、名も知らない綺麗な花が咲いてゐた。空は美しく晴れて澄み、山には櫻も桃も一時に咲いてゐた。その日ま

でさう云ふ野原や田畑や山や清水を知らなかつた私には、何を見てもたゞ美しかつた。私の僅かな記憶を辿つて、如何に楽しく遊び、如何に美しくそれ等の凡てを眺めたかを茲に書いても、外界に對しては恐らくそれは偽りとなり、自分に對しては何れほどの努力を盡さうとも不満足となるに過ぎないだらう。——たゞ私は夢のようにその一日を暮したのである。私はその後ち再びさう云ふ美しい自然に接した事はない。けれどもそれは矢張り、人も自然も長い間冷たい雪に閉ぢ籠められ、苦しみ惱んで来たものが、優しい春の大氣に出會つて、はじめてほつと打ちくつろひだ喜びであるのかも知れないのだ。私はまだ身體が本當に癒えてゐなかつた爲めに、千歳山に登る事は出来なかつたがその一日の喜びで満足した。

然しまたその長患いは恐ろしく私の身體を弱らせてしまつたようだつた。私はすつかり元氣がなくなつて、毎日悄氣切つて暮してゐた。お澄さんも私が病氣してからは餘り小言を云つたり、からかつたりもしなくなつたが、それ丈けにまた一層冷淡になつてしまつた。學校へも二三度行つて見たが、何をやる氣にもならないので、私は家に計りゐて教科書を讀んでゐた。今思ふとそれは、ナシヨナルの四を直譯したような本であつたが、水の行方だの、山火事の話だのが書いてあるのが私には面白かつた。初めて自然に接して、田の畦の小川を見た私は山から流

れ出た水が、せゝらぎとなり瀧となり、川となつて、長い旅をつゞけた揚句、都會に来て舟を浮べ、橋の下をくゞつて行く物語が殊に私を喜ばせた。何處の所であつたか、水は暖い日を浴びて、きら／＼輝きながら流れて行く所を私は幾度も讀み返した。樵夫の煙管から轉がり出た吹殻が、大きな山火事となる話も面白かつた。——それからしばらくして東京の學校に歸ると、丁度新體讀本と云ふのに變つてゐて、馬鹿けて詰らない本を讀まされたのに、私はどんなに失望したか知れなかつた。

私はきつと病氣の爲めに弱り込んで、ホームシツクにかゝつてゐたのかも知れなかつた。本を讀んで飽きると、裏の椽側に出ては、東京の事を考へてゐた。さうしてどうかして母が私を呼び返してくれないかと、そればかりを考へてゐた。私は自分で手紙を書いて、内しよで出さうと思つた事が幾度あつたか知れなかつた。自分の家の番地も何もよく知つてゐるが、恐らく父は聞き入れてくれまいと思ふと、私はいつでも悲しさうに諦めた。二三年前になつてから私はチエホフの小説を讀んで、靴屋の小僧がクリスマスの日の事か何かを考へながら、このつらい店から暇を取つてくれと祖父か何かに手紙を書いて、宛名の住所を出鱈目に書きながら、それでも届くと信じてポストに入れる所で終になつてゐるのを讀んだ時、可笑な話だが涙が流れ

た事があつた。

私も幾度も手紙を書いては、諦めてやめにした。けれども遂に私は堪らなくなつて、また小父さんに歸してくれと頼んで見た。いづれ小言を云はれるのだらうと思つて、おづ／＼しながら私は云ひ出したのであつたが、意外にも小父さんは、

『信さんはどうしても歸りたいかね』と眞顔になつて尋ねた。私はそれから何でも色々頼んだようであつた。それで兎も角私も母に手紙を書く事を許された。私はその時どんな文句を書いたか忘れたが、熱心になつて手紙を書いた。それはもうお澄さんの口寫しではなかつた。そして來られるならどうか母に來てくれと頼んでやつた。

それから四五日たつてからの朝だつた、小父さんの所へ父から手紙が來て、二三日中に父が迎えに來てくれると云つて來たと小父さんは話してくれた。その時の私の喜びは何と云つて好いか判らない位だつた。私は勇んで學校へ出掛けて行き、歸りには荷物を残らず纏めて持つて歸つて來てしまつた。家へ歸つてからも、もう二三日すれば東京に歸れると思ふと、私は落着いてゐられなかつた。僅かばかりあつた本や荷物などを熱心に片付けてゐる時だつた、玄關の方で誰か人聲がしたので私が出て見ると、そこにはもう父が來て立つてゐた。私は驚きと喜びと

そして幾分の恐れの交つた妙な氣になつて、

『いらつしやい』と頭を下けた。父は私の顔をぢつと見て、

『何うしたな』と云つたが、その聲は家にゐた時のように險しくはなかつた。あとから出て来たお澄さんも驚いて、

『まあこんなにお早く』と云ひながら、私の前ではさんざ罵つた父にペコ／＼御辭儀をした。

私は意地悪くそれをぢつと見てゐたが、お澄さんはすぐに父を座敷に連れて行つた。私はそこでお辭儀をすると、すぐに又た私の部屋に歸つてしまつた。

夕方になつて小父さんが歸つて来てからも、二人は座敷で酒を飲んでゐて、私はそこに行く事が出来なかつた。けれども私はもうそんな事はどうでもよかつた。不足を云へば母が来てくれ、ば好かつたと思つたが、さうして母と二人でもう一度盃山や千歳山の方へ行きたいと思つてゐたのだが、今はそれもどうでもよかつた。もう二三日すれば、母のそばに行けるのだと思ふと、私はたゞ少しも早く父の歸る時を待つてゐるばかりであつた。

翌日になつて父は私を連れて、山形の町を少し歩いた。ずつと昔に一度こゝへ來た事のあると云ふ父は

『ほう、昔と餘り變らんかう』と獨言を云ひながら歩いてゐた。さうして一度

『柴田やお澄様お前にどんなぢやつた』と尋ねた。私は何と云つて好いか判らないのでたゞよく叱られたと答へた。父はそれつ切り何も云はなかつたが、大抵察してゐるような顔をしてゐた。その時私は、少しばかり見なかつた中に、父が大變元氣のなくなつてゐる事を感じた。

その日は小父さんも早く歸つて来て、父と私を川魚の料理屋へ連れて行つた。二人はそこでもまた酒を飲んでゐたが、東京にゐた時より、何となく餘所々々しくなつてゐた事を私は明かに見た。小父さんは何となく濟まないような顔をして、

『せめて中學だけお世話しようと思つたのですが、何しろ寒さがひどいし、又たこの冬にでもなつて身體を悪くしたら困ると思つて』とか

『久し振りでお出でになつたのだから、休んでどこか御案内すると好いのですが』など、云つてゐた。

『いやもう一遍來た事のある土地でもあるし、私は明日歸らうと思ふとるで』と、その時父は翌日歸る事を云ひ出した。小父さんも父が餘り急ぐのに驚いてゐたようであつたが、

『昨夜お話したようなわけで、私も歸りを急がにやならんしするから』と云つて父は何かに

包んだものを渡して

『何しろ今はお話したような次第ぢやで、これはほんの土産代りで、お澄さんの前では出せん物だが』

と小父さんに渡してゐた。その話の中にも父は餘程心配事のあるらしく、小父さんは何か工合の悪い事があるらしく、二人の話は妙にはぐれてゐた。

然し私はもう喜びの頂天にあつた。東京へ歸つて母や弟など、一緒に暮してさへゐられ、ば、どうなつても好いと思つてゐた。家に歸つてからもその晩はおちくと眠れなかつた。

翌朝早く私達は山形の町を立つた。十一月に来て五月の中句まで、雪の降りしきる寒い盛りを私はその町に苦しみに來たようなものだつた。町には眞白に雪が積り、雪が止めば氷つた町の上を刃のような風が吹いてゐた。耳は霜けて毎日がさぶたがほろ／＼取れ、家にゐれば、お澄さんから口と手でこづき廻された苦痛と悲哀の記念に充ちた町に、九つの冬から十の春まで私は暮してゐたのであつた。

父の膝に抱かれて俥に乗つて、小父さんの家から離れたとき、私は心の中で萬歳を唱へた。お澄さんにはたゞ『さよなら』と云つた丈けである。女中はもう極りを悪がつて出て來もしな

かつた。小父さんは昨夜料理屋で酒をのんだ揚句

『信さんも歸つたら勉強してどうかえらくなつておくれな』と云つて、無理に笑つたような顔をしたが、私には嬉しくもなかつた。

俥は七ヶ月程前に來た時と同じ道を走つてゐた。けれども今は山にも谷にも雪がなかつた。たゞ三島のトンネルの中の氷柱が消えて、依然として薄暗い洞窟の中は、岩肌から滴る水が雨のように落ちてゐるのが物足りなかつた。そしてそのトンネルを抜けて、深い谷の上の峠に出た時、世界は如何に變つてゐるのかに私は驚いた。

來た時には峠も谷もたゞ眞白な雪に蔽はれて、険しい崖の上を通る時に私はひや／＼としたのであつたが、その白かつた谷間には、赤と白の山躰躰が、一面に美しく咲いてゐた。身を切るような吹雪の代りに、暖かな晩春の風が、そよ／＼と俥の上を吹き渡つた。お澄さんが不服顔して私の背負れるのを眺めた峠も、五分ほどで迂回して下つてしまつた。吹雪に煽られて俥が止つて、私が泣き出した雑木林も、どこがそれであつたかすら判らなくなつてゐた。

數え年の十歳の五月になつたばかりの私ではあつたが、その半年ほどの間だの妙な苦勞は私を一時に大人のように早熟にし、そして心のどこかに、忌はしい偏見を底深く植えつけられて

しまつてゐた。私は今後でも機會のある毎に、子供の中に苦勞をさせると云つた昔の馬鹿者を、幾度でも呪つてやらうと思つてゐる。山形へ行つた事は無論私の我儘からでもあり、又た餘り嚴格に過ぎて残酷な父の折檻の下から自分で免れたのではあつたが、然しこの半年のつまらない苦痛と悲哀が、私の心に僅かばかり残つてゐた子供らしさまで奪つてしまつた。子供が子供らしい生活をなし得るのは、子供だけの特權である。子供として子供の特權を奪はれ失つた者は私には、心にもなく處女の誇りを奪はれたものよりも悲惨に思はれる。處女には貞操に對する意識があり、死を以て抵抗する事も出来るが、子供は知らず知らずの中にそれを奪はれて行くのである。――

私はその歸り途に、どんなに深い感慨を以て、それ等の山や谷に對した事だらう。恐ろしくはあつたが、その時は優しかつた父の膝に抱かれて、往く時の寒さと悲しさを考へた時、私は喜びよりも寧ろ悲哀と無念の情により多く打たれてゐた。その後も私はもう一度、仙臺から山形まで、あの峠を越して行つて見たいと常に心に望んでゐるが、今だにその希望を遂げる事が出来ないでゐる。

往く時には二日かゝつた道も、歸りには一日とかゝらなかつたように思はれる。その晩私は

父と共に仙臺から汽車に乗つた。父は汽車に乗つてから、ちび／＼と酒を飲んでゐたが、やがて私にも毛布をかけてくれて、自分は大きな肝をぐ／＼かきながら寝入つてしまつた。けれども私には、長い間だ眠れなかつた。窓からそとを覗いてゐると、汽車は暗の中をぐ／＼と走つてゐる。暗い空に赤味を帯びた烟が飛んで行くのを、私はいつまでも眺めてゐた。桑折を通つたのは夜中近かつたが、その驛の名を聞くと私はまたぞつとした。

翌日の午過ぎに私は四谷の家に歸つて行つた。古びた門も、植込の松も、五月になると柏餅を作つてくれた柏の木も、行く時と少しも變つてゐなかつた。そして家の中には私が發つ前日と同じように、山崎の大伯母も母の里の叔母も、そこにゐる姉も來て、皆な臺所で忙しさに働いてゐた。父について玄關から入つて行くと、母は飛び出して來て、

『まあお前よく』と云つたきり私を抱きしめて、顔に頬を當て、おろ／＼と泣き始めた。私も悲しくなつて泣いた。母はそれから、病氣はもうすっかり好いかと、手を粉だらけにしたまゝで立ちながら聞き始めた。

『あんな寒い所へ行くからそんな病氣になるのぢやないか、お前の手紙を見ては私はいつでも泣いてばかりゐたのだよ』と恨めしさうに云つた。



家では私が歸つて來る爲めに、饅頭を蒸してくれてゐる所だつた。もう少し早く歸つてくれれば、柏餅を作つてやつたのにと母は云つた。山崎の大伯母も、にこ／＼笑ひながら

『まあ壯健になつてよかつたねえ』と云つてくれた。その子の爲めに重雄を抓るような事を覺えた弟も元氣よく遊んでゐた。いつも私の事を案じた手紙をくれ、自分の名を書いて菓子を送つてくれた姉も、涙を流して喜んでくれた。私も夢中になつて喜んでゐたが、たゞ行く時と家の様子の違つてゐる事はそれでも判つた。それまでは二人ゐた女中も一人もゐなくなつて、二人の姉が臺所に出て働いてゐるのを不思議だと思つてゐた。

## 第三章

歡喜の頂上に酔ふような幾日かは過ぎて行つた。私は何でも夢中になつて暮してゐた。延ふ人毎に、雪の深い山形の町、人死のあつたと云ふ温泉場の事、どこの家にも庭には池があつて、そこには皆な鯉が飼つてあること、——それを話す度に私はその頃よく繪にあつた二十四孝の話を思ひ出した——盃山の春、千歳山の阿古屋の松の話などを珍しさうにして聞かせた。母は何か針仕事をしながら、私の話を聞いてゐた。そして時々小父さんやお澄さんのことを尋ねた。私は何も彼も母に話してしまつた。そして私がえらくなつたらお澄さんが裸かで踊つて見せると云つたことを口惜しさうに話した。

『それならお前がえらくなりさへすれば好いぢやないか、お澄さんは裸かになるのがいやならきつとお前に御免なさいつて云ふでせう』と母は笑ひながら云つた。私も遂にお澄さんを裸かにして踊らせるほど偉くもならなかつたが、お澄さんも十年ばかり前に死んでしまつた。小父さんはそれより一二年前に死んだ。私が足を抓つた重雄と云ふ子も、今は二十九位になつてゐる

るだらう。どうなつたのか便りもない。考へて見ると人間の恨みとか喜びとか云ふ事も、永劫の時の前には、あぶくのように消えてしまふようでもあるが、たゞその人々から受けた深い印象は、今も尙ほ私の性格の中に残つて、色々な働きをしてゐるに違ひない。

私が山形に行つてゐる中に、お菊さんの家は越してしまつて、あとには見知らない人が入つてゐた。母にその事を訊いたら、

『お菊さんは大變身體がお悪いさうだから、一度御見舞に行つてお上げ』と云つて家を教へてくれた。私はそれから間もなく、お菊さんの家へ見舞に行つた。そして僅か半年ほどの中に、お菊さんの姿のすつかり變つたのに驚いた。もともと小肥りに肥つてはゐても、顔色のよくない人であつたが、その時はもうすつかり瘠せて、床の上に起きてゐた。

もとは元氣の好いねえさんであつたのが、何を話しても張合がなくなつて、たゞ上の方をちつと見詰めてゐるばかりで、時々力のない咳をしてゐた。お菊さんの家にはもう、習いに来る生徒もないようでお菊さんと二人で靜かに暮してゐた。私は何となく、張合抜けがしたようで極りが悪くなつたので、その日はそこへ歸つてしまつた。それから後もお菊さんの病氣の事は氣になつてゐたが、その日の事を考へると變な氣になつて、門の前まで一度か二度行つた

事はあるが、いつも中へは入らずに歸つて來てしまつた。少時してから四谷の通りで、母がお菊さんの小母さんに逢つたら、

『菊もとう／＼亡くなりました』

と涙をためて話してゐたと、歸つて來てから私に聞かせた。それから母は

『お前も大變御世話になつたのだから、一度御墓詣りに行つておあげよ』とも云つた。私も一度お菊さんの墓へお詣りに行きたいと思つてゐたが、どこの寺にあるのか判らないし、繼母であつた小母さんも餘り好かなかつたので、それ切りになつてしまつたが、長い間だ濟まないとは思つてゐた。

私が家へ歸つて來た頃に、家にも丁度、文藝俱樂部の初めの一號が買つてあつた。山形にゐる中に、小説を読む興味を覺えた私は早速それを読み始めた。伽羅物狂（たしかさうだつたと思ふ）と云ふのと、白桔梗と云ふ二つの作がまた私をして甘い憂鬱に耽らせてくれた。前の方は強慾な金貸が非道な事をして金を貯めてゐながら、唯だ一人の自分の娘を天にも地にもかへて愛してゐたのが、その娘に死なれてから急に金貸も何もやめてしまつて、夜も晝も茶屋に入り浸つて、子供のような雛妓を集めて、物狂はしく遊びながら、自暴になつて金をまき散ら

してゐると云ふような筋であつた。白桔梗と云ふのには、作男の果敢ない戀が書いてあつた。若い善良な作男は、自分の主人の娘に戀してゐた。けれどもその娘も戀する人があつて、望みの遂げられないのを果敢なんて暮しながら、自分に戀してゐる作男をも憐んでゐる。或る日二人が話をしてゐる時、なにかの末に娘は、

『自分は何よりも白い桔梗が好きだ』とふと話した。その後ち大きな地震があつて、家が倒れさうになつたとき、作男は娘を救ひに行かうとした時に家はつぶれて娘は死んでしまつた。それから後ち娘の墓には、誰が手向けるのか知らないが、季節になるといつも白い桔梗が供へてあつた、と云ふ話だつた。

今見たら、どれも甘い小説であるのかも知れない。けれどもその時の私は、その二つの作品でどれほどに私の感情を動かされ、また今まで全で知らなかつた世界、然しそれは子供にでも本能的に窺ひ知ることの出来る世界に對する眼を開かれて、どれほどに私の思想を動かされたか判らない事である。今でも色々な意味で桔梗の花は好きであるが、私が白桔梗を好むのがその時からのことであつたように、恐らく自分で文學と云ふものを愛するようになったのも、その時からの事かも知れない。私はその時も長い間だ、不思議な憂鬱に沈みながら、死んだ娘や、

墓に花を捧げた作男の事を色々と空想した。そしてそれは又たやがて小さな私の世界をだんだんに擴げてくれた。

私の家の生活もその頃は何となく變つて行くのが、私の眼にもはつきり映つた。父は毎朝早くから俥に乗つて出かけてしまふし、家の中全體がいやに寂しく濕つほくなつてしまつた。もとから陰氣な家であつたが、それでも一二年前までは、父も元氣が好かつたし、職人は毎日多勢來て時々酒を飲んで騒いだり、角力が來て踊つたりして、暗い中にも何處か派出な處があつたが、職人も一人も來なくなるし、母は産婆の試験を受けるのだと云つて、何かしきりに本を讀んでゐた。陰氣な家は餘計に暗くしめつほくなつてしまつた。

私の性格もその頃は、全く變つてしまつてゐた。私はもう以前のように臆病で泣虫ではなかつた。いやさうであつたのかも知れないが、人の前では泣かない方が得だと云ふ事を、山形へ行つて覺えて來たのであつた。それと共に、自分の愛する者に卒直に好意を示す事も、好きな物を明らさまに欲しいと云ふ事も人の前では出来なくなつた。私はそれから後も長い間だ、恐らく子供と呼ばれる時期の間だは、子供らしくない子供と云ふそしりを受け通した。家にゐれば一番上の姉とよく争つた。外に出ればもう陰氣な邸町の子とは遊ばなくなつて、快活で悪戯

な町の子と遊ぶようになってしまった。その頃は父も留守勝であつたので、私はそれを好い事にして、公然と彼等を庭に引き込んで来て、梅の木に登り、李の枝を折つて、顔をしかめながら酸い果を喰ふやうになつてしまった。

煙草を吸ふことを覚えたのも、その頃のことである。それは私の家の先きの横町にゐた、洗濯屋の小僧が教へてくれた。私は母に小遣をねだつては、ピンヘット、サンライス、赤天狗など云ふ煙草を買つて皆なして盛んにぶか／＼吹かした。初めて吸つた時は頭がくらく／＼するようであつたが、鼻から出すことが面白かつたり、輪に吹く事を興がつてゐる中に、いつか煙草の味を覚えてしまつたのであつた。漸く十になつたばかり位の子が、町の角に立つて煙草をぶか／＼吸つてゐる姿を考へると、かうして書きながらも妙な氣がしてくるのである。

私はたゞに強情で悪戯になつたばかりでなく、その頃はまた學校もよく怠けるようになってしまつた。しかしそれは、一つには遊びの面白さに捉はれてゐた爲めでもあつたが、小説を読むことの興味を覚えはじめた私には、幼稚な教科書のどれもこれも、何の感興をも引かなくなつてしまつたからでもあつた。

まだ貸本屋へ行くことを知らなかつた私は、父の本箱から、八犬傳を出して讀んだ。しかし

何と云つてもまだ幼い私には、人情の葛藤を描いてある所は餘り興味を引かなかつた。

凡そは一節置きに、何か神變不可思議な事を書いてあるあの本の、それ等の所々を探し出しては讀んでゐた。道節の火遁の術、信乃の村雨の劔などと云ふ事が、主として私の興味をそゝつたのであつた。それから私は三國誌、水滸傳と云つた風に次ぎ／＼に讀んで行つた。少年の空想をそゝるのにふさわしいそれ等の書物は、私を全く、學校の課業とか復習とか云ふことから離れさせてしまつた。私の教科書はたゞ學校に行く時に、鞆の中に入れて行くだけであり、教室にゐる間は、教師の云ふ事を聞いてゐないで、昨日讀んだ八犬傳の、伏姫が八房に跨がつて、空を飛んで行く姿などを頭に描いて全で別の世界に遊ぶ事を覺えるようになってしまつた。學校の成績が著しく悪くなつたのを、父も母も心配し出して、叔母のそこへ行つてゐる姉の所へ復習に行けと私はよく家から出された。その姉はいつ行つてもよく復習してゐた。算術五千題とか云ふ本を出して運算したり、神武るとく何とか何とかと暗誦したりしてゐたが、私にはそれは何の興味も與へない、退屈な仕事だつた。私はあんな馬鹿けた眞似をしてまで、褒賞を貰つたり、一番になりたいとは思はなかつた。それで私はすぐと外に飛び出して、またその近所にも友達をつくつて、叔母の家の柿をもらいだり、杏を取つて喰つたりばかりして暮してゐた。

その中にも家の方の落目はだん／＼に烈しくなつたらしかつた。今考へると、父は餘程あせつたのであらうが、何をしても士族の商法で甘く行かないようであつた。その年の秋になつて、父は今まで私達の遊び場にしておいてくれた離れの方へ、莫大小の機械を据えつけた。職人が二三人来てその家からは、ぢい／＼云ふ機械の音が起つて来た。二人の姉もそれを手傳つてゐた。外にも父は工場を作つて、そこでも五六人の職人が働いてゐた。父は恐ろしい、いやな人だと思つてゐても、子供の私には矢張りえらく思へたので、父があゝして何かをやれば、もうぢき家も、もとのようによくなる事だと私は思つてゐた。さうして奥の機械場やそこにある工場へ遊びに行つて、梓にまいた糸が何本も吸ひこまれるように機械の中へ入つて行き、やがて靴下の形をしたものが出て来るのを不思議さうに眺めてゐた。

けれども糸の事も機械の事も、問屋との折合についても何も知らない父は、凡ての事を毛賀澤と云ふ男に任せてやつてゐたので、それも長くは續かなかつた。何でも暮の事らしかつた。私達は茶の間で晩飯を喰べてゐるときに、父は何か堪え切れないような顔をして歸つて来ると、『はーつ』と溜息をついて火鉢の前に坐つた。母も心配らしい顔をして、いつものように晩酌の膳を父の前に持つて行つた。父は黙つて何か考へながら酒を飲んでゐた。その様子が何でも

普通でない事が私にも判つてゐた。やがてその毛賀澤と云ふ男の父親で、實着らしい姿をした爺さんが、やつて来たが、部屋に入ると、

『どうも誠に濟みません事で』と平蜘蛛のようになつて頭を下けて、『まだどうも判りませんで』と云ひ出したが、もう食事を終つてゐた私達子供は母に、

『お前達はあつちへ行つておいでなさい』と云はれて、炬燵のある六疊の方へやられてしまつた。

その晩は何の事だか判らなかつたが、二三日たつてから仲の姉が私に

『毛賀澤がね、何だかみんな持つて行つてしまつたんだつて』と小さな聲で話してくれた。あとから聞いた話だが、父がその男一人に任して置いた毛賀澤と云ふのが、それまでにも問屋に賣り渡した代金を可なり使ひ込んで、愈々押し詰つた暮になつて、帳尻を合せる事が出来なくなつた爲めに、賣上げを残らず集めて、大阪の方へ逃げ出してしまつたのだと云ふ事だつた。父にはそれが最後の打撃らしかつた。若い時からたゞ役所に出て、我儘一杯に暮して来た彼には、どん底からのし上げる弾力を養はれてもゐなければ、どうしてこの苦境を轉廻させて好いのかも知らなかつた。それから後も父は酒にでも酔ふと、

『あの畜生、毛賀澤の奴め』と怒つてゐたが、たゞそれだけの事で、訴えられもしないで済んだ毛賀澤は、その頃はもう大阪邊で、好い氣になつて遊んでゐた事で、もあつたのだらう。兎も角彼れは、その持逃げによつて、まだびく／＼と未練らしく息をついてゐた私の家に、最後の止めをさしてしまつたやうなものであつた。

父はその頃晩飯の後などによく

『どうぢや信、お前は大きくなつたら何になりたいと思ふ』と興味ありけに尋ねた。まだ何にになりたいと云ふ、判然した要求も持たない私は、たゞ漠然と、

『船に乗つて暮したいと思ふ』と云ふやうな事を答へた。

『船乗なんか駄目ぢや、これからの世の中は月給取なんかはもう不可ん。何でも實業が第一ぢやよ、それも自分で獨立してやるようにならなければ人なんかに使はれてゐては駄目ぢやよ、何でも好いから立派な商人になりなさい。昔は町人と云つて輕蔑したが、今はもう實業家が第一ぢや。何でも人間は金がなければもう駄目ぢや、人には馬鹿にされるし』と云ふのであつた。町の子と遊んではいけないと云つた父から、そんな事を聞くのは私には何となく變に思はれた。然しそれはまだ理も非もない時代の趨勢だつた。士族の商法と云ふ何となく滑稽味を帯

びた悲惨な言葉は、逆に云へば商人が、士族に勝つたのだ。敗れたものは最も深く痛感する。

その頃漸く勢力を得た、福澤の獨立自存を標語とした唯物主義を、たゞその儘に遮二無二私に注ぎ込まれた。私は商人にならなければいけないものかと考へるやうになつてゐた。

父はそれからも色々ともがいて見たやうであるが、落ち込む者はどん底まで行かなければ止りはしない。そのどん底がどこであるかは誰も知らないが、焦り苦み、もがいてたゞする／＼と、暗い底の方へ落ち込んで行くものだ。私は十一の正月をその家で迎えたが、長い間だ住んでゐた、今になれば色々懐しい、又た悲しい、苦しい事も多かつた思ひ出の深い家での最後の正月だつた。こんな書き方をすると、いやに誇張したやうに見えるかも知れないが、私はそれから後も、どんなに長くその家に憧れたかしれなかつた。それは一つには何うにかして、自分の家を昔のようにしたいと云ふやうな、今の私には忌むべき要求もあつたのだが、それ以外にも、どうにかして、母が私に色々な話をしてくれたあの部屋、病氣の時には屏風を立て、くられた座敷、秋になると丸い玉のついた舟のような形をした實を落す碧梧桐の木、裏庭にあつた、鬼子母神が人の肉の代りに喰べたと云ふ話を聞いて無氣味に思ひながら喰べた柘榴、凡てそれ等の物の形が昔のまゝである中に、どうにかして再びあの家に住んで見たいと思つてゐた。私

はそれから後ち幾度その家の前をそつと通つて見たか知れなかつた。さうして標札が變つた丈  
けで、門の中の植込も、背の高い柏の木も、その儘であるのを見て喜んだ。けれどもやがて塀  
は代り、お菊さんのゐた家は壊されて煉瓦の藏が建つてしまつた。恐らく中の方もすつかり變  
つてしまつた事であらう。私はそれつ切りその家の前を通らない。たゞ私の夢の中にだけ、そ  
の家は残つてゐる。恥しい話だが私は今でも本當にその家を夢に見るのだ。

その年の四月にも、庭の隅の八重櫻の花は咲いた。父はいつもと同じように、母に木の芽田樂  
を作らせて、親戚の者を呼んで花見をした。それからしばらく経つて、私が庭で遊んでゐる時  
に、髯を生やした四十五六と、五十位の人が二人、父に導かれて庭に入つて來た。二人はしき  
りと庭のあちらこちらや、家の中などを見廻してゐた。子供心にも私はその人達が、たしかに  
この家に来る人だと感じた。私はその男が憎らしくなつて、ぢつと睨みつけてゐたが、

『お前はあちらに行つてゐなさい』と父に云はれたので、私はそのまゝ裏の方に行つてしまつ  
た。それから一と月ほど経つて、私達はその家を越してしまつた。新しく移つた家は、丁度も  
との家の裏通りの阪の下だつた。二階家の隣りの小さな家だつた。けれども私はその當座は新  
しい家の珍しさと、近所の子供とすぐに遊べる事が、却つて私の心を喜ばせてゐた。

父はその引越し以來、再び起つ事は出来なくなつてしまつた。もつと浮世の辛酸に慣れ、自  
分の運命に對する洞察のある人だつたら、あれほど困らない中に、早く生活を收縮するか、或  
ひはもつと積極的に進んで、一か八かまでやつつけたかも知れなかつた。けれども父は役所以  
外の世の中も知らなければ、さう云ふ知識を得られる友人も持たない、たゞ家庭に於けるのみ  
の暴君だつた。あとから母に聞いた話だが、父は何でも餘程變な空想を自分の前途に描いてゐ  
たと云ふ事だ。酒でも飲んで機嫌の好い時には、今に王侯のような家を作り、それこそ十二二  
重を襲ねた女達にかしづかせて、榮華のあらん限りを盡したいと云ふような事を云つたさうだ。  
淺薄で利己的な、つまらない空想に過ぎない事は云ふまでもないが、それも一つの時代的な思  
想であつたのだらう。才能があつて特別の地位に生れ、そして幸運であつたその時代の人々は、  
皆な父の空想した事を満足させてゐる。父の空想が満足させられてゐた方が、私には幸福であ  
つたらうか、不幸だつたか、それは私にも判らない。あの暴君的な父が、あの儘に富を増して  
行つたなら、恐らく母も今のように壯健ではなかつたらうし、私の家にはもつといやな悲劇が  
起つたに違ひない。自分が欲した學問の出来なかつた事や、色々な才能に於て世間の人に劣る  
事を考へると、私も正則に教育を受けてゐたかつたと思ふが、私のように弱い性格を持つた人

間は、矢張りそれから後ちに過ぎて来た、様々な苦痛や艱難に叩きのめされた方が好かつたようにも思ふ事もある。けれども唯だ徒らに性情を害するような苦勞や、生活の爲めに自分の欲しない道が無暗に歩かせられると云ふ事は、人生に於て最も厭ふべき精力の浪費であり、生命の毀損である。父に富を増させて暴君にする事もいやであつた。下らない餘計な苦勞ばかりして自分の好きな道を歩けなかつた事もいやである。もつと正しく進める道が人生にはありさうなものだと今の私は考へてゐる。

夢のような父の空想も破れてしまふと共に、私達も歩一步と、今まで知らない生活の道に近づいてゐた。然し過ぎてから考へて見ると、その時は、或ひは斷崖の上に立つて、一步を踏み外さうとしてゐる時であつたり、或ひは退屈な灰色の平野をいつまでも歩かなければならなかつた事が、よく判つても、人はたゞいつも、その日の事を喜び、且つ明日に何かの望みを持つて暮してゐる。私はその小さな家に入つてからも、同じように學校を怠けて遊び、教科書の代りに小説を讀んで暮してゐた。

その中に私は、私の近所に住んでゐて、同じ學校に通つてゐた菅田と云ふ女の子を友達にする事が出来た。何でも夏の夕方のことである。私は家の前の石垣の下で遊んでゐるときにその

子が来た。大人でも子供でも初對面のときには何か改まつた話をするものだ。二人は最初學校の授業の事か何かを話してゐた。それから後は、毎日同じ位の時間になると私は石垣の所に出で行つた。するとその子もいつでもやつて来た。私達は石垣にもたれて、三十分か一時間位、何と云ふ事もなく話をしてゐた。夏の夕方の町の表てが少し黒ずんで来て、空ばかり白く光つてゐる時に、靜かにその子と話をしてゐる事が、私の心を大變和けた。その子は穏和しい内氣な子であつた。髪はその時分に流行つた、引つめにしたおちごに結つてゐた、色の白い眼の大きな、どちらかと云へば寂しい顔の方だつた。私はそれまでに、色々な小説を讀んで戀と云ふ事の、如何に楽しいものであるかと云ふ事を、心の中で色々考へた事はあつたが、いつでもそれは大人のする事であつて、子供のすべき事でもなく、よし又た自分が女の友達が好きであつても、それは戀と云ふものとは違つたものだと思ひ込んでゐた。それで私はその子とも何のこだわりもなく遊ぶ事が出来てゐた。しかし私の心の中にもその時はもう既に女の前に自分を飾る虚榮が明らかに芽を吹いてゐた。私はどうかしてその子に、自分の家へ遊びに来ないかと云ひたかつたが、狭苦しい家の、私達が遊ぶ部屋の隣には、父も母もゐる所へは、どうしても呼んで來られなかつた。それで私は毎日さうして夕方になると石垣の下に出て、その女の子



の來るのを待つてゐる丈で満足しなければならなかつた。その子の姿の見えない日には、私は妙に物足りない寂しさを感じた。そして町のおもてが眞暗に暮れるまで、つまらない顔をして石垣の下にぢつと立つてゐた事を覚えてゐる。それから後ち父が臺灣へ行くようになつてから、私の家は母の里と一緒にゐる事となつたので、私もその子と遊ぶ事は出来なくなつた。さうしてその時はそれをさまで悲しい事とも思つてゐなかつたが、いつであつたか里に行つてゐたすぐの姉が、

『菅田さんは信ちやんがよつほど好きなのよ』

と云ひ出した事があつた。私はそれを聞くとはつとしたが、

『どうして?』と白ばくれて尋ねた。

『だつて信ちやんの方で運動場に行くときは、宮島はどこにゐるの、つて私に聞くんですもの』と姉は笑ひながら云つた。不思議な事にはそれを聞くと、私は急に自分も戀してゐたのだと云ふ事をはつきり感じた。そして今まであゝして話してゐた時に、もつと云ひたかつた事もあつたに違ひなかつたのに、さう思ふと私は限りなく残り惜くなつて來た。

それから後ち私は幾度も、夕方になるとその通りを歩いて見たが、菅田の顔を見る事は出来

なかつた。四五年たつてからその子はまた、私のもとゐた町の通りに越してゐた。矢張り夏の夕方だつたが、私は昔の自分の家が見たくなつて、その町を通つたとき、杉垣の門の前に立つてゐる彼女の顔を見た。けれどもその時はどちらももう無邪氣に口を利くには餘りに年を取つてゐた。私はたゞちらつと彼女の顔を見たゞけで済してその前を通り抜けた。その後ち夏の夜に濠端で、二三度彼女の姿を見た事があつたが、それつ切りもう逢はない。

その家に越してから、父は毎日家にばかり引つ込んで、退屈さうに暮してゐたが、八月の末になつて、夜遅く、父のそこへ電報が來た。私はその時はもう眠つてゐたのだつたが、烈しく戸を叩く音に眼を醒されてからは、寢附けないので、ぢつと様子を眺めてゐた。父はそれから茶の間の方に行つて、ランプの下で長い間だ母と何かこそ／＼話をしてゐた。そして時々『ふーむ』と溜息をついて、頭を抱えて何か深く考へてゐた。

その翌朝父は飯田町にゐる伯父のそこへ行くと言つて家を出たが、それから毎日忙しさうに出歩いてゐた。間もなく私は母から、父が近くに臺灣へ行く事になつたのだと云ふ話を聞いた。父が遠方に行くと云ふ事は、私には幾らか悲しくもあつたが、矢蓋しい父のゐないと云ふ事はまた、私の心を自由にした。それから後ち父のゐなくなる、母と子の七人の家族は、母の

里に同居する事となつてしまつた。引越と云ふ事は、子供の心に不思議な興味を與へるものである、見知らなかつた家、見知らなかつた土地の生活、それは云ひ知れない魅力をもつてゐる。叔母の家にはいつも遊びに行きつけてゐるのではあつたが、そこにはこの小さな家に越して來てから失つてゐた、茶畑や柿の木や杏や李や無花果の木があつた。いつも冷やりとして薄暗い藏のしころ、それから又た更に暗く靜かな藏の二階も、少年の秘密好きな心を満足させるのだつた。私はその二階に、大きな平家蟹の甲羅があつたのが、何か神秘的な關係のあるように思はれてならなかつた。

私達がその家に越して行つて二三日すると、父は臺灣へ立つて行つた。もとならば何事にも仰山な——叔母はよく父の事をさう云つた——父のことだから、立つ前には色々な騒ぎをやりたかつたのであらうが、叔母の家に同居をしてゐる有様では、送別も見送もしなかつた。ただその朝は、夜中ごろから母は起き出して、何かごとく支度をしてゐた。そしてまだ明け切らない薄暗い中に、父は一人で俥に乗つて行つてしまつた。家の者は皆な揃つて門の所まで送つて行つた。私はそのとき、自分が山形へ行つた朝のことを思つてゐた。父の俥が見えなくなつてしまふと、母も姉も泣きながら家へ入つた。私は父に別れた悲しさよりも、曾て自分が遠

くへ行つた時の事を思ひ、そして母の泣いてゐるのを見て何となく悲しくなつた。小さい時から私が嫌いの叔母は、

『まあ信さんでも悲しいのかねえ』と云つて私を冷笑した。朝飯を喰べる時になつて母は、

『お父さんも皆の爲にあんな遠くへお出でなかつたのだから、これからはお前も穩和しくして、よく勉強しなければいけませんよ』としみじみした聲で云ひ聞かせた。けれども私は、午頃になるともう、父の立つた事なものも忘れて、遊びに夢中になつてゐた。

それから後私達はまた間もなく、叔母の家から餘り遠くない家に越してしまつた。その家は叔母の夫の、主人筋になつてゐた人が住んでゐたのであつたが、その人が田舎に行つた間だ、私達に好意で貸してくれてゐるようだつた。

父がゐらなくなつて、恐ろしいものゝなくなつた私の性質は、益々悪くなるばかりであつた。それに又た母も叔母も、私に妙な教育の仕方をした。丁度その頃、山崎の大伯母の弟に當る、村井と云ふ母方の叔父が、麻布から四谷に越して來てゐたが、それが又た妙な福澤流の思想の持主で、藝術などをやるものを長袖と云つて輕蔑し、政治家になるものは馬鹿のように罵り、たゞ獨立した商人のみが偉いと云ふ事を、母にも私にも云ひ聞かせた。さうして學問なんかし

ても何にもなるものでなく、たゞ凡てを實地について經驗しなければ駄目だと云ふのが、その大叔父の持論だつた。

商業と云ふ事は、何か大變愉快な事らしく、まして貿易商人にでもなれば、綺麗な大きな船に乗つて、人の行かない外國などを經廻つてあるくように、單純に考へてゐた私は、かねて父からも商人になれと云はれて心の動いてゐた矢先へ、その大叔父からもまた勧められたので、自分の性格とか商業の性質とか云ふ事に對してはまるで考へる事もなく、すつかり實業家になる事に心を決めてゐた。——自分の性格に合はない方向に、無理に歩を進めて行つたその誤つた目的が、私にどんなに餘計な廻り道をさせたり、益にもならない勞苦の中に自分で自分を苦めたりした事だか判らない。そして最後に性格と職業との間に横たはつた障壁が私をして、本當に自分は生活と云ふものに對して、毛の先ほどの能力も持たずに生れて來たものだと思はせるようにさへなつてしまつた。——眞に人の性格をよく洞察して、まだその人自身すら心づかないような隠れたよき芽を生長させ、若くはその人の進まうとする道と、その性格の間に破綻がないかどうかをよく認めて、伸びんとする方向に誤りなからしめるような助言者は、或ひは必要なものかも知れない。けれどもそれが不知不識の中に、自分の趣好や目的に自分で媚びて

ゐる事を知らなかつたり、或ひは自分の將來に於て利益になると云ふような事から、まだ本當に自分の裡に潜んでゐる性格を本當に掴む事も、この人生に如何に多種多端な生活の方法があるかも知らないでゐるような幼稚な者を、自己の好む所にばかり従はせようとする事は、却つて將來に大きな齟齬を來たさせる結果になるばかりである。——

それは兎も角として、その頃私の周圍にあつた母も叔母も、私が實業家となり、金を儲ける事には無論賛成した。さてそこで、大叔父の持論に従へば、學者は世事に疎い愚物であり、商人となるには學問なんか邪魔である。と云ふのであるから、つまり學問をしてはいけなさと云ふ事になるのである。學校の嫌いな私には、それは絶好の怠ける口實となつたのであつた。その當然の結果として、私の學校に於ける成績は、見事に悪くなつて行つた。けれども私は、たゞ自分の身體が實業の見習即ち小僧に行ける年頃になるまで、家に遊んでゐるさへすれば好いのだと云ふ自信を持つてゐた。私は頓着なく怠け、天氣の好い日には家へも寄り附かずに遊び歩き、近所の家の果物を盗んだり、叔母の家の畑や果實を荒し廻る完全な惡童となつてしまつてゐた。

過度に嚴格だつた父がなくなつて壓力のゆるんだ爲に、私の性質はだん／＼粗暴になつて

行つたが、それと共に非運に傾いた家庭の事情が、私の氣を荒ませたり、憂鬱にしたりした。それと云ふのはその頃になつて、母は恐ろしくけちになつて、何一つとして私の要求を容れてくれなくなつてしまつたからであつた。それは私でも、家がだんく貧しくなつた事も、陽氣の悪い臺灣にまで父が行かなければならなくなつた事情も知つてゐた。けれども私の家はまだ、今日明日に苦しむほど切迫はしてゐなかつた。私はそれをちやんと知つてゐた。しかし今まで自分で家の切盛をした事のない母は、極度に世間を恐れてゐたのであらうか、又た主人の留守の中には、出来るだけ質素にしなけれはならないと考へたのであらうか、私には必要な學校の用品すらなく買つてくれなくなつてしまつた。

それに私の悪い癖で——と云ふよりは寧ろさうなるのが當然でもあつたのだらうが——私は復習と云ふことをしなかつた。そして朝學校へ行く前になつて、時間表を見て道具を揃へる時に、色々と不足な物を發見した。殊に私の級を受け持つてゐた、メツチと云ふ紳名のある教師は、父と同じように極端に嚴格な男だつた。生徒が何か一品忘れてきても、彼はむきになつて怒つた。そして籐の鞭で背中を打つたり、長い間だ教壇に立たせたりするのであつた。學校の物の不足を發見した私はその時になつて、金をくれと母にねだるのだつたが、母はいつ

も、

『何故昨夜の中に云はないのです』と云つて中々金を出してくれようとはしなかつた。

實業家になれと云ひながら、まだ何處かに金を輕蔑する氣持を持つてゐたり、また子供に金を持たせてはいけなないと云ふ事を、都合の好い方だけに用ひようとした母は、私がいくら頼んでも頭として聞き入れなかつた。母も恐らくその頃は、急に貧しくなつた世帯を子供相手の女一人でやつてゐた爲に、餘程ヒステリックになつてゐたのであらうし、それに又た總領の姉と云ふのがひどく意地の悪い女で、母が聞き入れようとする時でも、そばから苦情を云ふのであつた。さうして争つてゐる中に、時間はだんくせまつて來る。理由なしに遅刻しても、用品を忘れて行つても、メツチから怒られる事は一つである。私は何も、自分で行きたいと思はない、また何の興味もない學校へ、メツチに怒られるのを知りつゝ行くのはいやであつた。『買つて下さいつてばよう』と私は駄々つ子のようになだる。

『いけませんと云へばいけません』

『だつて先生に叱れるから』

『それはお前の勝手ぢやないか』と母がはねつけるそばから

『本當に信ちやんはいやな子ねえ』と姉は意地の悪い眼をして睨むのだつた。學校まで行くのに十分はかゝるのに、もう十五分前になつてゐる。私はしまひには自分でも何うして好いか判らなかつた。さうしてとう／＼

『買つてくれつてえばよう』と大きな聲で怒鳴り出して泣いてしまふのであつた。その十五分がたつてしまつて、愈々休むときまつてしまへばまた心も落つくのであつたが、母の方でも恐らく、學校へはやりたし、我儘は通させたくない、でいつも迷つたのであらう。大抵の場合には、母が負けるに極つてゐた。そして

『さ、澤山無駄使ひをなさい、お父さんが臺灣へ行つてらしつやる事も思はないで』と妙な文句を云つて渡してくれた。それは何でもない言葉のようではあつたが、恐ろしく私の心を苦しめた。

父のゐないあとの家庭の憎悪は、たゞ私一人の上に集つた。二日に一度か、三日に一度は朝になつて、私は寝轉んで足をばた／＼させながら、母にねだらなければならなかつた。近所にゐた叔母も、初めの中は止めに來てくれたが、それはやがて珍しくもない事となつたので、誰れ一人來てくれる人もなくなつた。私は家庭に於てばかりでなく、近所の人達からも憎まれる

ようになつてしまつた。山形に行つてゐたとき味つた、變に寂しい焦々した状態が再び私の上にとつて來た。それでもまだ山形にゐた頃は、懐かしい母が東京にゐた。けれども、その母にさへ憎まれるよになつてしまつた私は、もう心の中にすがる人さへなくなつてしまつたのであつた。

その頃の私はきつと、子供らしくない小憎らしい少年に違ひなかつた。母ももう巻煙草を買ふ小遣もくれないので、學校から歸つて來ると、長火鉢の前に座つて、長煙管でばく／＼煙草を吸つた。上の姉がいつもそれを憎らしさうにぢつと眺める。私は面白さうにや／＼笑ひながら、わざと濟してまたばく／＼吸ふのであつた。そして母におやつをねだつて私の嫌いな犬ばんや、薩摩芋などをくれると、

『こんなものはいやだ』と云つた。そして常公と云ふ車夫の家の子供でさへ、小遣を貰つて使つてゐる、だから私にも金をくれ。とねだつた。今まで憎らしいのを我慢してゐた姉は、

『本當に信ちやんみたいないやな親不孝ないやな子はありません』と堪らなくなつたように云ひ出すのだ。それから喧嘩は始まつた。私が姉と争ひ始めると、仲の姉も母も、姉の方に味方をした。女でも皆な自分より年上の三人を相手に争ふ私は、勢ひ亂暴をしなければならなかつた。

自分の旗色が少し悪くなると、私は庭に飛び出して埃取に砂利をすくつて家の中に投げ込んだ事もあつた。窓から飛び出して、運悪く釘の出た溝板で、踏抜をして、泣くにも泣かれず、立ちすくんだ事もあつた。一度は私を押えようとかゝつて來た母を、腰投で炬燵のそばに投げ倒した事があつた。かうして書いてゐても、その時の事を考へると、脇の下に汗が出て來るような氣持がする。私はさうして争つてしまうと、すぐとそとに飛び出してしまつた。家にゐれば面白くもない事ばかりであるが、そとには少年を喜ばせるものが澤山ある。メンコをしたり、濠端で遊んだり、夏になれば蜻蛉を追ひ、冬になれば凧を揚げて、私はどうかしてあのいやな家に歸るまいとばかり勉めてゐた。それだから私は夜になつても復習をする餘裕などは益々なくなつて、朝になつて買物の事から、母と争ふ事が多くなつたのもあつた。

叔母の夫であつた義理の叔父は、いつも旅行ばかりしてゐて家にゐる事は尠ない人であつたが、丁度その人が歸つて來てゐる時に、私が例の通り家で暴れた事があつた。自分の手にはおへないと思つた母は、遂にその叔父を頼んで來た。叔父はいやがる私を連れて、家へ歸つて行つた。それから私に何かくどくどと小言を云ひ始めたが、田舎臭い叔父の云ふ事なんか私は聞かうともしなかつた。穏和な人だつたその叔父も私の強情に呆れたのか、遂に眞剣に怒つてし

まつた。餘り怒つた事のないその人は、顔を眞青にして唇をわな／＼震はせながら、立ち上ると木太刀を持つて來て振り被つた。私はその時は心の中ではびくつとしたが、眞實に死ぬと云ふ事は私にはそんなにいやな事ではなかつた。そして

『僕は叔父さんの子ぢやありませんからね、殺せるもんなら殺したが好いや、叔父さんだつて懲役に行くんだから』と、平氣な姿を裝つて云つた。

『何に、わしは貞吉さんの代りに殺してやる』

と叔父は云つた。氣が強いようでも臆病な叔母は、それを見ると慌て、飛んで來て、

『さ、信さん、早くお謝罪りなさい、叔父さんみたいな人が怒ると本當に恐いのだから』

と私を壓服し始めた。けれども、私には何も彼も悪い所はないと思つてゐた。家へ歸れば皆して仇のように私を扱ふ。家にゐないで、外に遊びに行く事も勉強をしない事も、私は決して悪いとは思はなかつた。私の要求する物を買つてくれないのは母がけちだからである。それが證據には、私は決してよその子より好い物を使つてはゐない事を知つてゐた。私はどうしても謝罪らなかつた。叔父は遂に繁樹と云ふ若い男を呼んで、二人がゝりで藏に入れようとした。私は随分逆らつて見たが二人の大人にはかないようはなかつた。暗い藏の中に投り込まれて、

網戸を引き、土の戸を閉められた時に、私の疝癪は絶頂に達した。私はその叔父や、繁樹などと云ふ他人から、そんな事をされる理由はないと信じてゐた。こんな藏を壊したつて構ふものかと思つて、そこにあつた重い踏臺を持つて、網戸をがん／＼叩き始めた、けれどもそれはただ、金網を五六枚凹ませただけであつて、檜の木の大い格子は、その位の事では壊れさうもなかつた。三十分ほどすると、私の腕は疲れてしまつた。私は少し休みたくなつたが、下の部屋は暗いので、二階の方へ上つて行つた。そこには小さな長方形の窓が明いてゐてそこから流れ込む薄白い光が、埃だらけの荷物や床の上にほんやりと流れ込んでゐた。私は何も彼も様子を知つてゐたので、長持の蓋をあけて、その上に横になつた。燃えるようにほてつてゐた頭や頬を冷たい空気が冷してくれた。そして薄暗い光線が、私の心を落着かせた。私は長い間だ、その布團の上に寝轉んで考へてゐた。どうして私はさう多くの人から憎まれるのか、今まではあれほどに私を愛してくれた母までが、私の云ふ事を聞いてくれなくなつたのが、いくら考へても判らなかつた。長い間だちつとして寝てゐたが、いつまでたつてもその原因は判らなかつた。考へれば考へるほど頭の中がぼつととして幼かつた時の事や、山形に行つてゐた時の事が思ひ出されるばかりで、たゞ何と云ふ事もなく悲しくなつた。私はその時ふと起き上つて窓のそとを

眺めた。金網を張つた戸のそばには、冬枯れて葉の落ちた柿の木が、近々と密つてゐた。その向ふには、家の裏手の垣になつてゐる檜の葉が、寂しい空の中に青くふるへてゐた。何とも云へない不思議な哀愁が、私の心に起つて來た。私はその檜の葉を眺めながらほろ／＼と涙をこぼした。その時ふと、私の本當の父や母は、どこか遠くの方にあるので、今のはきつと、眞實の親ではないと云ふような考へが、何と云ふこともなく起つて來たのであつた。それは本當に何と云ふ取りとめた原因も根拠もなく、たゞ漠然と起つて來た考へであつたが、私にはどうしても、それが眞實であるように思へ始めた。それでなければ何うして父があんなに私を息の根も止るほど折檻することが出來たらう。またあんなに優しくあつた母が、この頃のように私の頼みを聞いてくれないばかりでなく、私が姉と争ふ時は、理が非でも姉の肩を持つ事は無い。さうしてまた叔母にしろ叔父にしろ、親戚と云ふ親戚のものが、男の總領である私を、こんなに苦しめるわけではないのだ、と私は考へた。私の家では姉が生れる前に男が三人生れて、どれもこれも、一月とたゞずに死んでしまつた。女ばかりである爲に、父はその地方に出張して歩いてゐる間に、男の私を貰つて來たのかも知れないのだ——さう思ふと私は、何處か知らない遠い他國に、何をして私を許してくれる眞實の父や母があるように思へてならなかつた。山

形にゐる頃、悲しい時に母を思つたその習癖からか、或ひは又た人は少年の時にこんな事を思ふものか、何れであるか私は知らないが、その櫛の葉を眺めて、私はちつと考へつめながら、云ひよのない哀愁の中に沈んでゐた。

私はもうその藏の中から出たくもなかつた。外へ行つて遊びたくもなかつた。長持の蓋を開けて布團の上にちよこんと座つて、私はいつまでも、そんな考へに耽つてゐた。

やがて窓の外もだん／＼暮れて行つて、櫛の葉も柿の枝もほんやりと見える頃になると、藏の中は全く暗くなつた。それでも私はたゞほんやりと、窓外を眺めてゐた。私が二十位になつた時だつた『日本及日本人』の口繪に、『嗚呼窓外は春』と云ふ寫眞の掲げられた事があつた。誰の筆になつた物か知らなかつたが、中年になつた一人の外人が、牢獄の窓からその景色を眺めてゐる繪であつた。彼の眼は、之れと云つた一つの物象の上には止まつてゐなかつた。漠然とした哀愁に満ちた眼が、たゞ窓の外に向つてゐるだけだつた。私はその繪を見たとき、ふとその藏の中に押し込められた少年の日を思つた。その後大杉君をはじめ尋ねたとき、彼の書齋の壁の上に、その繪がかけてあるのを見て、私は不思議に感じたのであつた。――

下の方では叔父や叔母が、恐らく私の哀訴や嘆願を待つてゐたことであらう。そして私が再

び開けてくれと泣きつくのをきつかけに、戸を開ける考へでゐたのかも知れなかつた。しかし私がさうしていつまでも靜かにしてゐる事が、やがて彼等に何か不安を與えたものと見える、藏の中には彼等の家の物ばかりでなく、質屋の眞似事のような事をしてゐたその中には、他所から預つた色々な物があつた。私を極度に昂奮させてしまへば、それ等の品物をどんなに傷けるかわからない事である。實際私も二階に上つてからさうした變な哀愁に捉はれなかつたら、その位の事はしかねなかつたように自分でも思はれる。――下の方で重い土の扉を開く音と、網戸の靜かにきしる音がした。梯子段をそつと登つてくる足音も聞えた。やがてその足音は私の後ろで止ると、

『信さん』と呼んだのは繁樹であつた。『大層穩和しくなつたね、さもう下に來て叔父さんにおわびをした方が好いよ、ねえ、さ私も謝罪つてあけるから』と私の肩を突つついた。

私はさうして物を云はれると、今まで忘れてゐた口惜しさが一時に胸の中に湧いて來た。私はこんな奴等から、こんな事をされる理由は少しもなかつたのだ。さうしてこの叔父に使はれてゐる、頭の頂天から絞り出すような、金屬性の聲で物を云ふ青い顔をした男にまで、手を持たれたり足を押えられたりした事が、堪え難い侮辱を受けた事のように思はれた。



『何でい、自分達がこんなところへ人を入れといて、あやまれも糞もあるかい馬鹿野郎』と涙聲で罵つた。

『へ、つ、大層な勢ひだね』と繁樹は輕蔑し切つたようにせ、ら笑つた。私はその顔を見ると、かあつとしてしまつて、そこにあつた何か木の片のようなものを、彼の顔を目がけてたゞきつめた。幸か不幸か、それは狙ひが外れたが、

『ふん、私が折角謝罪つてやらうと云ふのにそんな事をするならいつまで、も入つてゐるが好いさ』と捨てぜりふを云つて、繁樹は下に降りて行つてしまつた。勝手にしろと私は思つた。どんな事をしたつて、あんな叔父に謝罪るものか、と私は固く心にきめてまた長持の上に引つくら返つてしまつてゐた。

しばらくすると今度は母が上つて來た。母は長持の傍に立つて、ふてくされて横になつてゐる私をしばらく黙つて見てゐたが、

『本當にお前は どうしてさう強情な悪い子になつてしまつたんだらうね。もう好い加減に心配させないで下へ來て叔父さんにおわびをなさい』と聲をうるませて云ひ出した。その時の母の聲には、昔の通りの優しさが籠つてゐた。それまでにでも母と私と二人きりで家にゐるような

時には、母は決して私に小言を云はなかつた。さうしてそんな時は私も矢張り穏和しかつた。

もうやがて大人になりかけた、氣の強い姉に母はいつも氣兼ねしてゐたが、姉と私の争ひになると、仕方なしに私に小言を云つたのかも知れなかつた。けれども私の方ではさうして母を疑ふほどにまで、母はよく私に怒つたが、それでも姉や親戚の者達は、母が甘いからいけないのだ、といつも苦情を云つてゐた。つまり彼等にすれば、彼等が憎む通りに母も私を憎んだら、私が尻古垂れるか、或ひはもつと善良な人間にでもなると思つてゐたのだらう。愛のない馬鹿な女ほど、いつの世の中でも仕方のないものはないものだ。

私は黙つて立ち上つて、母について藏を出た。さうして叔父や叔母のゐる部屋を黙つて通り過ぎた。

『信つ、これ信つ』と鋭く叫ぶ母の聲が後ろに聞えたが、私は平氣でさつさと家へ歸つてしまつた。私は心から、自分の尊敬しない、また今までも、私の生活と何の關係もなかつたそんな叔父に、又たその叔父に對して何の罪も犯さないのに、謝罪る理由はないと信じてゐた。

藏の中でふと浮んだ妙な考へが、それから後にも長い間だ私を苦しめた。私は毎日さうして學校から歸つて來れば、野原を飛び廻り、近所の果物を盗み、大人にからかひ、あらゆる惡戯

に耽つてゐるのであつたが、それでゐて、時々發作的に暗い憂鬱に襲はれるようになってしまつた。そんな時は何も彼も悲しく、世の中がいやであつた。私は今でも覚えてゐるが、その家の玄關には、赤や紫や黄や青の硝子がモザイクになつてゐる窓があつた。午後の日がそれに當ると、部屋の中には、けばくしい暗鬱な色が漂つた。私はその色を見ると變な氣になつて、玄關に俯伏して、不思議な疑念をどうかして解きたいと思つたり、また眞實の兩親がどこか遠くにあるならば、どんな事をしてそこへ行きたいと考へた。けれども、嚴しくなつた中にも何處か優しさの残つてゐる母ばかりは、何うしても疑ひ切る事が出来なかつた。

今考へると私の家もその頃は、餘程苦しくなつてゐたらしい。近所にも私の家と同じような士族の落魄が澤山ゐた。彼等はそれでも、その苦しさを明けすけに曝け出して、氣安く世の中を送る事を知らなかつた。武士は喰はねど高楊枝と云ふような馬鹿氣た事に囚はれて、娘が煙草の内職をしてゐても、言葉ばかりは、遊ばせと云ふような事を云つて、たゞ昔は如何によかつたかと云ふ事を偲ばせるようにばかり努めてゐた。當時はそんな愚かしい人間も少なくなつたが、彼等は現在の自分の生活を、何うして充實させ、どうして楽しく快活に送るか考へるよりも、たゞ昔をよく思はせる事ばかりに没頭してゐた。さうした見すほらしい淺はかな風習も、

身分とか家柄ばかりを、人間よりも重んじた時代の名残に過ぎなかつたが、私の家も、その御多分に洩れなかつた。母は家の中の生活がどんなに苦しからうと、子供の私達には決してその眞情を打明けなかつた。それはやがて世間に洩れる事を恐れた爲めかも知れないが、その結果は却つて好くなかつた。母自身はそのお上品らしい假面の重さに苦しむと共に、眞相の解らない私には、たゞく疑念を起させるばかりであつた。

母が私の要求を容れてくれなくなつたのは、眞に家が困つた爲めでなく、たゞく母の意地の悪さに基くのだと思ひ込んだ。それが證據には、私の住んでゐる家よりもつと小さな汚い家にゐる、車夫や職人の子供達でも、學校の前の用品店で、彼等の欲するものを豊かに買つてゐた。それなのに、私の家でそれが買へない理由はないと私は信じてゐた。そこで私は強情を張り、我儘を云つて私の要求の通るまで騒ぎ立てたのであつたが、それがやがて皆なから憎しみを買ふ原因となり、私は妙な憂鬱に苦しむ事となつてしまつたのだ。

私はどうかしてその藏の二階で心に起つた疑問を、明かにしたいと長い間考へてゐた。けれども流石に母にそれと訊く勇氣もなかつた。そして又たすぐの姉が、叔母の所に養女に行つてゐるのですら、私達には容易に話をしなかつた事を思ふと、私がよし他所から貰はれて來た

ものにしろ、母は中々話してはくれまいと思つてゐた。私はたゞ自分一人で考へ自分一人で苦しんでゐた。

然し機會は思ひがけない時に來るものだ。何でも母が、ランプの下で夜業をしてゐる時だつた。私はそのそばで何かいたづらをしてゐたが、その時私は不意に

『ねえお母さん、もしかしたら僕はお母さんやなにかの本當の子でないのぢやないの?』と何の造作もなく、ふらくくと尋ねた。

母はその思ひ掛けない奇妙な質問に驚いたような顔をしたが、

『何だつてお前はそんな事を云ひ出すのです』と尋ね返した。

『だつてお父さんはあんなに僕をいぢめて、ちつとも可愛がつて下さらなかつたし、お母さんだつて此頃は、僕を叱つてばかりゐるんですもの、叔父さんだつて叔母さんだつて誰だつて、僕ばかり憎んでゐるんだもの。ねえ、だから僕はきつと何つかゝら貰はれて來たのだと思ふ』それを聞くと母はひよつと笑つた。そして、

『あゝ本當はね、お前は越後の角兵衛の子を貰つて來たのですよ』と笑談らしく云つた。母に

すれば、そんな判り切つた事に眞面目に答へるまでもないと思つたのであらうが、私としては眞劍だつた。けれども角兵衛と云ふ事がどうしても私には受け取れなかつた。そしてそれはたゞ母がそんな事を云つて誤魔化すのではないかとさへ思はれるのであつた。私はそれで執ねく、

『角兵衛なんて嘘だ、本當に僕は何處から貰はれて來たの?え、え、よう』と追窮した。

『本當に角兵衛ですよ、お父さんが越後に出張なされた時、お前を貰つて來なされたのぢやないか』と母はまた笑ひながら云つた。

『えゝ、本當は信ちゃんは角兵衛の子なのよ、だからこんないやな子なのだわ』上の姉は意地の悪い眼を光らせながら云つた。

『姉さんなんか黙つてろ』と私は怒鳴りつけて、『ねえお母さん、本當は角兵衛の子ぢやないのせう』と私は又た眞顔になつて尋ねた。

『何をつまらない事をいつまでも云つてゐるんです。そんな事を云つてゐないでおさらいでもなさい』と母に云はれたので、私はその時は、それで黙つてしまつた。さうして自分でも、決して角兵衛の子ではないのだと思ひ決めようとつとめてゐたが、もしかしたら母がひよつとあの時口をすべらしたのではないかと考へたり何かして、私はまた新しい疑問を一つ増してし

まつた。——それから後も私はその發作的な憂鬱におそはれると、いつも必ずその事を考へるようになってしまつてゐた。

その中に又たいやな學年試験が來た。教室にゐても教師の云ふ事を氣に止めて聞いた事もなければ、復習もした事のない私には、答案の出しようもなかつた。私の答案の五六分は白紙のまま、で出してしまつた。一つには私が字が下手なので、細い筆で小さな字を書かされると、自分でも何を書いたのか判らなくなつてしまふので、私は書くのがいやであつた。字ばかりではない繪も下手だつた。同じ級の生徒が私の繪を餘り笑ふので、雨の降つた日に、一日部屋に引つ込んで、手本に書いた枇杷の繪を熱心に習つた事があつた。さうして割合によく出來たのを翌日學校に持つて行くと、誰か、

『宮島の繪は寫したのだ』と云ひだした。そんな覚えのない私は頭として聞かなかつたが、『これを見ろ』と云つて手本の上に宛てがわれたのを見ると、場所こそ少しづつ違つてゐたが、枇杷の實の大きさは、手本と少しも變らなかつた。私はそれつきり、繪を書かなかつた。讀書や算術は好きだつたが、答案を書くのがいやなので、私は好い加減にして一番最初に教室を出た。さうして誰もゐない運動場で、一人して遊んでゐるのが何となく寂しくつて面白かつた。

それだから私は、及第すると云ふ自信すら持たなかつた。試験の成績が發表されたのを見に行く時も、私は餘り氣が進まなかつた。私は掲示場の前に立つと落第者の名前を見た。そこに私の姓名がないのを確かめてから、及第者の方に移つた。そして直に尻から二三番目の所に自分の姓名を發見したとき、私は何となく不思議な感じがした位であつた。

その頃の高等二年と云ふのは、丁度今の尋常六年に當る。それを終へると、私の級の者の多くは中學に入つて行つた。新しい制服を着た彼等に往來で逢ふと、彼等は得意氣な顔をして歩いてゐた。私は中學に入りたいにも年齢が不足であつた。その翌年になつて漸く一年に入る事の出來る私は、彼等に遅れる事はいやだつた。更に私は學問に對する自信と云ふものを、自分の怠惰からすつかり失つてゐた。私の周圍の者も、私には學問をする能力は少しもないと思つてゐたらしかつた。さうして彼等はそれを以て散々に私を罵つた。最初に學問を輕蔑する思想を私に吹き込んだのは彼等である。それに動かされた私も悪いが學問と云ふものは、學校で讀む教科書ばかりでないと云ふ事は、彼等も私も知らなかつた。それから後三四年たつて、私が本當に自分の智識慾に目覺め、どうかして學問をさせてくれと頼んだとき、父もその他の周圍の者も、私の小學校の成績を楯に取つてどうしても許してくれなかつた。私はその後も、自

分で自分の才能を深く疑つて暮して來た。今日と雖も、私がある當時から學問をしてゐたら、大した學者になつてゐようなどとは無論思はない。然し私は學問を愛し、それに従つてゐさへすれば、可なり貧しい生活にも私の過去に於て経験したほど、あくせくした日を送らずに、暮せた人間だとは信じてゐる。私は自分の少年時代を考へると、何も彼もがめちやくちやで、混亂の中にスタートを切つてしまつたと思はれない。それから後の紛糾も錯雜も、みんなその出發點の誤りから起つた事である。それと云ふのも、私に自信が缺けてゐた結果であるが、何しろ私はその時、十二才にしかならなかつた。

教室の寂しくなつた事も、私を變な自暴的な怠惰な氣持にした。前にも云つた通り學校は、私が小僧に行けるようになるまでの、暇つぶしに來るだけの處である。私はよく怠け、よく暴れた。そればかりでなく私は、その頃になつて金を盗む事を覺えた。最初母は私の成績が悪いのを心配して、蛟龍塾とか何とか云ふえらさうな名前のついた塾に通はせたが、その先生がまたいやに氣障な變な奴だつた。初めて私が行つた時に、先生は自分で私に教へないで、同じ級の生徒であつた、平塚と云ふ子に教えさせた。私はそれが癪にさわつて、母には塾に行くと云ひながら、月謝を持つて射的に遊びに行つてしまつた。間もなくそれが母に判つて、その塾も

下けられてしまつた。それから後私は益々小遣が貰えなくなつた。けれどもその頃私が一番欲しかつたのは短刀だつた。私はあの双の色の澄み切つた、何とも云へない光りを見てると堪らなく欲しくなつた。私はどうかして好い短刀が欲しいと思つた。さう思ふ度びに母方の祖父が持つてゐた澤山の刀を焼いたのか取られたのか判らなくしてしまつた叔母が憎らしかつた。

何ういふつもりで何を探してゐたのだから、火鉢の引出しを掻き廻してゐる時に、私は偶然にも、母の巾着を見附け出した。それは珊瑚の玉がついてゐる母の好きな物だつたが、私はひよつとそれを開けて見ると中に五六十錢の金が入つてゐた。それまでにも私に幾度か、母に短刀を買つてくれとせがんだが、

『そんな物を買つて何にするのです』と一言もなくはね付けられてしまつてゐた。私はその金を見るともう矢も楯も堪らなくなつて、懐にねぢ込んで家を出た。そして金物屋に行つて、白鞘の匕首を買つた。残つた金は何にしたかも知れなかつたが、其晩になつて母に巾着がなくなつたと云つて騒ぎ出されたときの、恐怖と羞耻に惱んだ時の心は今も忘れる事が出來ない。私は實際その時は恐れおのゝひた。どうかして私が取つたと云ふ事を、早く母の前に云つてしまへば、どんなに氣安くなる事が知れないと幾度も考へた。母や姉は、火鉢から箆笥の引出し

や、それ等の物の後ろに埃の溜つてゐる處まで探してゐるのを私は眺めながら、私は母の前に、幾度ひれ伏さうと考へたかわからなかつた。母一人でゐたのであつたら、私はその時潔く進んで白状したかも知れなかつた。けれどもそこには意地の悪い姉がゐた。私は仲の悪いその姉に笑はれたり蔑まれたりするものが苦痛であつた。それと同時に買ったばかりの短刀も惜しかつた。最後に母は

『信、お前知らないかへ』と訊かれたとき、息のつまるような戰慄をちつとこらへながら私は平氣を装つて、

『いえ、僕知りませんよ』と答へた。上の姉はその時白眼を出してちらりと私をにらめた。彼女は恐らく私が盗人であれば満足したのだらう。さうして思ふ存分、悪口を云ひ、輕蔑もしたかつたのであらう。私は盗人であつたがそれを知つてゐた。私は彼女を満足させなかつた。

然しまだ用意の足りないこの盗人は、犯跡を隠す事が巧みでなかつた。私は母が愛してゐた巾着を、あとから知れないような所にすてるに忍びなかつたので、叔母と懇意な『ばあちゃん』と呼んでゐた、隠居の家の垣根の中にそれを投げ込んだ。それから又た、買ったばかりの短刀は、家にゐる時は本箱の中に隠しておいたが、外に出るとそれを誰れにでも見せびらかした。

人の好い車夫の常公爺やは、すぐに

『坊ちゃんはこの頃危い物を持つていらつしやます』と母に告げた。それと同時にばあちゃんは『庭を掃いてゐたらこんな物があつた』と云つて巾着を持つて來た。私の罪はすぐにばれた。母は涙を流し、身を慄はせて、『父は頑固だが正直だ』と云つて私を責めた。私は母には返す言葉もなく恐れ入つた。すると例の姉は、この時だと云ふように

『ふん、今度は泥棒なの、えらさうな事ばかり云つたつて、學校は出來ないし、今に立派になるでせう』と面白さうに皮肉を云つた。私の悪事をしたのは母に對してである。私はそれでなくとも、他の者から何か云はれるのは堪え切れない性分だつた。姉の喜ぶ事を豫期してゐたに、私はそれを堪える事が出來なかつた。

『貴様が餘計な事を云ふな』羞耻と恐怖に極度に押へつけられてゐた疍癩の破裂すると共に私は姉の髪の毛を引つかんで引づり倒した。その時は母の大叔父が來て腕に灸をすへられた。

その後も私は、同級の友人である、道具屋の息子に好い刀を一圓で賣つてやるとすゝめられて、その時は皆の留守をねらつて、金を持ち出して買つて來た事があつた。その時の恐怖と歡喜の交り合つた、暗と光の交錯したような心持は私には長く忘れる事が出來ない。私は自分

の部屋に引込んで、そつとその刀を抜いて見て樂んだ。それは本當に隠れて情人に逢ふような苦しく然し樂しい嬉しさだつた、然しその時もすぐその翌日に窃盜はばれてしまつた。私は口惜しいのを我慢して、得意らしく先に立つた姉についてその道具屋へ刀を返しに行つた。道具屋の店の手前に來たとき、その時ばかりは、どうか自分をあの店に連れて行かないでくれ、と嘆願した。然し姉はどうしても肯かなかつた。目の廻るような耻しさを堪えながら私はその店に入つて行つた。姉は何だかべちや／＼喋言つてゐたが、私には何も聞えなかつた。羞耻の念に、身を嘯まれるように苦しんだその時の思ひを、私は今でも忘れる事が出來ない。

成績の悪い悪童である上に、私はとう／＼手癖が悪いと云ふ事にまでなつてしまつた。母はそれを心配して遂にメツチ先生に私の事を頼んだらしかつた。そのお蔭で、私は毎日學校の時間が終つても、家へ歸る事を許されなくて、先生の家へ引張つて行かれた。さうしてそこで讀本の複習をさせられるのであつた。私はそれには退屈なのにすつかり閉口した。子供にとつては、退屈と云ふ事より外に恐ろしいものはないのである。私は讀書が出來ないのでなかつた。そんな本は買ふと同時に終りまで讀んでしまつた。算術が出來なかつたのでもない。たゞ何か別の動機が私にさせなかつただけである。然し彼等はそれを探さうとはしなかつた。さうして

たゞ一圖に私を出來ないものとして、復習させれば好いと思つてゐたらしかつた。私は面白くもない本をたゞ聲を出して讀んで時間をつぶした。夕方になるとその先生のところではよく葱を入れたから汁を作つてゐた。表ての方で面白く遊んでゐた子供達がもう家に歸る頃になつて、その匂を嗅ぐのが私には悲しかつた。そして自分は歸つてからも、もう遊ぶべき友達もゐない事を考へながら、世の中はどうしてかうまで私を苦しめるのかと思ひ／＼、家に歸つて來た。今でも葱のから汁の匂を嗅ぐと、その頃の事を思ひ出す。

その時分の私の頭は餘程變になつてゐた。私はどうしても、自分をこんなに苦める母や姉が、本當に肉身の者とは信ずる事が出來なかつた。さうして私は、自分が知らない中にいつの間にか、狐にでもだまされて、こんな所に連れて來られたのではないかとさへ考へるようになってしまつた。馬鹿氣た事を云ふようだが、私は本當にさう考へたのであつた。雨のしと／＼と降る、妙な寂しい日であつた。私はそれを考へ出すと、ひよつとしたらこの飯も菜も、馬糞やみいずではないかと思ふと、晝の辨當を喰べるのさへ氣持が悪くなつて來た。どうかして一つ狐なら化の皮をはがしてやらう、と云ふような氣になつて、私は眉に唾をつけたり、自分で背中をどんと叩いて見たりした。そして學校から歸つて來て、門を入る時にまた一つ背中を叩いて

見た。けれども何の變化も起らなかつた。私はまた内心では、もし皆なが狐であつて、私がそれに氣づいた爲に、急にあたりが何處とも知れない野原になつてしまつたら、何うしようかと云ふような恐怖にさへ襲はれてゐた。然しその日は何うしても正體を現はしてやらうと云ふ氣になつてゐたので、門の所で背中を一つ叩いてから窓を越えてそつと靜かに座敷の方へ入つて行つた。そして襖を開けると同時に、

『こらーつ』と一つ大きな聲で叫んだのであつた。二人の姉を相手に針仕事をしてゐた母は驚いて、

『何をするんです』と私を睨めた。

『何だ、皆なそんな顔をしたつて狐だろ、狐なら早く正體を現せ』と私はまだ眞顔になつて怒鳴りつけた。母は呆氣に取られて私の顔をぢつと眺めてゐた。上の姉はすぐそのそばから、

『お母さん、きつと信ちゃんは狂氣になつたんですよ、本當に氣味の悪いやな子ね』

と又た口を出した。何でもどれか一つ擲らなければ駄目だと考へてゐた私は、姉の言葉に好い緒を得た。そして

『貴様が一番いけない狐だらう』と云ひながら、背中を一つ蹴飛ばした。先方にすればそれはた

しかに、言語にたへた亂暴である。姉は怒つて私に飛びかゝつた。そこで又た私は姉と散々に擲り合つた。けれども家も野原にならなければ、母も姉も狐にはならなかつた。私はそれでもまだ安心しなかつた。私は今でも時々そんな氣にふと襲はれる事がある。然し考へて見れば、人生と云ふものもどれが本當の姿なのか、狐につまゝれたようなものでもある。

その頃は私の精神状態に何か餘程の變動が起つてゐたのであつたらう。私は時々一人して、たゞぢつと空を眺めて考へてゐる事が多かつた。椽側に寢轉んで、蒼空に眺め入つてると、私はたゞ何と云ふわけもなく悲しくなつた。理科の時間に初めて教はつた、眞空と云ふことも、可なり私の心を苦しめた。澄み切つた空を仰ぎながら、地球のまわりに二十何里とか空氣があつて、それから先が眞空で、その先にまた世界があつて、また眞空で、と考へてゐると、いつまで経つても果しがなく、やがて頭の中がぼうつとしてしまつた。そんな時には私はよく、昨日まで考へて自分できめておいたところから、その翌日はまた考へ始めた。然しそれはいつまで行つても同じ事だつた。無限に對する驚異の眼が漸く開きかゝつてゐたのであらう。

私はその時分に、母に連れられて眞宗の説教を聞きに行つた。宗教嫌いの父がゐらなくなつて、公然と寺詣りが出来るようになった事が、その頃の母の唯一の楽しみであつたに違ひない。それ



にまた、どんなに悪化して行くかわからないように母の眼に映つた私を、母はどうかして宗教の力で、正直に立ち返らせたいと思つたのであらう。学校の少し下の阪の中途にある眞宗寺へ、或る日私は連れて行かれた。

冷やりとする薄暗く廣い本堂には、もう參詣の人が澤山つめかけてゐた。どれもこれも年を取つた婆さんや爺さんばかりで、私のような子供はゐなかつた。私はつまらない顔をして母の後ろに坐つてゐた。やがて人の好い顔をした説教師の僧が高座の上に現はれて來た。僧は皆に一禮して佛壇の方に向つて、燈明を灯し、線香をたてた。金箔を塗つた扉の内側や、中にある金色の彌陀の立像は、美しく輝き初めた。線香の煙に燻つて少し黒づんでゐるのが、何となく神祕的な重々しい氣を與へる。香の煙は堂の中に漂つて、居並んだ人々の口から『南無々々々』と唱名を唱へる聲が湧き上つて來た。私は何となく落着いた、不思議な心持になつてゐた、説教師はやがて正信誦を讀み、和讃をあけてから、文章を讀んだ。それは何でも『末代無智の在家衆生の輩は』と云ふような、讀出しであつた事を覺えてゐる。お勤めが終ると、僧は參詣人の方に向き直つて説教を始めた。僧は彌陀の慈悲を譬へるのに、家出をした人妻の話をした。女は夫に別れてから唯だ一人して暮してゐても、明けても暮れても夫の許に置いてきた子供の

事ばかりが氣に懸る。やがて女は堪え兼ねて、夫の眼にかゝらないようにひそかにその子に逢ひに行つた。そして寂し氣に遊んでゐる子供の姿を見ると、邪見な夫の事も忘れて、この子の爲には何んな苦勞でも忍ぼうと決心した、と云ふ事だつた。廣大無邊な彌陀の慈悲は、明けても暮れても三途に漂ふ衆生の身を、唯だ一人の我子を思ふ母のように憂へてゐる。五劫の間の御思案、四十八の大誓願、一人の凡夫にして救はれざる限り、我れ正覺の位を取らじと誓ひを立てられた彌陀の慈悲にすがれば、罪障深き我々も現到二世の利益によつて、現世は安穩、未來は成佛疑ひなしと、僧は語りながら、その聲はだん／＼高調に達して行つた。聽聞の人々は水を打つたように、しはぶきの聲一つしないほど、ひっそりと静まつてゐた。薄暗い本堂の中には、甲高い僧の聲ばかりが響き渡つてゐたが、その聲がふと途切れると、『なまいだぶ、なまいだぶ』と早口に唱へる稱名の聲が人々の口から一時に湧き上つた。私は今までに覺えのない、薄暮のような甘い哀愁の満ちた世界にだん／＼に引き入れられて行つた。そしてそばに坐つて熱心に稱名を唱へてゐる母に、濟まないような氣になつた。——僧はまた『されば皆のしゆ』と甲高い聲に力をこめて語り始めたが、細く慄えたその語尾には涙が籠つてゐるように思はれた。『皆さんがたゞ阿彌陀佛救ひ給へと心をこめてお念佛さへ唱へなされ

ば、膿血の流れるこの身體でも、そつくりそのまゝに瑠璃の柱に瑪瑙の家根、珊瑚の床を敷きつめて、池には八功德水の漂つてゐる、有難い御浄土にお引取り下さるのぢや、この恭い、あなた様の御慈悲を思ふたらあけても暮れても、報恩の念佛を口に絶やさぬよう、嬉しいにつけ悲しいにつけ、腹の立つ時も楽しい時も、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、御禮申されなければならぬ事ぢや』と物悲しい歌のような聲で僧は一息に話しつゝけた。僧の眼は、涙が一杯溜つて光つてゐた。聽聞の人々の中にも、しく／＼と鼻をすする者もあつた。そして

『お有難うございます。あなた様の御慈悲によりまして』と語尾はかすかに消えるように呟きながら念佛を唱へてゐる人もあつた。私はその不思議な光景に全く心を打たれてしまつてゐた。そしてそれと共に、幼い時あの靜かな座敷で、母が眼に涙を溜めながら話してくれた、釋迦八相記の悲しい物語が、また新しく私の心に泛んで來た。あの本の終りの方にあつた、簡素な、然し楽しいらしい、極樂の繪が私の心に復活した。

絶え間なき周圍との闘争、焦立たしい孤立、人知れぬ憂鬱、さう云ふ状態の中につまらなく張りつめた心で暮して來た私は、その時はもう疲れ切つてゐたのかも知れなかつた。そしてたま／＼聞いたその説教が、私にやすらいの息繼場所を與へてくれたのかも知れなかつた。私は

その日から熱心な信者と云つていゝか、或ひは又た聽聞者かになつてしまつた。朝起きると私は母のあとに従つて、佛壇の前に坐つてお勤めをした。正信偈も和讃も御文章もすぐに記憶した。阿彌陀經も空で讀むよになつてしまつた。學校が終るとすぐに私はその寺に出掛けて行つた。徳本寺と云つたその坊さんの説教は、それから十日ばかりも續いてゐた。たゞ一つ私にどうしても判らないのは、無限地獄に落ちた者でも、彌陀の慈悲によつて救れると云ふ事だつた。そのほかの地獄には、例令ば一劫の間にか、十劫二十劫と云ふような、それは我々の時間で計り切れないほどの長い間でも、苦患を受ける期間があつた。餓鬼道にも畜生道にも、救ひを受ける機縁があつた。けれども機縁を失つた、浮び上つて來る期間のない無限地獄に落ちたものが、どうして救はれる事があらう？、はつきり理窟を云ふ事は出来なかつたが、私はいつでもその疑問を持ち出しては、母や叔母を苦しめた。然しその人々の信仰は十二歳の私よりも單純だつた。或ひはそんな事はどうでも好いのかも知れなかつた。

『理窟を云ふのは、小乗自力や外道のすることです。そんな事を云はないでお念佛さへ唱へてゐれば、今になにもかも判るよになります』とそれが叔母や母の答へだつた。

説教を聞くよになつてから、私は見違へるほど穩和しくなつてしまつた。母にはそれが何

れほどか嬉しい事であつたらう。その寺の説教が終ると、それからそれへと、或ひは寺や、また在家の人々の家に説教を聞きに連れて行つた。間もなく私は、十二の子供が信を得たと云ふ評判の種になつて、お有難屋の仲間から、奇蹟のように取扱はれることになつてしまつた。私はまた私に信心の動機を與へた徳本寺の住職を家に連れて來た。坊さんは私を自分の子のよう愛してくれた。私はその人にも色々無限地獄のことや何かを聞いて見たが、坊さんは『今に大きくなつて、眞理の學問と云ふのをすると、さう云ふ事もよく判るようになる、今の中は一生懸命にお念佛を唱へて勉強なさい』と云ふだけだつた。

私はそれをつまらなく思ひながらも、熱に浮かされたように、毎日毎日、説教のある所を漁つてゐた。けれどもそれはいつどこで聞いても、話に大した變りもなかつた。報恩寺さんと云ふ、才鈍のような頭をした坊さんは、大變な學者だと云ふことを聞いてゐたが、その人の話には熱がなく、聞いてゐると眠くなつた。私はその單調な説教を聞くよりも何よりも、あの薄暗く廣い本堂に、香の煙が漂つてゐる中に坐つて、黒ずんでびか／＼光る大きな佛壇や、優しい顔をして衆生を招いてゐる彌陀の立像をたゞちつと眺めてゐる方が好きだつた。恐らくそれは本當の信仰と云ふものではなかつたに違ひない。或ひは凡ての所謂信仰と云ふ

ものが、そんなものであるのかも知れないが、私はだん／＼にその説教の單調に飽きて來た。一時は仲の悪い姉の、邪見な無信心を憐れむような心にもなつてゐたが、私には如何なる悪人もまた自分の敵を絶対に許すと云ふような博大な心持にはなれなかつた。また人と争ひながら、すぐそのあとから報恩懺悔の稱名を唱へると云ふ事も、間違ひなく行ふ事は出来なかつた。私はたゞ激情の惰力だけで、母のあとについて聽聞廻りをしてゐるに過ぎないようになつてしまつた。

しかしその時私を、説教場に惹きつける、力強いものがまた一つ現れて來た。どこへ行つても、同じような事を聞かされるので全く退屈し切つてゐた私は、説教師の話してゐる間だ、もう俯向いて涙を隠すような事はなくなつて、いつも聽聞の人々の間を見廻して、涙と共に水涕をたらしてゐる老婆を見て心の中で笑つたり、齒のない口をもぐ／＼させながら、稱名を唱へてゐる老人の口元を見て、自分の心を遊ばせてゐた。けれども或る日私は、それ等の羨び切つた色のあせた年寄臭い人達の群の中に、たゞ一人美しい人の交つてゐるのを發見した。それは年頃は二十四五になる、細面の眼のすゞしい人だつた。その後逢つた時も、いつも頭は銀杏返しに結つてゐた。その人はほかの年寄連が感に堪えないように、お有難うございますと、聲

を揃へてうつ伏せになるときでも、心持袖を合せて坐つたまま、高座の方をぢつと見てゐるか、それでなければ、何か物思ひに耽るように、欄間の方を仰いでゐた。私が初めてその人を見たのは、矢つ張り學校の下の寺の薄暗い本堂だつた。薄汚い年寄ばかりで飽々した私は、その人を一目見たときは、本當に胸がおどるようになさへ思はれた。それに私はその頃はもう、貸本屋の講談本や、小説の類まで讀み耽るようになってゐたので、たゞ美しいと思つてのみは見えてゐなかつた。その人は娘であらうか、それとも若くして夫を失つた人だらうか、或ひはまた姑に連れられて、仕方なしにお參りに來るのだらうか、と様々に考へて見た。そして母の後ろの方から、飽きもせず、いつまでもその人を眺め入つてゐた。私は家に歸つてからもたゞその人の事ばかりを考へてゐた。けれどもそれは、今までに墨染を踊つた女を見て痛はしく可哀想と思つたり『夢の枕』に出て來た人を見て、甘い憂鬱に耽つたりしたようなものとは違つてゐる物思ひだつた。勿論さうした甘い憂鬱も、多分にその中にはあつたけれど、今までにないまだ外の物が加はつてゐた。私はその人の肉を思つた、自分の姉よりも、五つ六つも上らしいその人の腕に抱かれる恍惚を私は空想した。その後ち間もなく私は自慰を覺えた。十三の春である。しかし新しく發見したその悦樂も長くは續かなかつた。その人を初めて見てから、一と月ほ

ど經つて、その人の姿は説教場に見えなくなつてしまつた。それと共に私の聽聞廻りも終りを告げた。私は再びもとの悪童に戻りかけてゐた。たゞその頃の私の悪戯と云ふのは、もとのようによその柿の果を盗んだり、おやつの中から母や姉と喧嘩をしないようになつただけである。その時分私の近所に家を持つた、柳生と云ふ男があつた。それはすつと以前に私のところへほんの少時の間だ、下男代りに來た事のある男だつたが、日清戰爭に人夫に行つて金を残して、軍隊の御用商人をやつてゐた。私はその男の所へ遊びに行くようになってから、大人に交つて花を引く事を覺えた。柳生のゐない時は、女中や手代と花を引いて、夜更しをするようにもなつてしまつた。學校は無論もとの通り怠け通して、貸本屋の講談本をあさり盡して讀んだのもその頃であつた。

私はまたその頃同級の成田と云ふ女生徒に戀をしてゐた。この夢のような話の發端は、私達の級の生徒だけ男も女も一緒に郊外へ連れて行かれた日に始まつた。何でもそれは、うそ寒い日であつたのに、俄雨が降り出したので、教師は私達を百姓家に連れて入つた。そして女生徒は家の中に、男の私達は軒下に立つてゐた。私達はそのとき、ノルマントン沈没の歌や、笠置の山を出でしまり、と云ふセンチメンタルな讚美歌の節の歌を歌つてゐた。しとくと降る雨

と、その歌の節が子供の心を妙に沈ませて、皆なは穏和しく立つてゐた。私の後ろの窓の所に、その成田と云ふ女の子も立つてゐて、私達と聲を合せて歌つた。私はその子の顔を見るとその子も私の顔を見た。少年と云ふものも、案外さう云ふ事には敏感である事は、讀者も恐らく知つてゐるだらう。私はそれから運動場に出て、學校の往復にも、その子にばかり注意するよゝうになつてしまつた。私の家にはその頃、父から送つて來たオルガン入りの時計があつたが、私はその金屬の搔き鳴らす妙にプリミチイヴな哀しい節を聞いては、その子の事を思つてゐた。長い間だ私は思ひ續けた。そして最後に決心して私はラヴレターを書いた。それは男も女も入れ交ぜになる運動會の日に、その子に渡す計畫だつたのである。私はそれを持つて家を出た。遊戯も何も私の眼には入らない位、私はその子にばかり注意してゐた。そして漸くその子が一人して講堂の階段を上つてゆくのを發見した時、私は急いで後を追つた。二三步あとに近づいて、私はシャツの中に隠しておいた手紙を取り出さうとしたのであつたが、その時はもうどこに行つたか、私の手紙はなくなつてゐた。機會を失つた絶望と、誰かに拾はれはしまいかと思ふ羞耻の念が、一時に私の心をけつそりと凹ましてしまつたのであつた。私は眞蒼な顔をして自分の教室に歸つて來た。それは誰れもゐない所で、おどろした氣も沈め、そしてどうかし

てこの悲哀を恢復させたいと思つたからであつた。

同級の生徒は皆な運動場に出てゐるので、誰れも人のゐないと信じてゐた教室の前に私はしばらくと歸つて來た。そしてハンドルをぐるりと廻して扉を開けて、漸く半身が入ると共に『やあ、來た來た』と木川と云ふ大きな生徒が、机の上に立ち上つて、私の落した手紙を振り廻した。彼は何か手紙の中の文句を二言三言喋舌つた。机の下には五六人の友達が、憐れむよゝうな冷かすよゝうな顔をして笑つてゐるのがちらりと私の眼に入つた。羞耻と憤怒に夢中になつた私は、いきなり木川に飛びついて手紙をふんだくつた。そしてあとも見ないで教室から逃げ出した。運動場には春らしい日がうらゝかに當つて、皆なは愉快らしく遊んでゐた。私の出る競技の番も來て、私の名前も呼ばれたが私はもう着物を着て、隅の方に寢轉んでゐた。夢のよゝうな戀はそれつ切りで破れてしまつた。

また例の通りの學年試験が終つて、例の通り尻から一二番の所で私は辛ふじて及第した。同級の生徒はまた恐ろしく減つた。あとに残つたのはもう、中學に行くあてもないよゝうな人達ばかりだつた。教室の中はいやに寂しく窓から射し込んでくる日の影まで、人氣のない机の上をつまらなさうに照してゐるのだつた。今まで力を入れて勉強をした事のない私も、一層張合の

ぬけたような氣持になり、怠け方も烈しくなつた。そして依然として貸本屋漁りと花を引くことにばかり夢中になつてゐるが、どこからともなく忍び込んで来た、云ひ知れない不安が、だん／＼と、心の中に擴がつて行つた。私も矢張り、自分の運命を決しなければならなくなつて来たことを痛切に感じて来たのである。私はその頃よく中學に入つて行つた友達の事に就て考へた。夕暮の町などを歩いてゐて、ふと出會すと私は何となく引け身をさへ感じて、汽車の軌道を行くように順を追つて進んで行くように見られた彼等と、奉公すべき家さへも定まらなければ、たゞ漠然とした商業の見習と云ふ未知な不定な道へ行く自分とを色々と比較して見たりした。そして私はそんな時には、徴兵検査さへ終れば、もう一かどの店の主人となつてゐる自分を空想して、ともすれば不安になり勝の心を樂しませたり、勵ましたりしてゐるのであつた。

私の近所に森川と云ふ子がゐた。その子の家ももとは相當な士族であつたらしいのが、同じように落魄してゐた事が二人の氣を合はさせた。清ちゃんと云つたその子は、私と學校は違つたが、同じ級であつたのがその年になつて私よりも先に學校を退つて銀行の給仕に入つてしまつた。どの友達もどの友達も、皆な中學に入る時に、二人だけが、實地に商業の見習をすると云ふので私達は二人してよく、自分の前途に就て語り合つた。學校へ行つたものに對する、無

意識の反感、それらに遅れまいとする競争心、

『學校なんかへ行かなくなつたつて立派になれるよ』私達はそんな事を云つては慰め合つた。

あと一年だけの學校であると思ふと、私は實によく怠けて遊んでゐた。今考へると私には、その十二から十三への一年が、私の心に急に大人びた様々な複雑なものを、もたらした時のように思はれる。戦捷の影響はいやに武張つた汚い風習を青年の間に漲らした。小學校の門の前には、少年を漁る書生がいつも二三人づゝは私の歸りを待ち受けてゐた。私はそれが恐ろしいので運動場の垣根を越へて逃げ出した事が幾度かあつた。不自然な同性愛の惡風は、私達の間にも流行した。年長の者から追はれる私達はまた、更に年少の者を追ひ廻した。まだ薄暗く賑かだつた夜の四谷の町は、私達の眼には、たゞそれのみに關係した、恐怖と歡喜の巷として映つた。その不自然な風習はまた、私の心に女に戀すると云ふ事は、女々しい罪惡であると思ふ、變な道徳觀を植へつけた。その癖私はどの位心の中では女を愛し慕ひ、欲してゐたのか知れなかつた。私は川勝と云ふ大尉の娘に戀をしながら、その家の塀をたゞいては多勢して、『貧乏大尉、貧乏大尉』と怒鳴つて、その父親を怒らせた。藤岡と云ふ友達の姉と仲が好くなつてから、私は反つてその友達を苛めて苦しめた。つまり夕暮の垣根のそばに立ちながら遊んでゐ

た時、ふと仲がよくなつて、手を握り合つたり、二人の眼で心が通じ合つた事が、却つて私の心に恐怖を起させて、さうした逆な行動に出たのである。私はさうして戀人を作つては捨て、作つては捨て、それからそれへと移つて行つた。一つは私がもうぢきに、小僧に行かなければならない事が、私の心に絶望の氣を興へてゐたのかも知れないが、心の中では血の出るやうに欲しいと思ひながら、戀することを女々しい罪惡のやうに思ひ込んだ變な道德觀が、長い間だ女に接する機會を與へなかつた。

同じ教師に三年間も引き續いて教へを受けたと云ふ事も、私の性格に可なり色々な影響を及ぼしたといふ事を拒めない。メッチと云ふ紳名を持つたその先生に、私は可なり手酷く扱はれた。居残りや、教壇に立たされるようなことは、月に一度か二度位は必ずあつた。一度は習字の時間に遊んでゐる私を發見した彼の疝癩が破裂したのか、虫の居所が悪かつたのか、扇子の柄で私の頭をいやと云ふほど引擲いてから、教壇に連れて行つて兩手を上げて立たせた。上げてゐた手がゆるむと、そばに来てぐんとぶら下げるやうに引き上げるのが彼の習慣だつた。私はまた教壇に立ちながら、教師の後ろから、坐つてゐる生徒達におかめの眞似か何かをして笑はせるのが、こちらの退屈しのぎだつた。その日も私は教壇に立つてゐるとやがて前の方にゐた

友達が、

『やあ、宮島の顔に血が流れてゐる』と云ひ出した。すると、メッチ先生は驚いて、私のそばに馳けつけて、頭の中を調べたが、それは扇の要で少しばかり切れた所から、流れ出た血である事が判つた。彼はもう今までの威嚴も何も一度に失つて、蒼惶として小使部屋に石炭酸を取りに走つて行き、傷を洗つたり、色々といはつたりし始めた。年老て多くの家族を持つてゐた彼には、自分の職責を傷ける恐れが、一度に心を苦しめたのであらう。私の父が家にゐたことであつたらそれはたしかに一騒ぎの種となつたに違ひない。けれども母はたゞ

『お前が悪いからさう云ふ目に會ふのだ』と云つて、見舞に來られない事を手紙に書いてよこした彼に、却つて同情してゐた。

そのメッチ先生は、恐ろしく頑固な日本主義者だつた。歴史の時間に彼の語る處を聞くと、佛敎も外國の邪教であり、孟子のような書物は國體を傷ける悪書であり、更に基督教は外國の侵略政策の手先となるものであつて、その比喩として彼は、基督教に同化させた印度を英國が取る時には、軍艦の船首に十字架を立て、行つた爲に、印度人は抵抗をする事も出來ず、おめくと國を取られてしまつたのだと話した。五十近くなつて、國學院の研究所か何かに通つて

るた彼は、かうして凡ゆる場合に排外思想を子供の間に鼓吹した。彼が佛教を攻撃する場合に私は心でそれを笑つてゐた。然し、基督教の事となると、私はいくらか心を動かされた。キリシタン、パテレンに對する恐れは、その頃にもまだ隱約の間に人々の心を動かしてゐたのである。

それはやがて、私の近所にあつた日曜學校へ行つて、公然と暴れさす動機となつた。私達四人の友達は、日曜毎にそこへ行つて、先生達を苦しめた。何を云つてからかつても教義の手前怒る事の出来ない彼等の張合のないのに私達は苦しんだ。今考へても顔が赤らむような氣がするが、私達の悪戯はだん／＼卑劣で汚くなつた。讚美歌の本をやぶいたり疊をナイフで切り裂いたり、下駄箱の中に痰をしたり、看板を外して溝の中に投げ込んだり遂には井戸の中に小便までした。耻しい事である。それでも彼等は、私達に暴力を加へなかつた。そして何うにかして説明しようとした時に、私は彼等に——キリストは天の神様の子と云ふけれど、天には神様が一人しかゐないつてあなた方は云ふ。けれども一人の神様がどうして子供を生んだのだ。人間は夫婦があつて子が生れるのに一人の神様から子が生れるわけではない、だからあなた達の云ふ事は皆なうそだ——と、聖母マリヤの事すらも知らなかつた私は、平氣でそんなことを云

つた。教師達もそれには困つた。彼等は私達に何一つ説明することも出来なくなつた。私達は凱歌を擧げて歸つて來た。私はこんな風にして、青年時代になつてからも、私と凡そ同年輩の人々が、青年らしい苦悶に悩んで通過した、キリスト教と云ふ一種の門を通らずに過してしまつた。それほどに西洋人の持つほどの、宗教に對する深い反感も持たずにしまつた。けれどもそれはまた一面に私を長い間だ、排外的思想の持主としてしまつた。その損失の方が如何に私に悪影響をより多く與へたか判らない。メツチ先生は不思議に私を憎み且つ愛した。モノマニヤであつた彼はどうかして私の性質を、彼の考へる善良な道に行かせたいと努力してくれた事は私も認めてゐる。けれどもどうも、私には今でも彼に對して好感を持つ事は出来ない。

日曜學校は嫌いであつたが、私は讚美歌と幻燈が好きであつた。憂はしげな顔をして、ヨルダンの川を渡るキリストの後ろに、澄み切つた、夜とも晝とも分らない、幻燈の世界ばかりで見られる青空が、寂しく靜かに蔽いかゝつてゐる色が、今でも私の眼に残つてゐる。

この一年に過して來た不思議なほど目まぐるしい記憶を、書き續けてゐたら、まだ／＼何の位續いて行くか判らない。それはたゞに私の家庭ばかりの事でなく、柴田の小父さんが婚禮の時お酌に來た頭の娘が、戀人があるのに金づくで金持の嫁にされさうになつて、舊式な駕籠



に乗せられて行つた途中で、剃刀で自害したと云ふ話を聞いたのも此の頃の事だつた。私の家の下の方にあつた徳川家に入入をしてゐた武藏屋と云ふ支出し屋が料理屋となつて、四谷の藝妓がその二階で踊りを踊つたり、その翌日にはそれが三枚續きの繪となつて、繪双紙屋の店頭に飾られたのもその時の事だつた。三光稻荷のお神樂で正成が港川で討死をする所や、その首を尊氏が故郷に届けてやる所を見て一晩泣いたのもその時分の事であつた。私はその頃の事を考へると、子供のような大人のような、單純であつたり自分でも驚くほど早熟であつたりした、例令ば赤や黒や黄や紫や、鼠色だの褐色だの、色彩が、あはたゞしく渦を巻いてゐたように思はれる。しかし私はもう、長い間だ讀者の前に示して來た、私の貧しい家庭と別れて、新しい世界に一步を踏み出して行かうと思ふ。

## 第四章

暑くるしい暑中休暇が終つてから、母が私に學校へ行くかと尋ねたとき、私はもう行かないと答へた。私はその頃學校では、とぎすと云ふ綽名をつけられたほど瘠せてゐたが、身の丈は充分伸びてゐた。どこへ行つても小僧として働ける身體になつたのである。實際私はもう、再びあの學校へ行くと云ふ事は心からいやになつてゐた。今までは生徒が一杯になつてゐた教室が、がらんとしてしまつたのを見ると、落伍者のように自分が思はれる。それにあとの半年や一年を通つた處でもとゞく學問なんか何の役にも立たないと思ひ込んでゐたものに、何の利益もなければ、たゞ退屈するばかりだと云ふ事をよく知つてゐた。休暇前に通つてゐた頃も、私はよく櫻の木の生ひ繁つた、女生徒の遊ぶ薄暗い中庭の方を眺めては、妙な寂しい思ひに耽つてゐた。先生ももう、その學校では最上級となつた私達には餘り小言を云はなくなつた。僅かばかりになつてしまつた同級の生徒は唱歌室に集つてよくオルガンを弾いてゐた。私は音符を教はる事はきらいであつたが歌ふ事は好きだつた。私達はよく色々な歌を歌つた。がその間

に、『螢の光り窓の雪』だとか、『思へば尊し我が師の恩』と云ふような歌を、卒業式の準備と云ふわけでもないが、いつの間にか歌ひ出すのだつた。それがまた私の心をたまらなくいやにした。休暇になる前日に、皆なはもう授業も受けないで、香氣らしく遊んでゐた。オルガンの周圍に立つた生徒達は、代り番こに弾いてゐた。誰かゞ彈奏する時には、皆なは検査をするように、オルガンの中を覗き込んでゐた。埃でよごれた窓硝子に、西日があたつて、ほやけたような光が、室の中に流れ込んでゐた。私は妙に悲しくなつて黙つて先にその部屋を出てしまつた。そしてもう再び學校へは來まいと、その時心に決めたのだつた。そしてその暑中休暇の間を、思ひ切り放縱に、出来るだけ面白く遊んだ。小僧に行けば、再び遊ぶ事は出来なかつたからであつたが、實際に私はその後ち、もう再び子供らしい氣持を以て、何の苦勞もなく遊ぶ事は出来なかつた。私は自分の思つた通りその暑中休暇を區劃として、完全に子供らしい悦樂のある世界と別れてしまつたのであつた。

休暇が終ると、私は愈々小僧に出なければならなくなつたのだが、さてさうなつたときに、どんな商賣を選んだら好いかと云ふ事が、私にも判らなければ、母が唯一の頼りとしてゐた大

叔父にも判らなかつた、最初私は横濱の商館に行きたいと望んだのであつたが、

『お前みたいなのが横濱に行けば、人が悪くなるばかりだ』と云つて、その叔父は許さなかつた。たゞ漠然としてゝはあつたが、何うかして貿易商人になりたいと思つてゐた私は、何か外國と取引のある商店へ行くことを強ひて望んだ。鹽原太助を理想の人としてゐたようなその叔父は、それよりも私をどこかの小商人のところにでもやつて、思ひ切り苦勞をさせたかつたのであらうが、私が餘りそれを云ひ張るので、遂には彼も少し計り讓歩した。本郷の青木堂に世話をしてやらうと云ふ人があつたので、私は母と一緒にその人に連れられて、青木堂の前まで行つたことがあつた。けれどもさう云つた人の話も何だかあやふやなものらしく、私は店の向側の、納屋のような所に母と二人で立つて待つてゐた。夕暮近い時だつたが、武力鐘から發散する、西洋のものらしい雜貨の匂が、妙に私の哀愁をそゝつた。その男は少時してから、向ふの店から馳け出して來て、今は小僧がいらないからと云つて斷つた。青木堂の店に入つてゐたら、今この自叙傳を書くときにも、その頃の大學生の生活や何かの事を書けたかも知れないし、私の生活も餘程變つたものとなつてゐた事と思はれる。その後ち、又た丸善の雜貨部へ入れさうだと教へてくれた人もあつた。それには叔父が、あんな所へ行くと社員風になつてしまつて獨

立が出来ないから駄目だ、と云つて反對した。私が自分の好む道に近づけるような機會のある所は、その叔父の爲めにふさがれてしまつたのだ。最後に私は、この自叙傳の最初に書いた、私を背負つてゐてくれた乳母が、その頃奉公してゐた、砂糖問屋に小僧に行く事となつてしまつた。

砂糖屋など、云ふ事は、その話がきまるまで私の夢にも考へた事のない商賣だつた。私は餘り氣が進まなかつたが、母はその乳母がゐるので幾分か、力にもなるだらうと云つて、しきりとそこに行く事をすゝめた。叔父は叔父で、商賣の呼吸さへ呑み込めば、何商賣をしても同じ事だと云つて、その舊式な砂糖屋へ行く事に賛成した。商賣の呼吸と云ふ事が、恐ろしくむづかしいようにも聞えれば、又た、ぢき覺えられる事のようにも私には思はれた。そしてその呼吸を呑み込んでさへしまへば、私は明日が日にも獨立して商賣を始められる。つまり一時も早くそれを呑み込む事が出来さへすれば、成功も致富も思ふが儘につかめると私は考へたのであつた。さうして心算かに學校なんかへ行く人間の、まだるつこい馬鹿々々しい道を進んでゐる事を笑ふような氣にさへなつたのであつた。

商賣の呼吸、馬鹿けた言葉に私はつかまつたものだつた——、安い時に仕入れて高い時に賣る、それがたゞ公然と順當に行くものなら、品物を賣る商人が、何で得意に頭を下げる必要があるだらう。呼吸と云ふ事は、客の顔色を窺つて、成るべくより高く賣りつける事である。體の好い詐欺の法を學ぶのが、商賣の呼吸に通ずる事である。それなのに私はその言葉に引つかゝつて、このつまらない呼吸を探す爲めにどれほど苦勞をした事だらう。それから後の十二三年の間だと云ふものは、私は色々と職業をかへたり流浪したりしてゐたが、結局それはまるで自分の性格とそりの合はない呼吸と云ふものが人生のどこかにあつて、それさへ掴めば何も彼も自分の意の儘になるように考へて——それは丁度山形で女の先生から聞いた隠れ指輪のようなものと考へてゐたのであらうか——徒らに勞苦を重ねてゐたに過ぎなかつた。そして漸くその呼吸は、まるで自分の持つて生れて來ないものだと思ふ事を發見した時には、既に人生の半ばを過ぎてゐた。かうして私は、楽しくなければならぬ青春の時代を益もない苦勞に費すべく、砂糖屋の小僧と云ふ岐れ道の方へ一步を踏み込んだ。

四谷から本所まで、その頃は電車もないので長い道を、母と二人で常公の俵に乗つてゆられて行つた。山形へ行つた時も矢張り常公が私を上野へ連れて行つた。ゆつくりと走る俵の上で、私は今日から過ぎなければならぬ新しい自分の生活を色々と空想した。本所にある本宅の方

に乳母がゐるので、私達は最初その方へ行つたが、すぐに小舟町にあつた店の方へ来いと云はれたので、私達は再びその方へ廻つた。今まで母と一緒にどこかへ行けば、必ず何か少しはもてなされたり、その家の近所で遊び廻るように自分の心にきめてゐたのに、息をつくひまもなく、店の方へやられたのが、私には何だか物足りなかつた。そして私はその小僧に來たのだが、母は何も奉公に來たわけではない、と云ふような不満が心の何所かにひそんでゐた。

やがて私達は小舟町にあつたその店の方に来た。店の半ばは土間になつてゐて、そこに積み上げた砂糖の俵から發散するむつとするような甘い匂が、散らばつてゐる藁屑の匂と交つて、異様な臭氣が店の中に籠つてゐた。帳場格子の中にある番頭達も、算盤の手をやめて、見られない母と子をじろくくと眺めてゐた。母はその店先に手をつけて若主人に

『どうも亂暴な我儘者で困りますが何分にも一つ』とか何とかどくどく云つてから、

『それではお前も皆さんの云ふ事をよく聞いてね』と私に云ひ聞かせて歸つてしまつた。母が歸ると私はすぐに午飯を喰はされた。臺所の隅に薄縁を敷いた上で、

『これがお前さんのだよ』と女中からあてがはれた箱膳を前にした時、私は變な氣持がした。

私の家にゐた女中達も矢張り箱膳で飯を喰べてゐた。私はその膳を眺めたとき、今日から愈々

奉公人と云ふものになつたのだと云ふ事を判然と意識した。母が歸つてしまふと急に物寂しくなつて來て、緋の着物に兵兒帶をしめた姿の、その店先に不調和なのを氣にしながら、私は退屈らしくその半日を、店のとつ先に坐つてゐた。足が痛くなつても、投げ出すことも安座をかく事も出来なかつた。そして店の者や女中達が、

『信どん、信どん』と呼ぶ度に、私はいやな氣持がした。

然しその店は、叔父や母が希望したように私に商賣の呼吸を覚えさせもしなければ、何一つとして彼等の望んだものを私に與へる事はなかつた。好男子であつたその店の若主人は、あらん限りの放蕩を盡す事と、華美な生活の愉快さを私に示してくれた。それから七八年の後にその店は潰れてしまつたが、それは丁度亡ぶべき者が、美の頂點に達した時のようにたゞ華やかな生活を、私に教へてくれただけの事だつた。

と云つて私は決してその店にゐる間だ、その華かさ計りを見て暮したのではなく、血の涙の出るような苦しい眼にも散々會つたが、たゞ私の心に一番深い影響を與へ、そして又た一番慕しい物と思はせたのは、その華美な生活だと云ふ丈けの事である。

私の性分はどう云ふものか、どこへ行つても必ず一人か二人の敵を作る。それがまたその敵